之れを代表す。但見る正面の舞臺金碧燦然巍々乎たりゴッス風の大殿堂淡紅の玻璃窓は夕陽と相映ず。彼方を詠むれば紅紫妍を鬪はする後園に噴き出づる玉泉夏尚秋の如く此處に進歩を移す楚々たる麗人の一群今や愀然として登場す。忽然として現はるゝ國王何の意ぞ虐遇かくの如く殘なる已にして一個の烈婦ありぞ如王を斃して自ら刎ね。劉曉たる糸竹金石或は離れ或は合し哀しむが如く訴ふるが如く觀る者夢みるが如く醉へるが如し。幕竟に下る。何等華麗の光景ぞ。目爲めに眩し耳しばらく聾して場を出づれば其の心裡に殘る所は何物ぞ。宛然我が淫瑠璃劇を觀たると一般邯鄲の一睡俄然として驚き身の夢幻境にありしを知るのみ。是の如きは是れサウジーが『ラ、ルーク』『さらば』『ロデリック、ゼ、ラスト、オブ、ゼ、ゴッス』を始めとして當時の諸作が讀者に與ふる印銘なり。而して英國讀者の實を悅ぶやかゝるたぐひの史詩を讀むにだに多く考證を欲せしかば史詩家は次第に邪路に入りておの〳〵考證に力を盡くし遂には其の作に註脚して夥しき典畧を引援するに至れり。甚しきに至りては殆ど詩歌の本領を忘れ詩によりて正史上又は地理上の知識を與へんと企て事件性情の發展を餘所にして徒らに穿鑿考證の精を誇りき。テーンこれを嘲りて曰く

「自家を全く史詩中に置きて自ら過去の人間となるは史詩に成功するの要件にしてローマン派の本領實に此處に存すハイネの印度を描きデーテの希臘を寫して成功せしは全く此の妙機を得たりしに由る、而もこれ傲慢にしてひとり自國なのみ美なりとせる英國人の爲す能はざるところ」

と。サウジーと共に此の派に屬して其の著なるものと見做さるゝは史的詩人兼史的小說家ヲルター、スコットなり。

スコットは小說家、歷史家、評判家及び詩人を兼ね其の作歐洲の全土に愛玩せられ一時其の名聲ヂルテールを凌ぎ殆ど散文のシエークスピアをもて目せられき。一千七百七十一年八月スコットランドなるエヂンバラに生まれき。生まれて十八ヶ月にして右足跛となりければ療養の爲め地方の親族に養はれて三年を過ごし齡八歲に至るまでは學舍に入らずして田圃の間に年月を送りき。此の間日々歷史上の物語を聞き若しくは俗謠を誦することに耽りき。後ち高等小學に入り中學に轉ず。學舍にあるも常に他の課には心を留めず專ら史談を貪讀し夙にアリオスト、サルヴンテス等古作家の傳奇に通ぜり。後ち法律を學び十九歲にして父を助

けて公務に從ひしが暇を得る毎に史跡を探究し蘇國の舊地を跋渉せしこと前後七回、北蠻が凶暴の跡英雄が苦戦の蹤を詳にせり。是れ皆な後年に至りて彼れが史詩歌の材となりにき。一千七百九十六年始めて獨の名作二篇を飜譯し續いて數篇の自作あり。一千八百五年公然創作家として文壇にあらはれたり。此の年"The Day of the Last Minstrel"を出だす此を世に知られたる史詩の處女作とす。同八年"Marmion"出で同十年『湖上佳人』("The Lady of the Lake")出づ何れも彼れが韻語の名作なり。同十一年より十七年に至るの間"The vision of Don Roderick" "Rokeby"『島君』("The Lord of the Isles" "The Bridal oi Triermain" "Harold the Dauntless" の五篇を出だしゝが(何れも韻語)一作毎に衰靡の姿あり就中『ハロルド』の如きは著く氣魂の銷乏を示せり。此の時に方りバイロン新に大陸より歸り英氣勃然續々雄勁の作を出だし名聲旭日の上るが如く就中其の名作『チヤイルド、ハロルド』いでゝ彼れ殆ど全詩壇に覇たりき。これが爲にや將た他に事情ありてかスコット筆を詩壇に絶ちにき。かくて一千八百十四年はじめて史的小説に筆を着け忽然として未曾有の功を成しぬ。傳によれば此の事たる偶然の些事より起りしものゝ如し。

曰はく此の年の春スコット何がな好詩材を得んと欲してふと手箱を探りけるに古き反古の中より一千七百四十五年中に興りし氏族の由來を覺え書きにせる物を得たり是れ彼れが數年前の手記にして完結にも及ばで打棄て置きしものなり。之れを回讀するうち偶々興來たり禁むべからず即ち之れを種として散文の物語を綴る六週にして首尾悉く全しすなはち"Waevrley"(又の名『最近六十年物語』)と題して試みに世に出だしけるに江湖の歡迎殆ど空前とも稱すべかりき。スコット直ちに"Guy Mannering""The Antiquary"など陸續同躰の物語を著し引續き同十六年より十年間に於て都合十七篇の作を物りたり云々。

然るに一千八百二十六年に至り彼れが關係せる出版會社倒産し無慮十一萬餘磅の負債を生ぜり彼れ之れを償はんとて晝夜精勵四年にして"Woodstock""Anne of Geierstein""The Fair Maid of Perth""Count Robert of paris" "Castle Dangerous" 『ナポレオン、ボナパルト傳』外二篇を著し竟に七萬磅を償還しき。されば驚くべき精根もこゝに盡きてもはや筆を執ることと能はずすなはち其の身神を養はんが爲めに大陸の漫遊を企て一千八百三十二年の夏政府の特に彼れが爲めに仕立てし船に

上りて以太利に遊びぬ。されども時既に晩くまた恢復を望むべからず彼れは死期の近きを知りぬ同じくは故山の土とならん。彼れは急に國に歸り後二ケ月靜寂なる秋の日の傾くと共に家族に圍繞せられて靜かに他界の人となりぬ。齡六十二。スコットは好古の作家なりき起居衣食住、遊戯、嗜好殆ど之れに因せざるはなかりき。其の畢生の目的は封建的家族の祖となるにありき其の著作に從事せしもたゞ此の史的生活の宿志を貫かん爲めなりけり。されば其の作によりて得たりし財もて或は封建風の第宅を營み或は此所に客を集めて屢々封建風の盛宴を開き或は共に山野に獵しき。即ち文學は彼れに取りては第二位のものたるに過ぎざりしなり。アーノルド曰はく「革命思想の全歐を振蕩せし時に方りスコットの獨り之れに冷然たりしは彼れが常識の豊かなりしと、好古癖の盛なりしと社會的改良よりは家庭的和樂を重んぜしとに由る」と。

『湖上佳人』『マーミオン』『島君』(以上韻語)，Fait Maid of Perth" "Old Mortality" Ivanho" "Quentin Durward" の如きは何れも皆彼れが名作當時の人は上下内外を問はず爭うて之れを繙讀し爲めに寢食を忘れしものあり殊に佛國に於いては其の發賣高百四十萬部の上に出できといふ。然れども現今の讀書眼を以て嚴密に之れを品隲すれば此の大史詩家の諸作すらも未だ全く活ける過去を寫せるにあらず服裝地理は精確なりと雖も人物の動作、言語はた概して佳なりと雖も尤も肝要なる感情理想は往々封建期の蠻風にあらで動もすれば近世の開明を暗示す。蓋しスコットはゲーテと異なり深邃に過去に同化して其の神を捕らへ得る作家にあらず彼れの尤も好みし所は過去の風俗なり、出來事なり、武士の氣風なり、古雅の器具なり其の過去の天地を描いて尚其の神に入らざるものある亦た止むを得ざる結果なるべし。

スコット爲人温厚篤實、父として良父たり夫として良夫たり道念堅固の清淨教徒たり誠忠無二の保守黨たりき。而も此は彼れをして自在に其の作中の人物に同化する能はざらしめし所以なり。彼れが作中の封建諸侯の髣髴近世の知事の如く又其の酋長の近世的紳士の如く又其の武士農夫少女等の同じく近代の色臭を帶べる將た恐らくは此の故ならん。彼れが作中の人物は決して中古期に普通なりし殺伐無風流の野人にあらず理を解し義を重んじ且よく文明の禮法に嫻へり。

加ふるに作者の筆、雅に過ぎて自然中古期を理想化せる趣あり史的寫實を以つて彼れが作を目するは當たらざるべし。ハットン曰はく「スコットが小說の特質は個性の猫寫にあらずして公衆の生涯を寫したる點にあり。吾人が讀みて快とするも私人が個性の發揮せられたる點にあらずして諸階級類性の人物が社會若しくは一國の事に與る行動の寫されたる邊にあり」「彼れは勇敢にして洒々たる近代の士風を移して直ちに古代のものとなせり。其の新舊敎徒、武士、猶太人、ジャコビン黨、海賊、敎師、傭兵、乞丐の徒何れも近代のものにあらざるはなし。但し之れが敍狀の精細なるは優かに古今獨歩といひつべし」と。

彼れは驚くべき健腕の作家なりき。意の赴く所筆これに從はざるはなく紙に臨めば千言万句立地に成り精細迂曲の事を敍するに當りても稿を修めず而も流麗暢達毫も澁滯の痕なし時にたゞ冗漫の失あるを見るのみ。

要するにスコットは其の生國スコットランドの盛飾たり。蘇國人の諸特質は殘る所なく其の筆に寫され了んぬ。其節儉や忍耐や其の狡智や其の貨殖や其の生活に慈ならざる風土氣候や其の奇事や其の史跡や皆彼れが如意の筆に上りて廣く世界に傳へられき。實にスコットランド(ランド)はスコットの詩文の土なりき。

ウェルシ曰はく

スコットを以てウォルヂオス、シエリー、バイロン等に比すれば宇宙の神秘を感得する力は寔かに劣りきと雖も其の結構的想像力(ファンタジー)搖盲すれば個人の偏見を脫して全人間の生活動作を現はす包括力に至りては確かに彼等に優りたり。洞察同感の妙機は彼れ未だ完うする能はざりきと雖もよく他を現寫し實を醇化する手腕は直ちにシエークスピヤの堺を驚す但し深大の分析は望むべからず性格及び光景の描寫はた比較的に皮相なり。彼れは其の深底に達するの伎倆なし。彼れが寫せる世界は眞に差別平等を貫ける世界にはあらず遙かに傾ける封建の入日に照さるゝ現今の世界ともいふべく開明なる現今の風を受けて大に粗野の度を失ひたる中世の世界ともいふべし。然れども其の物語の筆致の精緻巧妙なるに至りては古今之れに及ぶものなし。特に風景を叙するに當りては其の豐富なる詞藻を傾けて之れに注ぎ生氣全章に溢れたり。其の健筆其の精進亦た等しく得難き所云々

よくスコットが長短を盡せり。彼れは實に君子人の資質ありき、其の性質の温和なるや如何なる惡人を描くも無情に其の非を暴露するなく多少美むべきの資質を附與せり。此の寛大は頗るアヂソンが諷諧に似、又慈心深く正直なる所は希のホ

ーマールの脈を有せり。さて彼れが創始せし風俗（マンナース）を寫すを主とする物語の脈は其の存生中より稍〻一派をなさんとする傾きありしがオースチン、ブロンテ、エリオット等の諸閨秀及びサッカレー、ヂッケンスの諸作家を經その遺風盛んになりゆき同種の作相ついで世にいでたり。此の派は後に至りては大いに勢力を得許多の俊才輩出しき。

以上略述せるローマン派の特色は二あり。曰はく寫實的曰はく道德的是れなり共に實際的なる英國民の特質より生じたるものに外ならず。唯〻夫れ實際的なり故に文藝復興時代又は十七世紀の大想像力に復する能はず其の作するや醜案するや兎もすれば狹隘なる結構を準として徒らに衣服言語地理等を穿鑿せり。唯夫れ道德的なり故に利用を忘るゝ能はず詩を以て現世を益すべきものとし詩の用は德を彰し惡を懲し敗を矯め悶を慰するにありとなせり。是れローマン派の詩人が後代に與へたる非なる影響なり。而も其の是なる側を觀れば明に詩道擴大の一媒たりき。利弊は相隨ふ豈其の失をのみ咎むべけんや

第三章　哲學派

哲學詩派の特質——英國の哲學詩人——ウォルヅナオスの傳——其の詩論——其の特質——諸家の批評——シェリー——其の閲歷——其の特質——其の傑作

一方に於てローマン派即ち史詩派の興隆せしと共に他方に於て哲學の趣味文學に入りて哲學派とも名づくべき一詩派獨に起こりき。此の派に屬する者も初めは尋常の詩人にして理論家を兼ねたりし所其の特色なりき即ち作するに先だちてまづ詩の本領を論じ若しくは其の作の序文中に自家の主義を辨じ或は新詩形の是非を說けり。然るに必然の結果として此の理論的傾向は次第に其の內容に透入し彼等の詩歌に上る所は概ね哲學的趣味を帶べりき例へば眞理、絕對、人間、罪業などいふ主題是れなり。彼のゲーテの如きは此の側より見るも率先者の大なる者にして其の傑作『ファウスト』は實に此の派の代表たり。而して此の哲學的傾向は轉じて他の美術界にも入り音樂、繪畫、彫刻等皆其の氣脈をあらため來たりぬ。」

さて此の哲學思想のはじめて英國に入らんとせしや英と獨とは其の性を殊にせるが故に多少の凝滯なき能はざりき。蓋し英人の自尊なるや當時の獨國をもて

劣等の國となし特に其の詩人を輕視したり。されば半は好奇心より半は排革命的同情より獨の異樣なる俚謠を歡迎し劇詩を翻譯せしとはありしも國民の偏執と宗教の差異とが藩塀となりて眞に相融會する能はざりき。例へば彼のコールリッヂは頗る獨逸的氣脈を承け熱心に新思想の皷吹に從事せしが現實主義の英國民は之れが爲に動かさるゝ色なかりき。されども大勢は竟に拒むべからず此の哲學的精神いつしか英國の詩壇に潛入しシルレル、ゲーテをこそ出ださゞりけれ彼のウォルヅヲオスの如き、シエリーの如き一種の新詩人を養成せり。

其の詩題の斬新なる其の思想の温雅なる其の觀念の深邃なる其の詩人の天職を意識せる等の點に於て英國詩壇に空前なる者をウィルヤム、ウィルヅヲオスとなす。一千七百七十年四月カムバーランド州なる一村コッカーマウスに生る。其の父は狀師なりき。八歲母を喪ひ九歲にして小學に入りしころはやゝ長閑なる月日を送りしなるべし。小學に在りし時『夏の休暇』といふを作りき是れ最初の作詩なりといふ。十四歲父を喪ふ。かくてさらぬだに富有ならざりしウォルヅヲオス家は家計困難となり同胞家族離散流涙するの悲境に陷りぬ。一千七百八十年(十八才)叔父某の厚意によりてケムブリッヂなる大學に入りぬされど學課に潛心せずして專らチョーサー、スペンサー、ミルトン、スヰフト等の詩文を研究し且伊太利語を修むるに餘念なかりき。業を卒るの前僅かに二十磅を懷にして大陸漫遊の途に上りぬ恰も佛國革命前數年なり。到る處自由革命の聲かまびすしかりしかば氣銳年壯なるウィルヤムは銳く其の心を刺戟せられ宛然新生命を見得たるが如き思ひをなし無限の希望と感慨とを懷にして國に歸りぬ。一千七百九十一年業を卒へて再び大陸漫遊の途に就きロンドンよりパリ、オルレアン、ブロア等を歷遊せり。今や佛國革命は其の頂に達せり。國王は弑せられ秩序紊亂し狂黨妄に權を弄し殘暴至り極まれり。ウォルヅヲオスは其の豫期と希望との殆ど全く破了せられたるを以て憮然として歸途に就きぬ。歸り來たれば生活選擇の必要はたゝちに其の眉を焦さんとせり。すなはちまづ草稿の詩篇を梓す然れども新聲俗耳に入り難く得る所急を救ふに足らず。然るに幸ひにも信友ガルワードといふ者あり死に臨みて遺產九百磅をウィルヤムに讓り切に其の屈せずして詩人たらんことを望みて逝きぬ。ウィルヤム大に感奮しこゝに始めて詩の爲めに命を賭せんと決心し其

の妹ドロシヤと共に居をレースタウンにトし潛心詩の事に從ひぬ。ドロシヤ亦兄を助けて頗る奬勵する所ありき。後ち新詩人コールリッヂと相知り漫遊の資を得んと欲し合作詩集一卷を上梓す而して世間殆ど顧る者なかりき。後ち妻を娶り夫妻コールリッヂと共にスコットランドに遊び當代の名家ウォルタル、スコットを訪ひき。其のころ詩卷を公にせしと二回、社會の冷遇は依然たりき。時にウォルヅヲオスの父に負債ありしロンスデール伯其の負債を還附し且つ更に扶助する所ありしかばウォルヅヲオスの生計やうやくゆたかなり、すなはち益〻勵精して其の天職に盡瘁し爾後五年間に作する所 "The Excusion" "The White Doe of Rylstone" 及び "Peter Bell" 等名篇一二のみならず。而も世間の冷待は依然たりき。一千八百三十年以後に至りウォルヅヲオスの眞價始めて世の認むる所となりぬ。昨は其の作を手にだに觸れさりし者今は之れを誦せざるを耻となせり。千八百三十九年オックスフォオドの大學彼れに贈るに民法博士の學位を以てし同四十二年政府彼れに贈るに桂冠詩宗の榮職を以てせり。ライダー、マウントに退隱して天然を樂しみ窮措大一曜して當代の詩宗となりぬ。

一千八百五十年四月齡四十八にて沒しき。

テーン曰はくウォルヅオルスは第二のクーパーなり才藻少しく劣りたるが如くなれども觀念の深邃なるは遙かに彼れに超ゆ。彼れは幼より多情多感にして自信の念强かりき。其の多感はよく一切物に同情してそこに生命を見出だし、所以其の自信はよく時流に超絶して其の天職を確守せし所以なり。彼れは常に人心內部の感情に囑目し此れを自然界にも推し及ぼし一意此の神靈の影を捉らへんと勗めたりき。夫れ如是思想をもて自然と人事とに接せんか自然や人事や豈情意あるものと見做されざらんや。一株の綠樹はよく彼れに榮枯の念を與へ一朶の行雲はよく彼れに人世去來の趣きを悟らしめき。彼れは兵卒が進行の鼓聲を聞きては英雄の獻身、社會の維持等の事を追想し寒野に草花の咲けるを見ては樂天の眞趣のこゝに存することを認めたりき。畢竟するに彼れは身躰によりてよりは精神によりて生息せし人なり云々。

夫れ詩人の哲學思想は譬へば庭園のかなたにそびゆる遠山の如し或は木の間より或は籬の上よりよく其の影を見はす。風雨になやみてはクーパーの沈鬱とな

り電光に激してはカーライルの熱罵となり朝霧に被はれてはウォルヅヲオスの沈靜となる。然りウォルヅヲオスは沈靜の人なりき。思索、夢想、讀書、散步悉く沈靜なりき。夕べの霞のどかに湖面を渡りて對面の暮靄模糊たる時獨り水涯を徜徉し書齋の硝窓に燈火のあらはるゝを見て家に歸れば可憐の少妹は之れを迎へ斷琴の心友は待つこと已に久し。是れ彼れが得意の生活、又其の適意の詩境なりき。蓋し平湖波靜かなる日常の出來事は彼れに詩思を供して餘りあり怒濤澎湃たる浮世の大海は彼れのむしろ恐るゝ所なりき。彼れは亭午の詩人滿月の詩人にあらで薄明微月の詩人なりき。さて此の性格より自然に湧き出でし主義に曰はく

「我れ等の主とする所は心的生活（セリフライフ）にあり我れ等は世俗に此の主義を會せしめざるべからず讀者を動かさんとせば宜しく其の心に訴ふべし猥りに華麗なる服裝を用ひて彼等の目を眩せんは陋なり。時尙の雅言は遍通の妨碍なり詩の散文に近きは咎むべからず俗語野言却りて可なり其の主題の如きも田舍の考媼、市中の乞丐、野童、走卒、皆妙なり。畢竟詩をして貴からしむるものは貴人を題となすが爲にあらず用語の綺麗なるが爲めにもあらず唯感情の眞なるにあり。人の詩を讀むは言辭の美なるを學ばんが爲めにあらで思想の美しきを樂まんが爲めなり」と。

ウォルヅヲオスが主義の一言以て之れを蔽へば、精神的なり、彼れは詩を以て社會を薰陶し以て所謂心的生活に到らしめんことを期せしなり。彼れ嘗ていへらく

大なる詩人は凡て教師なり余は教師として賞ばれんか然らずんば寧ろ何者とも思はれざらんことを願ふ

と。テーンは其の主義のやゝ極端に流れたるを見て譏りて曰はく

此の主義面白けれど其の讀者の每に作者と同地位に在らざるべからざるを如何せん。換言すればウォルヅヲオスを解せんとせば必ずや俗事を捨てゝ泉聲に耳を洗ひ行雲に眼を露らすこと數くとも十年而して後に繙くにあらずば覺に其の妙趣を會するを得ざらん。彼れは纖弱なる手よりの糸を以て天下の衆心を搖了せんとす血肉ある指の一たび之れに觸るれば忽ち斷れ〳〵となるを知らざるなり。彼れが作の半ばは實に小兒らしき物なり無氣力なる感情を無氣力なる詩体を以て歌へるものなり。かゝる詩卷を通讀するばかり世に心たゆまるゝはあらし。小猫枯葉を玩べば忽ちにして哲學思想に念ひ及び滔々八十行の詩篇をなすこの分にては使ひ古しの靴刷毛もよく吾人に大哲理大詩歌を與ふるならん。豈嗚呼ならずや」。「要するに彼れが思想は餘りに狹隘なり彼れが詩は日常の平事のみ未だ以て全人間の大活動を現するに足らず。

と。テーンの嘲笑も一理無きにあらねどウォルヅヲオスの大なる所以は其の作物

の巧拙の上にのみ在るにあらず、むしろ深く詩人の天職を意識して生涯を詩歌に捧げし所に在り。古人の卑細として筆を着くるに及ばざりし(寧ろ着くる能はざりし)自然界人間界を看取して能く其の美處を發揮せしにあり。彼のポープ等がわざとらしき擬古彫琢に反對して活天地を歌ひ活言語を用ひ而も優かに風韻を具へ露骨粗笨に陷らざりし所にあり。「自然に歸れ」といふ時勢の呼び聲に和しながら(バイロン、シェリーなどの如く)過激の他端に流れずして長閑なる自然主義を建設せしにあり。彼れは他が粗笨乾燥となせる事物を取りて之れに與ふるに燿々たる靈氣を以てせり。彼れの物を描くや平易素樸うち見たる所一の藏する所なきが如くなれども而も沈思默誦忽爾として其の神に會するに及びてや津々たる幽趣掬すれども盡きざる概あり。其の主題の狹少なる何かあらんや。アーノルドは激賞して曰はく「余は確信すウォルヅヲオスはエリザ朝より今日までの間にてシェークスピヤとミルトンとを除かば第一位を占むべき詩人なり。否之れを大陸の詩人に比するもモリエールの死後たゞゲーテを除きては之れに匹敵する者なかるべし。レッシング、シルレル、ハイネ、アルフェリ、マンツォニー、ラシーン、ブルテール、ユーゴーの如き何れも天才の詩人にしてウォルヅヲオスの企て及ばざる長所ありと雖も其の作全躰を取りて之れを觀るに其の感銘力、其の趣味、其の品性及び其の清新の氣に至りては到底ウォルヅヲオスに及ぶ能はず」。と。

アーノルドの評はやゝ溢美の嫌ひあれど清新と高潔とは此の作家の爭ふべからざる長所なり。此の特長のあらはれたるもの小品にもあり長篇にもあり彼の『ゼ、エキスカルシヨン』の如きは其の大篇なるもの也。『ゼ、エキスカルシヨン』は「漫遊記」の義なり。著者が信心深き蘇國の一行商と共に旅行せる其の途次の談話を筋とす。此の作のはじめて出でしや當時の批評家ヂュッフレーは之れを「爲すなきの駄作」なりと嘲りバイロンは「眠たく煙たき厭はしき作」と罵りき。然れども是れ時人の未だ彼れが詩の眞味を解し得ざりし時の盲評にして今日に至りてはウォルヅヲオスに服せざるテーンすらも之れを評して「識りていはゞ鈍く重くるしき説教に類したる作なれど其の思想の純潔にして高上なる如何なる贊辭も惜しからず。實に此の詩は彼れが宗教上の理想をも英國の人種氣候をも圓滿に現はせるものと云ふを得べし。要するに此の作はプロテスタントの寺院の如し變化も裝飾も

なけれど其の高大なるは否むべからず」とたゝへたり。但し『エキスカルシヨン』と『プレリゥド』とは彼れが最大の作なれども最好の作とは稱すべからず最好の作は却りて其の短篇の中に多し。

長篇の作は『エキスカルシヨン』の外に『ライルストーンの白鹿』"The White Doe of Rylstone")といふあり、又短篇にて名高きは『泉』『マイケール』『雛菊に』『呼子鳥に』"Lines composed a few miles above Tintern Abbey" "The Solitary Reaper" 『我等は七人なり』『ラオダマィヤ』『義務の歌』などなり。

人の新知識が現象と化して言語文章に現るゝや種々の方面よりす而して或は同時に反對の方角よりすることあり。彼の擬古時代にはスヰフトとアヂソンと剛柔相面し今又哲學的精神の時代に於てはウォルヅヲオスとシェリーと相因みて相異なる相を呈せり。前者は保守的説教者、後者は社會的夢想家なり。

シェリーはウォルヅヲオスと共に所謂哲學派を代表せる第一流の詩人なり富有なる男爵の子にして爲人多感多情、容姿端麗、智能早熟、幼きより尤も壯大豪宕の美を愛し絶對圓滿の幸福を慕ひき。放縱にして人に屈せざる性質なりしに學校に於ける例の壓制はます〳〵彼れをして反挑の念を起さしめ、屢〻教師及び年長者と爭はしめき。彼れは夙に反逆者を以て目せられたりき。こゝに於てや彼れは自家が經驗せる壓制を以て社會全躰を推斷し己が無垢の心を以て衆の心を忖度し個人はすべて善良なれども社會は常に邪まなり故に先づ矯正すべきは社會なりとなし、此の初一念燃ゆるが如く或は共和説を主張し或は共産の主義を唱へ國王、僧侶、上帝の名は其の實と共に皆廢せざるべからずと論じき。此の過激の論の爲に學校を逐はれ父に勘當せられ世人に嘲り罵られて彼れは竟に英國を去りぬ。其の眼は長永に和風麗日の理想世界に向かへるも身は常に悲雨慘風の苦境に在りき。燃ゆるが如き改革の念は此の逆境に激せられて更に愈〻猛烈の度を加へたり。彼れは其の師友ゴドヰンが絶對的改革説即ち『政治的正義』中に見えたる主義を殆どさながらに實行せんと欲し其の言行愈〻極端に奔りたり。ドーダン氏評して曰はく

シェリーが眼は自ら描ける空想界の影象の爲めに眩惑せられ過去幾代の遺業は之れが願る能はざるに至りぬ、然れども彼れが詩歌の最も力ある中心は正、眞、愛、美等にあり。此等理想に對する彼れが高上なる志望の其の讀者を鼓吹感動する力は庸常作家の企て及ぶ所にあらず況や恐怖と反動とが全歐を震盪せんとする時に當りて件の理想を持して新

社會を建設せんとせし榮光の燦々たるものあるに於てをや。」

と。所詮彼れが作中の人物は皆此の空想界中の動物なり人間以外若しくは人間以上の物たり。彼等の頭は尚未だ天に接せざれと脚は已に地を離れたる觀あり。『小仙女王マッブ』"Alastor" "The Revolt of Islam" "The Prometheus" 其の他の作何れも然らざるなし。是れ蓋し其の理想界の天にあらず地に在らず煙の如く雲の如く虛空に漂蕩なりしに由るなり。

斯かる理想を標準として現世間を觀察せんか聞睹の事物悉く皆汚穢ならんのみ。シェリーが其の慰藉を自然に求めしは固より其の所なり。行雲や巖石や牧野や彼れが詩眼に映じては無上樂土の影を現ぜり。彼れは處女の嬌顏よりも曙光の清く美しきを愛し百万の歡呼よりも怒潮の壯にして大なるを好みき。漠々たる不毛の荒野も無心げなる雲雀の聲もよく彼れをして造化の平和を悟らしめ無限の神秘を冥想せしめき。彼れが情思は時としては太古の詩人に似たり其の想像の鋭きや或は電光を火鳥となし或は白雲を天馬となせり。蓋し此の不可思議的遊神の技倆あるもの恐らく英國にてはスペンサーとシェークスピヤとの外只一のシェリーあるのみならん。ドーデン氏又曰はく

シェリーは神興の白熱を以て其の詩を作爲す。光燄萬丈生氣辭句に溢る眞個天馬の大空を奔るが如し。彼れは神興を尊びて反省を卑しとし尊つて其の詩を推敲せしことなし。又其の少時の作を保存せしことなし蓋し其の少年期の我れを知り過去の殘れるを繼紹し若しくは思想境遇の歷史を尋れ求めんとする念無けれ.ばなり。されば彼れの如きは假令長命したらんとも其の眼は當に前にのみ向へるが故に過去の作の如きはすべて忘却し了りしならん。

と。以て彼れが詩脉を察すべきなり。

彼れが作中名高きは千八百五十三年に物せし "To a Sky lark" なり詞調意共に高遠、千古の傑作と稱せらる。同年の作中尚 "The Witch of Atlas" "The Cloud" 『有情の草木』(ゼセンシチーヴ、プラント)などあり皆有名なり。此の中『有情の草木』には草木の精相集まりておの〳〵其の情思を語る而して此等空想は悉く是れ作家が空想蓋し彼れが眼には無心の木石もまた皆精神を有せしなり。げにや或哲學的思想を以て見れば宇宙の萬物は皆一の精靈なるのみ而して善く此の精靈を察して熱心に之れに近かんとするは是れ近世詩壇の著き傾向にしてカムベル、ウォルヅヲオス、キーツ、バイロン等いづれも此

の氣脉を呼吸したりき。

以上略述せる諸作家はおの〳〵其の方面を殊にして行動せりきと雖も其の歸は時勢につれておのづから相一致しまづ文學に端を發き終には宗教上社會上に精神的革命を促し來る媒となりにき。

之れと同時に他方に於ては形而下の諸學も大に開け天文地質、博物、人類などの諸科目に月に發達せり而して新批判法はた獨乙より入り典經まづ嚴査せられて蘇國の學者信者舊妄信を破るに卒先し宗派次第に融會せんとせり。是に於て近世革命思潮は全く文學界を浸潤し五十年間にしてシドニスミス、アーノルド、マコーレー、カーライル、ミル、テニソン等相續いで出で宗教に社會に歴史に哲學に批評に詩歌に小説におの〳〵局面を改め來たり所謂ボクトリヤ大學の一大潮流をなすに至りき。

第六章　バイロン

バイロンの畧傳——其の諸作——其の爲人——其の詩人としての位価——其の惑化影響——其の一時歓迎せられし所以

第十八世紀の詩風に反動して起りし新詩派が一方に勢力を得んとせし時に當り詩風は舊態を本じながら思想はあくまでも革命的、破壊的なる新詩人として雷名スコットと相ならび一時全歐を震盪せし者あり。たぞやジョールジゴルドン、ノエル、バイロンは是れなり。

バイロンは一千七百八十八年英國の首都ロンドンに生まれき。父チョンは常て有夫の婦と手を携へて他鄉に走りやがて之れを虐遇し其の財を奪ひ竟に異邦に狂死せし不義放逸の無頼漢なり。母をカザリン、ゴルドンといへり凶性の奇矯なる其の夫に讓らず執拗多感愛憎常なく激すれば狂せるが如く衣帽を寸裂するを常としきといふ。夫に棄てられたるカザリンは幼兒を抱きてアベルチン州に退きそれより數年の間僅かの收入を以て辛うじて母子の露命を維げりき。バイロンは全く此の母の手一つに育てられて其のいみじく端麗なる容姿と共に不羈多感の性質をさながらにうけつぎにき。親子屢〻相抗論せしや母は烈火の如く怒りて有り合ふ火斗火箸などを手當次第に投げ付けしことあり而して子は流石に抗し得ざりし丈けに胸中の憤懣燃ゆるが如く時には小刀を取りて咽につき立てんと

せしこともありきといふ。或時口論の激しかりし後ち母子互ひに他の自殺せんを危むこと甚し、密かに藥舗にゆきて問ひけらく今がた毒藥を求めに來たりし者なかりしかと。其の幼時の境遇を想像すべし。

バイロン十一歳の時其の大叔父ジョルヂ其の親族と一酒舗に爭鬪して非命の死を遂げしかばバイロン圖らずも其の莊園邸宅を承繼し且つ男爵の榮をも得たりハアロウの小學校に通ひそめしは此の時よりなり。本來傲岸なりしバイロンは他の下風に立つことを屑しとせず忍苦勉勵日夜讀書に汲々たりき。此の傲慢と共に著かりしは其の友に對する情誼なり。彼れは幼少より其の友の爲めには勞苦をも財產をも惜まざりき。後年以太利に遊びしや年々四千磅を費せり而して其のうち一千磅は全く友を援くる爲めに消費せしものなりきといふ。バイロン又たダンテと同じく幼うして已に戀を經驗せり。八歳の時既に一少女を慕ひ十二の時には其の從妹を戀ひ爲めに「眠むる能はず食ふ能はず又た安息する能はざりき。

クムブリッチの神學校に轉ぜしや不羈放縱常に校則を輕んじ頻りに雜書を濫讀せり就中東洋の歷史旅行記を愛し既に其の頃より東洋漫遊の希望を抱きぬ。

一千八百七年十九歳にして『閑日月』("Hours of Idleness")と題せる一篇を公にせり是は學校に在りし間により〳〵詠み出でし小詩を集めしものなり。而して『エヂンバラ評論』之れに對して酷評を加へしかばバイロン大いに憤激し一千八百九年『英國詩人と蘇國批評家』といふ一冊子を著し『エヂンバラ』記者はいふに及ばずあらゆる當代の文士を嘲罵したり。此の年大陸漫遊を思ひたち西班牙、希臘、土耳古幷びに東洋の諸國を巡歷し目馴れざる風俗山水奇事人情を見聞しおもむろに其の一世の大作『チャイルド、ハロルドの巡歷』("Childe Harold's Pilgrimage")を著はさんの準備を爲しき。此の漫遊中も其の失戀の病苦を忘るゝ能はず世を厭ひ世を憤る念漸く盛んなり此の篇の主人公ハロルドの如きは明かに作家の照影なり。一千八百十一年本國に歸り翌年『ハロルド』の首篇二を出だしき。此の作大いにもてはやされ詩名忽ち英文壇に喧しく識者俗人を問はず異口同音に作者の大才を嘆稱せしかばバイロンは一朝にしてロンドン詩界の泰斗と仰がれ當時の詩宗スコットすら其のしりへに瞠若たるに至りき。

一躍して文壇の首位を占め都門の交際場裡に榮光を擅にせしこと凡そ三年其の間上院の議員となりて議場に演說を試みしことも前後三回又た日々に宴樂を事とし時には痛飲夜を徹せしこともありき。この間『不信者』"The Giaour"『アビドスの新婦』"The Bride of Abydos"『海賊』"The Corsair" "Lara" 等の作あり。一千八百十五年齡二十八歲にして妻を娶る、妻夫が行爲の律なきに驚き狂ならずやと危み竟に醫師の診察を請ひて其の狂ならざるを知りて益〻驚き遂に意を決して離婚す。其にあること僅に十二ヶ月なりき。而して此の離婚に關しては社會バイロンを責め、罵ること甚しかりしかばさらぬだに世に不平なりしバイロンの如何に業火を燃しゝかは此の折著しゝ『コリンスの園み』"The Sige of Corinth" 及び "Parisina" 等の詩篇によく見えたり。勢ひかくの如くなりしかば彼れは遂にロンドンを去りて再び大陸を漫遊し行く〳〵瑞西、希臘、以太利等にて口を極めて英人の宗教、政治、道德を罵り其の鬱憤を洩らしゝが是れより肆に酒色に耽り漸く背德の行ひあり。ゼチヴにて『チヤイルドハロルド』の第三篇(以下エニスにて完結)『シーヨンの囚人』"The Prisoner of Chillon" "Manfred" 及ひ『クツソーの嘆』等を著はす。一千八百十八年より同二十一年まではエニスとラヱンナとにあり此の間其の行ひ蕩佚不羈更に甚しきを加へたりき。著はす所 "Don Juan" の首五篇及び悲劇『マリノファリエロ』『サルダナパラス』『エルチロ』『クイン』等あり。彼れは頗る健筆の名あり四日にして『アビドスの新婦』を成し十日にして『海賊』の稿を脫しき。さもあれ平素詩歌を本領となすを悅ばず常に詩人を輕視し詩歌を瓦礫視し當代の詩歌を罵り自作をすら取るに足らずと稱し且つ人に語りて曰はく「我れにして今ま十年の命あらば世人は必ず詩作以外に我が本領を認むるを得ん」と。幾程もなく希臘國民の其の祖國の獨立を圖らんが爲めに一團の義勇軍を起こすに會すバイロン大いに悅び直ちに航して之れに投じ熱心に其の業を扶けしが事未だ央ならざるにマラリアの熱の一種に罹り一千八百二十四年四月十九日齡僅かに三十七を以て鬼籍に入りぬ。遺骸は本國に送られて累代の墳墓に葬られき。

バイロンは主觀詩人の標本なり。彼れは甚だ狹量にして其の心內の擾亂を自制するの力なかりき其の煩悶し憤激するや言行に現れざれは詩歌に現はれたり。アーノルド曰はく「彼れの詩は他の詩人のゝ如く先づ腹中に種子を生じてこゝに

生長しさて後ち一の躰となり生れ出でしものにあらず。此の點に於て彼れは美術家の資を欠きたり彼れは自制の力を欠けり。彼れは自らもいへる如く其の胸中物あるの苦を免れんが爲めに詩を作せしなり抑へがたき鬱勃の情やがて其の詩歌となりしなり」と。宜なり其の作の何れにも作家の面影の歴々たること。彼れはまた熱血の男兒なりき故に其の世に慊らざるや厭くまでも之れを痛罵せざるべからず而して其の語極に馳せて甚だしき反擊を世に受くるや彼れは益々怒り益々激し世の己れを容るゝまでは戰はんと欲しき。夫れ情の强きは主觀詩人の常なりと雖もバイロンの如きはあまりに甚し。彼れは笑ふ能はずして泣き、泣く能はずして怒りき。其の怒るや濫せり蓋し彼れが情は毫も智の判裁なき情なり、彼れが智は其の情を制する力なし。ゲーテ曰はく「彼れは自身甚だ闇黑なり反省の瞬間には稚童の如し」と。然り彼れは分別の力乏しく隨うて分明なる理想なかりき。彼れが世に對する衝突は理想と現實との衝突にあらで氣質と世習との衝突たるに近し。彼れが好尚はた甚だ粗雜なりき其幼より聖書を喜びしも新約の眞面目なるを愛するにあらで舊約の神怪なるを悦びてなりき。彼れの多情は情慾のみ宗教及び審美の高等なる情緒は頗る貧なり。然れども彼れが熱誠に信ずべき者あり其の言辭狂愚に類せりと雖も句々衷情より迸出し間々鬼神を泣かしむる概あり。アーノルド曰はく「バイロンは技術家に必要なる事件を聯綴し性格を發展するの伎倆に乏し而も個々の事件事物をば甚だ明瞭に想像し其處に其の身を投じて恰も目睹せる事實の如くに描きいだし以て他人をしてさながらに目睹せしむ」と。極言すれば彼れは創才を欠けり彼れが作は此の見聞を敷衍せるものたるに過ぎず。彼れ曰はく「予は親しく經驗して基礎あるに非ざれば何物をも書く能はず」と。彼れが描ける人物に同一樣なる性格を成し且つ其の事件も其の閲歴の範圍を出でず。『ハロルド』『ラ、』『海賊』『不信者』『マンフレド』『ケイン』『ダッソー』其の他の人物何れもたゞ景と裝とを殊にせるまでにて畢竟は同一人なり。蓋し彼れは己れが理想觀念を平叙する能はざるを以て常に事件と動作とを借りて之れを描寫せんとしたりしなり此の事件動作に與る人物は必ず彼れが化身なるを以て彼れは常に件の事件動作を擇ぶに(勿論其の閲歴中より)最も慘烈なるものを以てしき。『アビドスの新婦』『不信者』『海賊』『ララ』『パリサイナ』『コリンスの

生長しさて後ち一の躰となり生れ出でしものにあらず。此の點に於て彼れは美術家の資を欠きたり彼れは自制の力を欠けり。彼れは自らもいへる如く其の胸中物あるの苦を免れんが爲めに詩を作せしなり抑へがたき鬱勃の情やがて其の詩歌となりしなり」と。宜なり其の作の何れにも作家の面影の歴々たること。彼れはまた熱血の男兒なりき故に其の世に慊らざるや厭くまでも之れを痛罵せざるべからず而して其の語極に馳せて甚だしき反擊を世に受くるや彼れは益々怒り益々激し世の己れを容るゝまでは戰はんと欲しき。夫れ情の強きは主觀詩人の常なりと雖もバイロンの如きはあまりに甚し。彼れは笑ふ能はずして泣き、泣く能はずして怒りき。其の怒るや濫せり蓋し彼れが情は毫も智の判裁なき情なり、彼れが智は其の情を制する力なし。ゲーテ曰はく「彼れは自身甚だ闇黑なり反省の瞬間には稚童の如し」と。然り彼れは分別の力乏しく隨うて分明なる理想なかりき。彼れが世に對する衝突は理想と現實との衝突にあらで氣儘と世習との衝突たるに近し。彼れが好尚はた甚だ粗雜なりき其幼より聖書を喜びしも新約の眞面目なるを愛するにあらで舊約の神怪なるを悦びてなりき。彼れの多情は情慾のみ宗教及び審美の高等なる情緒は頗る貧なり。然れども彼れが熱誠は信ずべき者あり其の言屢〻狂愚に類せりと雖も句々衷情より迸出し間々鬼神を泣かしむる概あり。アーノルド曰はく「バイロンは技術家に必要なる事件を聯綴し性格を發展するの伎倆に乏し而も個々の事件景物をば甚だ明瞭に想像し其處に其の身を投じて恰も目睹せる事實の如くに描きいだし以て他人をしてさながらに目睹せしむ」と。極言すれば彼れは創才を欠けり彼れが作は此の見聞を敷衍せるものたるに過ぎず。彼れ曰はく「予は親しく經驗して基礎あるに非ざれば何物をも書く能はず」と。彼れが描ける人物に同一樣なる性格を成し且つ其の事件も其の閲歴の範圍を出でず。『ハロルド』『ラ、』『海賊』『不信者』『マンフレド』『ケイン』『ダッソー』其の他の人物何れもたゞ景と裝とを殊にせるまでにて畢竟は同一人なり。蓋し彼れは己れが理想觀念を平叙する能はざるを以て常に事件と動作とを借りて之れを描寫せんとしたりしなり此の事件動作に與る人物は必ず彼れが化身なるを以て彼れは常に件の事件動作を擇ぶに(勿論其の閲歴中より)最も慘烈なるものを以てしき。『アビドスの新婦』『不信者』『海賊』『ララ』『バリサイナ』『コリンスの

園み』『マゼッパ』『シーヨンの囚人』の如きは其の成功せるものにして彼れが主義抱負の一讀下に嘹々たると共に悽愴悲慘の情全篇に溢れ鬼氣の轉々人に迫るを覺ゆ。レントン曰はく「攻圍戰鬪難破其の他人生の擾亂痛苦等凡べて破滅危機の光景を描くに當りては彼れ技術家として最上の地位に達せり。若し夫れ彼れが自然界の慘劇を寫すに於て等しく得意なりしに至りては是れ全く彼れが外界上に其の自己の影を投射せしものといはざるべからず」と。

彼れが作は非常の勢力を以て當時の各國に迎へられき特に其の青年間に於ける影響は目覺ましかりき。テーンは其の理を探りて曰はく「蓋し難破、攻圍、虐救鬪爭等の事件は最も常人の注意を引き易きものにして若し人ありて其の詩中に之れを歌はんか單調の事に飽ける人情は忽ち之れに趨かん、そは傳奇小說の常に彼等を誘ふに於て見るべし。況やバイロンが絕技を以て歷々之れを描き對するに柔和の佳人を以てし飾るに幾多華麗の光景を以てし陰雲暗憺たる篇中に神か人かと思はるゝ麗姫、繪の如きの東洋風景、古アルビンの宮殿、地中海の明波、希臘の夕陽等を挿めるをや」と。それ或は然らん。但し彼れのしか爲しゝは俗衆を悅ばしめんが爲めにはあらでむしろ其の本來の詩躰に因る。彼れは甚しくポープの詩風を悅びポープを以て沙翁ミルトンの上にありとせり。極力社會の虛僞を攻擊せる彼れがポープの虛飾躰を悅べる恠むべしと雖も思ふに言行歷々一致せざる自儘の本性と此の自儘のまけじ魂とよりウォルヅヲルス等に反抗し覺にかくの如く成りゆきしなるべし。

兎に角に此の詩界の大那翁は革命の長風に駕して一時歐州の讀詩界を風靡しき。彼れは英文學を全歐に傳へし最初の詩人なり其の感化の大なりしや實に驚くべきものあり其の本國にても或一部の青年には其の片句をだに暗誦せられ其の相貌身振をだに模倣せられ其の跋なるをだに羨まれき。否、獨に於てはゲーテに希有の才幹と稱せられハイネをして「日耳曼バイロン」と呼ばれんとを望ましめ魯に於てはレルモントフに魯國バイロンの名を榮と思はしめ其の他佛蘭西、以太利、西班牙に傳播して到る處に溢美の讃辭を得たり。之れと共に或一部は極言彼れを攻擊し或は惡魔と呼び或は狂人と呼びセータンの權化とすら罵りにき。

然れども時は最良の批判者なり。彼れが眞價は今や全く定まりぬ彼れは決して

空前絶後の大人物にもあらずセータンの權化にもあらずたゞ惡人に扮裝せる善人なりしのみ。其の極端に社會を罵り些末の事に震怒せし心事は寧ろ憫れむべきものあり。英國文壇に於ける彼れが位置は以上によりて略々明かならん。

第七章　其の他の詩人（テニソン以前）

コールリッヂ――其の略傳――其の著作――批評家としてのコールリッヂ――キーツ――其の價値――カムベル――モーア――ハント――ローヂャス――其の他

革命の新氣運につれてあらはれし大詩人及び其の作の大要は已にほゞ敘し了りぬ。一世紀間殆ど爲すことなかりし英國の詩壇が如何にして一時にさばかりの俊才を生み出だしゝかは讀者既に了解せるならん。要するに十七世紀の文壇は冬枯れの山野の如しドライデン、ゴールドスミス等が詩文戲曲のかへり咲きの程なく萎みし後に滿目荒寥又た人目を慰むべきものなし。バーンスとクーパーとは先春の梅が一陽の來復を待たずして咲きつれども滿枝雪に埋もれて人其の香を知らず、清淺の湖汀に立てるウォルヅチルスが一林に暗香漸く浮動しきたり陽炎野に見え和風袂を拂へばスコットが桃の媚び先づ都人士女の足を引きしがバイロンが全盛の櫻花一夜の狂風に狼藉して後は暫く見るべきものなかりき而も此の間に於てなほ藤山吹の愛すべきあり遙かにテニソン、ブラウニングが楓錦柿緋の秋を待つものゝ如し。今前々の章に漏らせる詩人を拾ひ併せてテニソンに至るまでの詩人を略敘せん。

サミュエル、コールリヂは一千七百七十二年テヴンシャヤ州セント、メリーなるオッテリーの牧師が家にうまれき。九歲にして父の牧師を喪ひ救兒院にて養育せられ十年を經てケンブリッヂの大學に入りそこにて詩歌、哲學、神學等の書を耽讀し、漸く時世の非なるを慨し一千七百九十三年遂にユニテリヤン宗に歸依し爲に其の給費生たるの資格を失へり剩へそのころは時々同志を集めて暴飲夜を徹したれば負債增加し遂にケンブリッヂを去らざるべからざることゝなり僞名して一時軍隊に投ぜしが事顯はれ再びケンブリッヂに送致せられき。同九十四年プリストルに徒りこゝにて小劇詩 "The Fall of Robespierre" を作しきこれ其の處女作なり。これよりユニテリヤン宗の教旨を說くことと新聞紙に寄書することとを以て業となし同年 "Sonnets of Eminent Characters" を "Morning Chronicle" の誌上に連載せり。

二年の後自ら"Watchman"と題する一週報を發行せしが十號にして廢刊し去りてチザル、ストエーに徒りぬ。此處に過ごし〻二年間は其の最好詩篇の成りし年なり。同九十年"The Rime of the Ancient Mariner"をウォルヅヲルスが新詩集に寄す。同年傑作'Christabel'亦成りぬ(千八百十八年出版)。千八百年ロンドンに轉居し『モーニング、クロニクル』に筆を執る其の傑作の短詩は大抵これに掲載せられき。此の際精勵して一大作を物せんの志ありしが不規律生涯の養成せる習癖は酒と阿片との爲めに愈々甚しくなり糊口の爲めには筆を握るだに懶く感じて遂に去りて獨乙に遊びそこにて若干の作ありき中にもシルレルが『ヴァーレンスタイン』の飜譯の如きは原作に勝りたる良書なりと稱せられき。同十年雜誌"Friend"を發行せしが程もなく中絶せり。これより不幸打ち續きしかば同十六年には其の妻と家族とをサウザーに托して復たロンドンニ赴きハイゲートなる外科醫の許にて晩生十九年を支ふべき道を求めき。"Biographia Literaria" "Zapoila" "Aisl to Reflection" "Table Talk" "Remains"等はこの間に成りしものなり。一千八百三十四年歿しき齢六十三。

上に擧げたる作の中にても『アンシェント、マリナー』及び『クリスタベル』の如きは其の短詩『クブレー、カン』及び『戀』の二篇と共にコールリッヂが四傑作と稱せらる。總じて革命時代に出でし詩人殊に湖畔派の詩人は思想の斬新なるを以て著はれしが、中にもコールリッヂの如きは其の最も清新なるものなりき。然れども之れと同時に彼の派の弱點は最も著くコールリッヂが詩にあらはれたり。所謂弱點とは情の爲めに詩を弄する嫌あることと是れなり。彼等は如何なる詩題に遇うても情を唯一の具となせりしが其の情やあまりに度に過ぎたりテーヌが「馬鹿らし」と嘲りセインツベリ氏が「虛飾を脫して虛飾に入る」と評せしもの是れなり。而してコールリッヂが『戀』の篇は其の極端なるものなりプレトー的戀愛と稱するも尙委ならざる觀あり。然れども其の格調の流麗にして詩躰の整備せるは新流の詩人中彼れに及ぶものなし。クレーク曰はく

「コールリッヂの詩にはバーンスが詩に見るが如き脈管に溢るゝほどの熱血もなくウォルヅヲルスが詩句に屢〻見る家常談話の格言となるがごときもの稀なり而も二子の彼れに及はざるは其の想像の Compact なる點にあり。彼れが失はスペンサーの失に同じくあ

まり純粋に詩的にして恰も詩的ならざる何物をも許さゞるか如き點是れなり」と。

以上は詩人としてのコールリッヂの評なり。彼れは又た一方に於て頗る有力なる批評家なりき。彼れは頗る獨乙哲學の感化を受けたりされば堅く一種の主義を持して盛に論辯し批判せりき。晩年ハイゲートの僑居にありし時其の崇拜者は彼れが詩歌、哲學、神學の談論を聞かんとて處々より集合し皆詩人としてよりは批評家散文家として彼れを尊重しき。殊に彼れが英國に於てシェークスピヤ研究の開山たりし功は永く忘るべからざるものなり。

ヂョン、キーツが生涯は以上の諸詩人中の最も短きものなり。一千七百九十五年に生まれたる馬寮の小吏が子なり。家貧しく學校に入る能はずして近隣の私塾に通學せしが幸ひに良師友を得て其の學力を養へりき。十五歳にして一外科醫の弟子となりこゝに七年餘を費しゝが一千八百十七年始めて其の詩集を公けにし所謂コックチー派(スクール)の主領リー、ハント及びハズリットの知遇を得これより師のもとを辭し少許の金を懐にして颯然英國の各地方を巡遊せり。其の詩篇"Endymion"はウェート島に於て成りしものにて(千八百十八年に出版せられきて)後ち以太利に漫遊せしが一千八百二十一年肺を患みて斃れき。齢僅かに二十六。

キーツの生涯は是くの如く短期なりしかは其有數の天才たりしにも拘らず其の作尚甚た少く且つ其の詩形の如きも未だ圓熟の域に達せずして止みにき而も其の作は皆よくコールリッチ、シェリー、サウジー等の作に比して遜色なきものなりき。彼れが聲價は近年に至りて更に大に上りぬ。セインツベリ氏の如きは曰はく

「ローマンチック派の大氣運が特に生みし兒は恐らくは只一のキーツあるのみ彼れは純粋單獨に感ずして作せり。蓋しコールリッヂ、ウォルヅワルス、スコット、サウジーの如きもいづれも感ぜずして作りたるにはあらねど彼等は本來作者なりしが故に作しつゝある間に此の思想を得る便もありしならん。キーツが生れながらに其の感を有せしとは同日の論にあらず。其の他バイロンは根本的に此の思想に反對しただ時々相接着せしことあるのみ。シェリーに至りては天人の群なり人とすら稱し難し況んや英國人をや。實にキーツは現世紀に於けるあらゆる詩人の祖といふべし。彼れはテニソンを生み而してテニソンは他の詩人を生みしなり」

と。キーツの功績と價値とを評し得て要を悉せりといふべし。

トマス、カルベルは所謂保守派の詩人にして其の主題の選擇は流石に新様の色を

帶べるも其の作風はロマンチック派といはんよりは寧ろクラシック派といふべきものなり。一千七百七十七年グラスゴーに生れき保守政黨の一人なり。同九十九年『期望の樂み』("The Pleasures of Hope")を出版して詩名を一時に知られき。これより獨逸に遊びホーヘンリンデンの戰を視察し國に歸りて其の不朽の名作『獨逸英國の水兵よ』(Ye Mariners of England")及び『バルチックの海戰』("Battle of Baltic")を作りき。これより "Gertrude' of Wyoming" 其の他二卷の詩集を著しき概ね劣作なり。かくて名譽の生涯を經て一千八百八十四年に歿しき。

カムベルが作は件の二軍歌を除くの外は殆ど取るに足るものなし。凡そ保守派に屬する詩人は別に大なる天才なきも少しく儕輩に擢んづる伎倆あらば容易に其の名を成すを得べきのみならず彼等のうちやゝ高上なる力を有する者に至りては佳作二三を出だすに於て多くの困難を感せざるべし然れども元來靈活の想像力を有するに非ざれば其の常作に至りては概ね無氣力平凡なるを例とす。要するに彼等は稀有の大才にもあらずさりとて流石に庸才にもあらず。カムベルが如きは此の好例なりといふべし。

倘カムベル以後テニソンに至るまでの間に名を著はしたる詩人の記憶すべきものを擧ぐれば

(一)トマスモーア　愛蘭の詩人なり一千七百七十九年に生れ一千八百八十五年に歿す。ロンドンにてバイロンが無二の信友たり其の『バイロン』傳はこれが爲めに成りきといふ。一千八百十三年 "The Twopenny Post Bag" を作しき有名なる諷刺詩なり。同十七年長篇の叙事詩 "Lalla Bookh" を出版し次いで諷刺詩 "The Fudge Family" を著しきこれをその名作とす快活の氣全章に溢る。其の他 "The Epicurean" (散文『天使の戀』("Loves of Angels")) 等皆名あり。

(二)リー、ハント　ロンドンの人一千七百八十四年に生れき。初より家兄を扶けて新聞事業に從事し用意周密の批評家として群輩の上に出でたり。はじめてキーッが靈才を觀破し之れを世間に推奬せしはハントなり。"Nile" 華麗 "Jenny Kissed me" は快暢其の他 "Abou Ben Adhem" "The Man & the Fish" 等あり。一千八百九十五年歿しき。

(三)サミュエル、ローチャス　この一群中にての年長者なりき、一千七百六十三年に生

れき。同八十六年『記憶の樂み』("Pleasures of Memory")と題せる詩篇を作して其の名を揚げたり。次ぎて『コロムブス』『チャクリン』等出づ。一千八百五十五年九十五歳の高齢を以て卒しき其の作いと少し。

(四) ウォルター・サヴェージ・ランドル　散文家としては佛のユーゴーに似たる筆致あり。詩人としてはキーツ以後最先に名を知られし人なり。著はす所甚た多し其の處女作"Gebir"はミルトンの風調にローマン派の詩味を加へたるものなるが當時は世人の一顧をだに得ず纔かにサウジーとデクインシーとが其の異品たるを知りしのみ。後に作したる"Rose Aylmer"及び"Dirce"は短篇ながら佳作なりといふ。一千七百七十五年に生れ一千八百六十四年に歿しき。

(五) ウィルヤム・ライル・バェル　一千七百六十二年に生れき。オックスフォールド大學を卒業して後著述に從事し先づ『十四短歌』を公にす。"At Tynemouth"及び"At Bamborough Castle"等やゝ名あり。

以上の外尚名ある者を擧ぐればヂェームス、ホッグ(一七六三——一八五五)トマス、ロエル、ベッドース(一八〇三——一八四八)リチヤード、ハンヂスト、ホーン(一八八四死)レチシヤ、エリザベス、ランドン女史(一八〇二生)ヘンリー、テーロル(一八八六死)トマス、ブッド(一七九八——一八三九)等とす。

第八章　新代小說家

バルヂー女史の晩作——恐怖物語の流行——リュサスとマチューリン——其の傑作『メルモッス』——オースチン女史とエッヂヂオス女史——エッヂヂオスが諸作——オースチンが諸作——オースチンが位置——歴史小說——スコット——其の他の歴史小說家

第十八世紀の編に敘說せし如く同紀の末葉には小說の著述いと饒多なりしのみか或作家のあらはしゝ技能の如きは頗る秀拔なるものなりしが尚仔細に觀察すれは次の期の始までは小說の運尚未だ十分に圓熟せざる趣ありき。さきに『エヴライナ』を著して名を騷壇に揚げたりしバルヂー女史は彼の作に續いて時の讃評家が完璧とたゝへし"Cecilia"といふ一作を物し、今世紀のなかば近くまでは存へしが後に出だしゝ"Camilia"(一七九六)も"The Wanderer"(一八一四)も要するに失敗の作と評すべし。爾後女史はまた指を小說に染めざりき。

佛國より入りて政治上に急激の思想を傳へしヂャコビン主義の斥けられしと同時

に十八世紀風の哲學も漸やく衰へ彼のゴドヰン、ホルクロフト、ベーッ等が作りし半は政治的にして半は哲學的なる小説も讀書社會に饗かれ其の蹤を追ふ者も全く絶えにき。然るに所謂 Tale of Terror (恐怖物語)を作する一派のみは此の風潮にも動搖せずして其の中興の祖マッシュー、リュヰス Matthew Gregory Lewes (一七七五生一八一八死)の如きは十九世紀の初めに其の名を轟かし、これと同時にチャールス、マチューリン Charles Robert Maturin といふ作者現れリュヰスを凌ぐ程の人氣ありき。マチューリンは一千七百八十二年愛蘭土に生まれ一千八百廿四年同處にてみまかりぬ。はじめは職を教會に奉ぜりしが性あまりに矯激にしてかゝる事に成功すべき望なかりしかば後には心を文學に傾け作する所尠からざりき。就中其の悲劇"Bertram"はコールリッヂに酷評せられたりしにも係らずスコット、バイロン二家の德遮によりてドリューリー、レーン座の場に上せられ一時世の喝采を博したりき但しその後上場せし同人が作"Manuel"及び"Fredelpho"は皆失敗の作なりき。又説教集をも出版せり。但し彼れが文界の眞生命は此等の諸作には存せずしてむしろ其の小説にありといふべし。彼れが三十歳以前に假名にて出版せし小説三種あり曰はく"The Fatal Vengeance" or "The Family of Montorio"曰はく"The Wild Irish Boy"『愛蘭土の野蠻』曰はく"Milesian Chief"『愛蘭土の酋長』是れなり。尚『ベルトラムの成功後に公にせしもの數篇あり"Women"『婦人』一八一八)"Melmoth the Wanderer"『浮浪メルモッス』及び"Albigenses"等なり。此の中『メルモッス』は傑作と稱せらるゝは延命の報酬として靈魂を悪魔に賣らんことを約し佔者若し我が手中より他人に靈魂を取り去らしむることあらば直に破談たるべしといふ約束を脚色の骨子として作りたるものなり。譚の筋あまりに煩雜にして岐談の多ければ冗漫に流れ且つ此のたくひの作に通例なる過大誇張の筆致多きため全躰の調諧を傷りたる失はれど尚ほ其の一代を震憾し(殊に佛の名家バルザックに影響を及ぼし今に至りても幾分の譽を失はざるを見れば『メルモッス』もまた有力の作と稱しつべし。此の書行はれて同種類の著簇々として續きいでしがそれらはなべて覆醬の料たるに過ぎざりしなり。

嘗てtales of terror(恐怖物語)の筋をとりて諷刺の作の一材とせしオースチン女史は夙に十八世紀の末數年前より其の彩筆を揮へりしが著す所久しく上梓の機を得

ずしてエッヂヂオス女史に先んぜられき。Maria Edgeworth は愛蘭土にて相應の資産を有せし市人の女なり、一千七百六十七年に生まれ一千八百四十八年に逝りぬ。女史身を終るまで赫々たる令聲を保ちて言行はた之れに愧づる所なかりき而して近時に至りては其の名譽更に揚がりたり。スコットは女史を推稱しておのが作れる蘇國小説は女史の愛蘭土小説に負ふ所尠少ならざる由を謂へり但しスコットの如き好人物は間、他人に對して溢美過稱を惜まず却りて中正を得ざることあり悉くは信ずべからず。

こゝに女史が小説の重なるものを擧げんに "Castle Rackrent" (一八〇一)は純粋の小説たる趣致には乏しけれど愛蘭土の地主等が無規放埒にして一二代間に産を破り家を倒し流離落魄せるありさまを現寫せる一大繪卷物とも見るべし。さて女史が白眉の作にはあらざるも精巧を以て優れる "Belinda" (一八〇三)は十八世紀末の婦女の遊惰蕩逸を活寫して躍々たらしむ又 "Tales of Fashionable Life" のうちには妙篇 "Absentee" あり又 "Ormond" の靈活なるは『ラックレント城』に伯仲す。此の外一千八百三十四年に "Helen" を作せしまでに尚ほ若干の著作あり。女史また消息文に長ぜり、故に早き頃已に蒐集して之れを印刷に附せしものありしが其の廣く公にせられしは一千八百九十四年のとなり。女史の父リチャードは好學の士なりき當時流行の佛國的自由思想には與らずして熱心に功利説を奉じ經濟論を究め而も佛國哲學者の教育論社會論等をも味へりし人なり。されば女史が早年の作には父の意見の影ほの見ゆるもの多し而も作としては爲に益する所ありきとも見えねど "The Parent's Assistant" その他專ら少年向きにとて作りし著述、及び清爽なる "Moral Tales" (教訓譚)は多少間接に父に負ふ所ありしが如し。按ふに小説家たるの資格よりいへば(上に擧げたる外に "Lemora", "Harrington", "Emmi", 並びに女史が作の最長篇 "Patronage" の諸著をも合せて)エッヂヂオスはバルヂーを殿とせる十八世紀小説家とオースチンを前驅とせる十九世紀小説家との中間に位すべき作家なり、是れ一にはエッヂヂオスが聞睹せし社會その物が過渡の狀況にありしにも本づくべけれど二つには女史の性情、思想及び文致の何れかといへば舊時代に近く彼の晰然たる近世風、嘹然たる普遍的氣脉を缺く所ありしに職由せずんばあらず。女史は天才に遠からざるいみじき技能を有し且つ滑稽にも(女史の著 "Essay on Irish

Bull"及び小説書簡文等を讀みても知らるゝ如く)長じたりしが惜むらくは總じて最も肝要なる用意を誤りたり、すなはち女史は個人といはんよりも寧ろ類型といひつべき若干數の愛蘭土人の外には多くの人物を描くこと能はず動もすれば所謂偶人を作りて魂を入るゝことを忘れたる概あり。要するに女史の筆法は極め、て爽快なれども確實ならず、圓滿に話説し得れども屢、圓滿に創意せず、隨うて自ら眞に創造し得たりといふべきものは殆ど無し。さもあれ上に引けるスコットの言を信じ得べくば斯の閨秀が間接に創搨せし所は流石に乏しからざりしものゝ如し。

Jane Austen の地位は頗る前者と異なれり。女史は一千七百七十五年十二月十六日ハムプシャア洲なるスチヴントンに生まれき該地の牧師の女なり。概ね鄉土附近の各地に住して平和靜穩の生涯を送り常に中等社會の地方士族(カントリー、スクアイアルズ)と往來せりき、蓋し女史の一家も件の階級に屬せりしなり。遂に一たびも嫁せずして一千八百十七年七月二十四日ヰンチェストルにて永眠せり。女史が小説の完きもの六篇あり(一)"Sense and Sensibility"(二)"Pride and Prejudice"(三)"Mansfeid Park"(四)"Emma"是れなり。以上は其の存生中に(前後七年の間に)おひ〳〵に發兌せられ(五)"Northanger Abbey"と(六)"Persuasion"とは死去の翌年に出でにき。此等の作のいづれも世の好評を博して女史の名一代に高かりしは偶然にあらず其の非凡の價値は夙にスコット以下第一流の批判家に認められ現今に至りて其の光譽いよ〳〵加はりぬ。按ふにオースチン女史はスコットと相並びて十九世紀小説の双親とも稱しつべし、詳にいへば若しスコットにして十九世紀傳奇(ロマンス)小説(ノヴェル)の母なるべし。

女史が巾幗の身にして十九世紀の新文運の魁たりしこと最も驚くべし。其の處女作は其の出版の月日よりいふも近世風なる同位の小説家のに率先せり、而して其の價値よりいへば彼此相比較するだに殆ど全く不當の沙汰たらんとす。夫の"Northanger Abbey"の如きは稿成りて後廿年の久しき間筐底に藏められ"Pride and Prejudice"(此の篇最も人物の性格をあらはせる上乘の作)の大躰も略、同じ頃の起草なりきといふ。これによりて是れを觀れば一方には結構脚色にこそは稍、近世風の趣あれ着筆落想の鹽梅は彼のリチャードソンの小説よりさへも寧ろ十九世紀的氣

脉に躍き(バルチー女史が作)"Camilla"の世にもてはやされし時に當り他方に妙齡の一女ありて服裝言語などの皮相をだに除けば現に生活する近世男女と毫も異ならざる人物をば自在に描きつゝあんりしなり。

さもあれオースチン女史の美妙なる天才も未だ善美を盡せりとは稱すべからず。例へば甲は其の外形に舊套の致あるを慊らず思ふべく、乙は其の女性批評家の特長たる細緻なる反語(アイロニー)を解せざるべく若しくは好まざるべく、第三流の讀者は其のあまりに穩健にして激越ならざるをあかず思ふべし。近世の批評家或は女史をそしりていへらくオースチン女史の筆法をたゝふるは男子の力負なり、そは婦人に具はれる綿密なる半諷刺的觀察を文學上に應用せるに過ぎずと。さもあれ、乙は勿論酷評なり按ふにかくの如き評者は「然らばオースチン女史と前後して出でし女流小說家中に能く此の女性的天賦を發揮せる者のなきは如何なる理ぞ」といふ反詰に遭はゞ恐らく其の答にたゆたひ其の語窮せざるを得ざるべし。

オースチン女史の方法にはフィールヂングとリチャードソンとの長所をやゝ低き度に於て結合しこれに近世の色を加味したる趣あり、すなはち一面には彼れの如く豐饒機敏ならざれども眞摯と生氣とはむしろ彼れに優るべし。而して精到なる反語に女性の俤を寓したる對話の筆致の纖細なる乃至人心の動機及び諸種の氣質の分析の緻密を極めたるなど頗るリチャードソンに似たる所あり女史は近世小說壇の一明星といふべき也

オースチン女史が小說の特質かくの如く其の讀書社會に對する勢力はた頗る大なりし時に方り歴史的小說の別派北の方蘇國に起り非常の勢ひを以て讀書界を風靡し來たれり。所謂別派とは(既に第六章にて語りたりし)ローマン派を指せるにてウォルター、スコットは其の錚々たる代表者なり。夫れ歴史的詩歌及び小說の作者はスコット以前内外幾十百なるを知らずと雖も未だ曾て一人の彼のスコットの如き成功を博せざりしは何ぞや。一人の未だ曾て彼れの如く世間の歡迎を得ざりしは何ぞや。

按ずるに第十八世紀の中葉までは英國と大陸とを問にず學者の史に對する觀念は他の紀錄年表等に對するに大差なく學者讀者共に或時代の史とは該期中に起りし事件の死記錄とのみ思念せりきされば當代の思想感情若しくは國風國粹の

如きは悉く之れを度外視し季候風土習俗の如きも絶えて其の注意を促さざりき隨うて史の多數は(極言すれば)實際には何の用もなき死記錄たりしなり。史に對する觀念かくの如くなりしかば所謂史的小說史的詩歌の如きも今日の物とは趣を異にし或時或處或特殊なる人情思想と其の季候風土習俗とを描寫し若しくは驅歌せるものにはあらでたゞ現代現土の人情風俗に過去の人名地名を附したるに過ぎるものなりき。かゝりしかば讀者はたとひ幾百卷を繙くも之れによりて過去を知り異邦を視るなどの感あるべくもあらず況んや榮枯消長の大法進化必然の理脈などを窺ふことをや。當時の歷史小說の人生に對する關係は(歷史其の物のにひとしく)いと微少なる者なりしなり。此の時に方り革命の急潮歐洲の全土に氾濫し政治の新主義は佛蘭西より迫り新哲學思想は獨逸より來り此の潮氣いつしか多感の詩文人を動かし詩歌に哲學派の起りしと共に小說劇詩にローマン派起り而して彼のサウヂーの如きは論客をも兼ねたりし由は已に第四章に述べたるが如し。スコットはた此時に出でたり。彼れは元と理論家ならざりしかば辯論に其の主義を發表せしことはなけれど流石に無意識の間に時の潮氣に感染し其の作に於ては不知不識の間に其の主義をほのめかせり。彼れの封建時代を寫すや及ぶ限りはそを活寫せんと勗めしなり。スコットが筆は所詮封建的人情の眞底に透るに至らざりしかど國土山川風俗の微は流石に過去のまゝに描かれたるが如き概あり。換言すれば明かに歷史小說の半面程を成功し得たるなり兎に角に彼れが史的小說は從來の作に比して幾段か人生の眞に近づきたりしものなり。スコットの當時にもてはやされしは職としてこれに因れるか。(尙ほ其の時人に愛顧せられし諸緣は前の第四章を參照すべし)。

スコットが摸放者は彼れが生前にも輩出せしが今下に其の重なるものを擧ぐれば

(一)ヂェームス及びエーンスチオス　G. P. R. James (一八〇一—六〇)と Harrison Ainsworth (一八〇五—八二)とは共に多作を以て著はれし人なり。殊にヂェームスは歷史的小說以外にも筆を執りしかば其の作數十篇に及び處女作 Richelieu" を始めとして "Darnley" "Mary of Burgandy" "Henry Masterton" "John Marston Hall" 等は皆其の名を成しゝ作なり。エーンスチオスは歷史小說專門の作家にして "Jack Sheppard" "The Tower of London" "Chrichton" "Rookwood" "Old St. Saul's" 等の作あ

り兩者の技倆を比するにヂェームスは史乘の智識該博の人なりしかば其の筆時にローマン派以外に馳せて殆ど當時人物の眞相に達せんとせしとありき但し事件の結構人物の對話等には未だ技倆の圓ならざる處多し。エーンスヲオスは風俗摸寫の點は到底ヂェームスに及ばざれども敘事對話の妙はよく讀者を感ぜしむるに足る。されど要するに兩者共にスコットが摸倣者たるにとゝまり其の長所だにスコットが範圍以外に出づる能はず。

(二)ゴールト　スコットの權續者中蘇格土の小說に於て最も著はれたりしものを John Galt とす。千七百七十九年エールシヤヤに生れき。該地方は彼れが作中に最もいみじく寫しいだされたり。父は西印度會社の罷職船長なりき。Galt の傳は詳かならねど兎に角變化浮沈に富めるものなりしが如し。一千八百四年ロンドンに赴き文學の業に就きしが後ち鄉に歸りて "Ayrshire Legates" 及び "Blackwood" を著して名ありき。同二十一年加奈陀商社に入りて北米に航せしが業意を得ずして復た國に歸り流離窮困の餘り同三十九年に歿しき。Galt が詩歌劇詩は概して批評する價値だになきものなり然れども多少ユーモル(諧談)の才あり殊に小說に於て自己が鄉里の風景を寫して眞を得たるは尠くも一讀の價あり "Ayrsire Legates" "Annals of Parish" の如きは其の例なり。"Sir Andrew Wylie" "The Entail" "The Provost" 等又名あり。

尙此の他にも Galt と時代を同うし少許の作ありて其の伎倆ゴールトとやゝ伯仲せりしものは、第一 Dr. Moir(其の作 "Mansie Wonch" 名あり)。Mrs. Morgan ("The Wild Irish Girl" の著者)。John Bauim ("goût du terroir" の作者)。Crofton Croker ("Fairy Legends" の作者)等あり。

(三)フック　Theodore Hook (一七八八—一八四一)はジョールジ四世及びウィルヤム四世の治世中に最も名譽ありし作者なり。富有の家に生れ十分の敎育を受け後ち小說家として盛名を得しのみならず新聞記者としても成功し其の政黨に對する諷刺文の如きは今尙ほ讀むべき價値ありとせらる。然れども其の小說 "Sayings and Doings" "Gilbert Gurney" "Gurney Married" "Maxwell" 等に至りては其趣向概ねスモーレットより得たるものにして其の文章はた粗雜不明の個所多し。

(四)バルワー、リットン　Edward George Earl Lytton Bulwer (後にリットン卿と稱す)は

ケムブリッチの人なり一千八百年に生れき。幼きより詩歌の作あり一千八百二十五年一詩を物して司法卿の賞を得たり。之れより國會の議員となり職に在ること十年同二十五年男爵に叙せられ後ち殖民秘書官 Colonial Secretary となりて同七十三年に歿しき。リットンが文學上の生涯は政治上の生涯よりは一層光榮あるものなりき。其の處女作 "Falkland"(一八一四)は匿名にて出だしき時人の評判はとり〳〵なりしが次ぎの "Pelham" を出だすに及びて初めて其の名を著せしに此の作一府の成巧なりしかば其の名忽ち全都に喧傳しき。之れより四十五年間絶へず著作に從事し時樣小說、罪人小說、古奇譚及び歷史小說等の作通じて數十篇の多きに及びたり。其の名最も嘖々たる "Paul Clifford" "Eugene Aram" "The Pilgrims of Rhine" "The Last Days of Pompeii" "Ernest Maltravers" "Zanoni" "Rienzi" "The Last of Baronse" "Harold" 等には妙處尠からずと雖も其の缺點はた著きものあり。リットンは夙に時好に應じて家庭小說を作りしがこれはた同樣の成功を得たり其の作 "The Caxtons" "My Novel" 及び "What will he do with it" の如きは或一部讀者には其が最傑作と稱せられき。一千八百六十一年家庭小說より一轉して神怪譚を作し先づ "A Strange Story" を出だし次ぎて "The Haunted and the Hounters" を物しき。後者は同種類の小說中最も完全なるものなりといふ。晚年に至りて又た社會小說に轉じ寫實と諷刺とに力を用ひき。"The Coming Race" "Kenelm Chillingly" 及び "Parisians" (此の篇歿後に出版)の如き是れなり。

多能健腕彼れの如きは稀なり。小說に於てかばかり著作ありし傍ら數篇の脚本をも作しき就中 "The Lady of Lyons" "Richelieu" 及び "Money" の三篇は頗る見るべきものなり。此の間また詩作を絶たず(創作には概して失敗したれども シルレルの飜譯はめでたしと稱せらる)又 "New Monthly Magazine" に關係して諸種の評論文を寄せにき。實に多作の點に於ては十九世紀中彼れに及ぶものなしといふべし。

現今に至りて痛く所謂評論家の爲に貶せらるれど公平に評すればとは例の反動の結果たるに外ならず。彼れが作に缺點のいと多きは爭ふべからざれど流石に他の企て及ばざる妙處もなきにあらず。或は曰はく彼れが缺點は歸一の

薄弱なると誠實の乏しきとにあり。其の時尚を追うて樣々の作を出だしはとりも直さず彼れが本領の確立せざるを證するものなり」と。此の語よく彼れが病根を指摘し得たりさもあれ是れやがて彼れが長所の存する所にして物に應じ事に隨うて自在に其の筆を替へ得るは蓋し尋常文才の企て及はざる所なり。予は寧ろセインツベリ氏と共に

彼れが文才は淺き肥土の如し如何なる草木も急速に繁茂し生長するを得べし而も程なく凋落に至るを免れず

といはんと欲するものなり。

第九章　ヂッケンス及びサッカレー

ヂッケンス——其の畧傳——其の諸作——其の價値及び特質——サッカレー——其の畧傳——其の諸作——其の特質と價値

チャールス、ヂッケンスは一千八百十二年ハムプシヤヤなるランドポルトに生れき。父はポールトマスなる海軍局の書記なりしがチャールスが九歲の時其の職を罷められしかばロンドンに歸り貧困の生を送れり。されはチャールスは十一歲にして其の親族に寄寓する身となりて靴墨製造の業を見習ひしが程なくして父と件の親族と隙を生ぜしかば出でゝ又ロンドンに歸り始めてカムデー街なる小學校に入學せり。かくて三年の後父は議院の吏となりチャールスは一狀師の事務所に雇はれこれより專心法律を學び十九歲の時に至りて父の職を嗣ぐに至りき。一千八百三十一年より同三十六年に至るの間に "The Sun" "The Mirror of Parliament" 及び "The Morning Chronicle" などの著あり "Sketches by Boz" も此の最後の年の出版なり。同年また有名なる "Posthumous Papers of Pickwick Club" を出だしき。同三十八年 "The Pickwick Papers" "Oliver Twist" 及び "Nicholas Nickelby" を同四十年 "Master Humphrey's Clock" "The Old Curiosity Shop" 及び Barnaby Rudge" を作しき。中にも "The Pickwick Papers" は稀有なる好滑稽小說としてもてはやされ而して "Master Humphrey's Clock" は發賣冊數七萬に達せしをもて名あり。實に彼れが小說の當時にもてはやされし度は直ちにスコットの作に次げりき。後ち二年を經て北米を巡遊し歸國の後 "American Notes" の著ありこは犀利の觀察を以て仔細に米國人の長短を評したるものなり。翌年 "Martin Chuzzlewit" の初篇及び

最も成功せし短篇"Christmas Carol"を物しき。同年遠くゼノアに遊び"Martin Chuzzlewit" 稿を終へ同四十四年にはロンドンにて『日々新聞』の主筆となりき(幾程もなくして退社せり)。さて同四十六年より五十七年に至るの間には"Dombey and Son""David Copperfield""Bleack House""Little Dorrit"等の作あり。同五十年雜誌"Household word"を出だし同五十九年同じく"All the Year Round"を出だしき。後"Tale of Two Cities""Great Expectations""Our Mutual Friend"の作あり遂に一千八百七十年"The Mystery of Edwin Drood"の未定稿を遺してみまかりぬ齡五十九。

ヂッケンス教育の乏しかりし人なり故に博くは古人の作を讀みしこともなく隨うて其の作古人に負ふ所多からざりしなり(但し嚴密にいへばスモーレットとフックには多少の影響を受けし跡あり)。彼れはかくの如く學植深からざりしかば該博の識と卓拔の見とは之れを彼れが作に望む能はず而も此の缺點は偶々彼れをして深く中等以下の社會に同情せしめし所以にして美術上の意見、政治上の主義、社會上の問題、何れを問はず彼れは常に所謂中級主義を以て之れに對しき。且つやかゝる性習の必然の結果として彼れは世の學を衒ふ者に對し若しくは上級の社會に對して平なる能はず其の筆を執るや絶へず此等の徒を刺嘲せしが學者及び上流に關する經驗其の知識と共に乏しかりしかば彼れが想像は竟に上流の眞相に達する能はず隨うて其の諷刺も往々にして徒らに門外の落書となりにき。蓋し無は何物をも生ずる能はず彼れが此の失敗は其の力量の不足よりは寧ろ其の境遇の然らしめし所なり。これに反して其の中級以下の社會に對する觀察は銳利實に驚歎すべきものなり。一たびヂッケンスの筆に上れば人や、事や、性癖や、服裝や、其の笑ふべきもの其の憫むべきもの其の賞すべきもの其の憎むべきもの微に入り細に入り、言語や擧動や一々活きて躍らざるは稀なり。時を同うして此の伎倆に於て彼れに匹敵し得べきものただ佛の名家バルザックありしのみ。而も尙嚴密に觀察すれば此等人物の言語擧動性格も多くは彼れが作中の世界にのみ活動するもの現世界に於いてはいと〳〵稀有なりと評せざるを得ざるもの比々されば彼れが作を讀む者そゞろに篇中の人物に同感して憎み笑ひ悲しむと雖も未だ眞に之れと同化し彼等と共に眞に功過を行ふが如く感ずること甚だ稀なり是れ其の人物が往々ヂッケンスが作中の人物にして現世間の人物たらざるが故なり。

或は彼れをたゝへて「中等社會の沙翁」といふ而も此の名は未だ輕々しく許すべからず。さはいへど彼れが常に島めて活人間を描かんとせしは事實なり彼れは往々現實の人情に拘泥し却りて事件脚色を不自然にせし痕すらあり。其の悲哀と其の滑稽とが其の筆致の巧妙なるに比して痛く實を失へるが如き其の一例なり。遮莫英國小說がヂッケンスの作に至りて一進歩をなしたるや爭ふべからず。十八世紀の末より十九世紀の首へかけてスコットが新に歴史小說の一躰を創搬してより天下靡然として之に倣ひたりし中にヂッケンスは所謂風俗的小說より脱化して別に寫實的社會小說を出だし遙かにリチードソン、フィールヂング、スモーレット及びゴールドスミス等がものせりしに其の精微に入りたりしは頗る多とすべき功績なり。此點に於いてはウィッブル氏が說頗る其の要を得たり曰はく。

ヂッケンスは昔てフィールヂング、如き實際生活の小說を復興して更らに之れに加ふるに個性の發揮を以てしたり。但しそれすら人物の思想の到底作者が思想に外ならざりし事は彼の二三家と相同し。然れども彼のフィールヂングが人物を表はすや頗る巧妙なる伎倆をもてせり彼れは其の人物の觀察者となりて其の言動を評するに諷刺的滑稽を用ひなほ如才なく其の洞察の鋭を隱蔽せりき而も此の洞察やよく其の眞底に徹透し其の無意識の云爲に於てあらはるゝ一舉一動を捉ふるの妙恰も彼れ等の自ら知るよりも多く知る所ありて然るものゝ如し彼れが小說に其の脚色の自然なると動作の自在にして圓滑なると及び實際生活を描ける傍ら幾分人世の消息を傳ふるが如き感あるとは驚さして此の洞察眼の犀利なるに由らずんばあらず。ヂッケンスが眼は事物の外形の上に於ては別にフィールヂングと異る所なけれどもたゞ彼れは其の向ふ所甚だ廣かりしを以て勢ひ一切の眞底に達する能はず且つ動もすればあまりに人工を用ふるの果は虛構に陷り爲めに物の實相を失はんとせり一言すれば心的方面に於てはフィールヂングより遙かりきと雖もよく同胞の誠情を以て諸種の人物に對し其の慈愛な叙し其の悲傷を寫し其の情感の優雅(スボート)にして純正(ピューア)なるものを描くの妙に至りては慶かにフィールヂングが上にあり

と。兎に角に大躰に於てヂッケンスのフィールヂング等より一歩を進めしは爭ふべからず。

ヂッケンスが著は小說の外に詩歌と記叙文とあり共に小說に比しては甚しく劣れるものなり。

十九世紀の中葉に於てチャールズ、ヂッケンスと相併びて文名一時に高かりしもの

をウィルヤム、メークピース、サッカレーとなす。其の生涯はヂッケンスと大差なかりしも幼時の境遇は頗る殊なり。一千八百十一年カルコッタにうまれき。其の家名族なりければ幼より秩序正しき教育を受け小學校より中學校を經てケムブリッヂなる神教大學校に入りしが程なく父の遺産を受傳し退學して佛京パリーに赴き畫工とならんとせしが偶々過ちて悉く其の資産を失ひしかば志を改めて文筆に從事し先づ "Fraser's Magazine" といふ雜誌社に入りぬ。これより諸種の雜誌に關係し後ち "Paris" 社に入り諷刺の筆を揮ひたり現に存する其の雜著集は浩繁なるものなれどもそれだに當時の著の只一部分に過ぎずといふ。彼れの筆は當時の他の文士のと趣きを殊にし讀者を刺動する力當初はいと漠然たりしかば世上の褒貶一ならず（此の風は獨り雜誌の文に止まらずして一冊となりて著はれたる "Paris" (1840) "Irish" (1843) "Sketch-Books" "Catherine" 及び "Barry Lyndon" 等は た然り）されど其の滑稽諷諧の妙は夙に具眼者の認むる所なりき。但し普く世人のサッカレーが異才を認知せしは一千八百四十六年に其の傑作 "Vanity Fair" (小說) 出でし後なり。（此の作同四十九年に完結す）。次いで "Pendennis" (小說) を著はすことは隱

然著者が自傳とも見るべきものなり。後ち評論の作 "The English Humorists of the Eighteenth Century" を著はしゝが縱横に其の得意の筆を揮ひたるは一千八百五十二年に出だしゝ Esmond" (小說) なり此の種の作にては古今有數と稱せらるゝ作にして女王アーンの時代及び其時代の人物風俗を活現して躍如たらしめたる者なり翌年より三年間に "The Newcomes" (小說) を作せり風俗小說としては第一位のものたるのみならず時人の玩賞も亦第一のものなりき。この作成りて後ち二年間にサッカレー亞米利加に遊ぶと二回歸鄉の後 "The Georges" といふ史的敍說を著しぬ、これまた大に歡迎せられき。一千八百五十七年より其の翌年へかけて "The Virginians" を作す第十八世紀末の風俗人情を寫せるものにして『エスモンド』と共に彼れが作中の双璧なり。同六十年再び雜誌記者となり "Cornhill Magazine" に "Lovel the Widower" 及び "Philip" を掲ぐ。此の時また "The Roundabout Papers" と名づくる叢書を出だしぬ彼れが無瑕の短文は多く此の中にあり。一千八百六十三年サッカレー一生の力を傾けて最近の社會を寫せる小說をものせんと欲せしが起稿後間もなくしてみまかりぬ。サッカレー又戲曲の作一二篇あれど別に批判する

程の價なし。

サッカレーが作は其の小年の時のと其の最短篇とを除けば殆ど皆諷刺滑稽を以て成れりといふべし作家が道德的觀念はよく隱れたるが如くにして尙ほよく現はれたり彼が特得の長所は按ふに此處に在らんか。

彼れの韻語また見所なきにあらず其の名あるものは一千八百五十七年に出だしゝ雜著集中にも載せられたれど其の本領の詩歌に存せざることは衆批評家の夙に認めたる所なり。按ふに彼れは社會及び自然の事物を詩眼をもて觀若しくは感ずること能はざりしにあらねど而も之れを觀若しくは感じたりといふは彼れの快しとせざりし所即ち其の感慨情緒を在りのまゝに高唱せざるを良しとせりしなり換言すれば彼れは詩人的に事物を感ずるを悪しとせずして詩人的に歌ふを女々しとせりしなり。曰はく「歌ふも何の効かあらん」と蓋し一種の實際主義にしてやがて彼れの英國人たるを證する者なり。但し英國人は亡人なり他の南歐人と共に泣かざるにあらずたゞ悲みて傷らざるのみ。眼は涙に沾ひながらも心に毅然たる丈夫見の相を失はずして或は慰藉の道を講じ若しくは救濟の方を案

ずる是れサッカレーの特質なり。此の熱情と此の眞情とあるが故に彼れは其の小說に於て嘲謔せる人物に對しても其の詩歌に於ては時に哀切なる悲調を漏らせることなきにあらず之れによりて詩歌が人心最底の聲なるとを見るべし。要するにサッカレーは詩情に乏しきにあらず其のいみじく精細なる想像其の壯大なる詞句間々其の作中に見いだすを得べし。是れ實にセンッベリー等が近年に至りて彼れの詩人としても一名家たるべきを唱へいでし所以なり。

サッカレーが傑作の隨一たる "Vanity Fair" は「男主公なき小說」として名ありされど女主公と見做すべきものは二人あり情なくして智あるリベッカ、シャープ女と智なくして情あるアミリア女と是れなり。前者は傲慢にして俗才に富み且つ勇氣あるが故に毫も他の助けを借らず後者は溫良貞淑にして可憐なれど其の性や魯なり。全篇諷刺滑稽を以て充ち其の皮肉なる人生觀は往々にして讀者の眉を顰ましむることあれども其の人物光景はおの〳〵活きて躍る概あり以て能く讀者が厭悪を解く。且つ之れを咀嚼し來たれば則ち嘲謔の裏面に著者が溫き同情の深く浴く潛めるを見る。

"Vanity Fair" に於て現代を描して成功したる筆は "Esmond" に於て百五十年前を寫して同樣の功果を得たり。此の作者元來脚色を構ふるに拙なるが此の篇もまた脚色の上に何の異彩もなく彼の「ペンデンニス」と同工即ちすべて記事を主人公カルチル、ヘンリー、エスモンドが自傳体となせり。只其のスチュアート王統の末造に於ける言語風俗を直寫して精密なるは驚くべし。此の作や趣味の上よりいへば彼れが小説中第一に位すべしと稱せらる。其の主人公エスモンドは彼のチャールス、グランヂソンに據る所あまりに多けれど而も智仁勇兼備せる理想的英國人としては遺憾なきに近し。"Virginians" 其の後篇として出でしがこはエスモンドが孫の傳なり而して作としてもまた恰も孫ほどの價値なり。

サッカレーは人物評傳にも巧なりき "On the English Humorists" 及び "The Four Georges" の如きは其の最も傑れたるものなり。

第十章　其の他の小説家

マリヤット――レヴー――ザスレーリ――ピーコック――ボルロー――マーチノー女史――ミッドフォード女史――其の他

(一)マリヤット Frederick Marryat は軍事小説を以て著名なりし人なり。一千七百九十二年に生れき。少壯の頃軍隊に入り二十四歳の時既に一隊の指揮官たりき。バルミースの戰ひの時には一艦の長に進みたりしが其の氣質の軍人に適せざるを悟りて一千八百三十年斷然職を捨てゝ文筆に從事しこれより死に至るまで十七年間絶えず小説を著作したり。作中の佳なるものを Peter Simple" "Mr Midshipman Easy" 及び "Jacob Faithful" などとす。趣向も人物も海上の風景を寫すことなども重にスモーレットの躰に倣へるなり。隨うてスモーレットが缺點たりし人物に及び事件の不規律乃至其の諧謔のわざとらしきこと等はマリヤットはた之れを具へ且つ之れに加ふるに腹案の粗雜と叙事の不精緻とを以てせり。然れども其の全躰の着想と滑稽とに至りては流石に見るべきものなきにあらず。

マリヤットは韻語をも綴りき概ね粗大にして鑑賞に適せずと雖も往々にして清新の致あるもありき。

(二)レヴー Lever はマリヤットよりは多樣の境涯を經たる作者なりしかば其の作

おのづから變化に富めり。一千八百六年アイルランドに生れき。ダブリン市なる神學校を卒業し歐洲と亞米利加とを漫遊せし後ち一千八百三十七年ブラッセルなる公使館の醫師となり職に在りしこと六年此の間 Harry Lorrequer" "Charles O' Malley" 及び "Tom Burke of Oures" を著しき。何れも活動猛躍の氣の充滿せる軍事小說にして中にも "Charles O' Malley" は其の傑作なり。一時は "Dublin Universary Magazine" とふ雜誌を興して絕えず其の作を掲げたりしが。時好の軍事小說以外に一轉せるを悟るや更に愛蘭風と大陸風とを折衷して "Roland Cashel" "The Knight of Gwvinne" 等の數書を著はしき。かくて後フロレンスに涉り一千八百五十二年スペッツヤにて副領事となり五年の後トリーストの領事に轉じ同七十二年に歿しき。晚年に至りては人心內部の觀察に心を注ぎ實際の生活と種々の性格とを活現する小說を作らんと工夫せしが一作をも出だすに及ばずして死にき。

ヤリヤット及びレヴーと時を同うせる所謂小作家(マインナアエリスト)には Captain Glascock, Chamier, Basil Hall, Michael Scott 等あり。

(三)ヂスレーリ Benjamin Disraeli は近代著明の政治家にして總理大臣とまでもなりしべカンズフィールド伯のとなれば其の一生の功業に就きては敢てこゝに贅せざるべし其小說の作は重に青年の時にあり一千八百五十二年下院の議員になりし以後同七十年と同八十一年とに "Lothair" と "Endymion" との二作ありしが其に以前の作よりは劣りたり。彼れが小說の傑作は弱年の作中に多し一千八百二十七年より十年間に物せし "Vivian Grey" "The Young Duke" "Contarini Fleming" "Atroy" "Venetia" "Henrietta Temple" の如き是れなり。作導筆致共にリットン卿の作に酷似せり但し "Vivian Grey" はリットンの處女作 "Falkland" と同年に出でしものなれば(ヂスレーリ)はリットンを模倣せりとはいひ難し。さて同四十四年四十五年四十七年の三たびに於て引き續き "Coningsby" "Sybil" "Tancred" を作せり。何れも政治小說にして其の得意の著作なりしかど其の眞價は決して多大なる能はざりし作なり。さて彼れが著作に通じて最も著きはヂルテールの影響の著大なることなり而も其の師の長は之れを提ふることと能はずして徒らに其の短を襲げる氣味あり、すなはち其の諷刺時として個人的となり

私意的となり且つ屢〻實際と離れたり。然れども其の作の時人にもてはやさるゝことは著者が政治上に昇進すると共に進みたり朝野の紳士は當世英傑の著作として一作出づる毎に之れを歡迎し兎も角も之れを買ふことを忘れざりき。

(四) ピーコック Thomas Love Peacock は一千七百八十五年に生れて頗る不秩序なる教育を受けし作家なり齢三十三歳にして始めて "Headlong Hall" と題する諷刺小說を著し爾後一千八百三十年に至るまでに引き續き "Melincourt" "Nightmare Abbey" "Maid Marriau" "The Misfortunes of Elphin" 及び "Crotchet Castle" の五篇を作せしが程なく東印度會社に入りて重職を得にければ爾後三十年間は絕えて著作なし。一千八百六十年に至り "Gryll Grang" を著し後五年にして歿しき。齢八十二。ピーコックの諷刺は頗る鋭利にして動もすれば露骨に過ぐる嫌ありしが漸く圓熟するに及びて趣味ある滑稽は能く其の鋒鋩を裹みたり。ピーコックは韻語にも長ぜり特に其の宴席の爲にとて作りし作の如きは諧謔縱橫而も流石に野卑に陷らず頗る愛讀するに足る。

(五) ボルロー George Borrow はピーコックより若きこと十八歳なりしがピーコックにひとしくいと亂雜なる教育を受けたり。幼きころより尋常と異なる文學に心を傾けスカンヂナヴヤ、ロシヤ、スペイン、ローマ、エヂプト等の諸國語を修め種々の閱歷を經たり。"Lavengro" (一八五一)及び "The Romany Rye" (一八五七)の如き諸作の材は此の間に成りにき。後ち聖書出版會社に雇はれて其の寶弘めの爲めにとて魯西亞、西班牙等に赴き西班牙にては之れが爲めに危難に遭ひしとあり。此の間に得たりし材料は一千八百四十年に物せし自敘体の小說 "The Gipsies of Spain" 及び同四十三年の作 "The Bible in Spain" に利用せられたり。本國に歸りて二十餘年の後 Wild Wales" の一篇を著してみまかりにき。ボルローが小說は其の旅行日記と大差なし、どもに實地の見聞遭遇を材とせるが故ならん其の文致には到底他人の摸すべからざる趣味あれども之れを小說として全局より評すれば多く珍重すべき價値なし。

(六) マーチノー女史 Harriet Martineau 女史ははじめはユニテリヤン教義を主旨とせる宗教小說の作家なりしが後には活潑なる排宗教家として知られたり。經濟に關する物語を作るを得意とせしが一千八百三十二年に物せし "Illustrat-

ions of Political Economy"は時の好尚に投じて好評ありき。少年の讀み物にとて物せし作中其の最も名あるは"Feats on the Fiord"にして小説にては"Deer-brook"佳し。何れもエッチオオス女史の作意に倣ひたる者にて對話も圓熟せり。一千八百七十六年齢七十五歳にて沒しき。女史の思想は復然俗流に擺んでたりしが爲めに保守派の批評家には不當の批難を受け改進派には溢美の褒評を得たりき而も公平に評すれば其の才や識や多く稱すべきほどに秀でたるにはあらず。

(七) ミットフォード女史 Mary Russell Mitfordは一千七百八十六年に生れき醫家の女たり。家貧なりしが爲に齢二十四歳にして作詩に從事し一集を公にせり。後ち又劇を作る演ぜられて名ありき。又雜誌「ロンドン」の爲に數篇を寄せて令名ありき。後年此等の諸作を蒐め"Our Village"と題して出版せり篇中最も名高き敘景の材料は概ね其の居の近傍なるテームズ河畔の風光より得たりといふ。篇可憐瀟洒にして玩誦すべき價あり。一千八百五十五年に沒しき。小説家としては稱すべき程にはあらねど一技の彤管を以て能く兩親と其の身とを支へたりし精根は感ずべきなり。

其の他當時に稍名あるものを擧ぐれば"Hajji Baba"の作者ヂェームス、モリエル"Anastatius"の作者トマス、ホープ"Grahy"及び"Tremain"の作者リスター"Frankenstein"の作者シェリ夫人等ありき。されども彼のエリオット女史及びキングスリ等の世に出でしまでは特に意を率くべき程の傑作英國の小説壇に現れざりき。

第十一章　定期出版物の發達

十八世紀の新聞紙雜誌——十九世紀の諧雜誌——コッベットと『ウィークリ、レジスター』——ヂェフレーとエヂンバラ、レヴュー——シドニ、スミッス——『クォールタリー、レヴュー』の諧記者——其の他の雜誌——ラム——ハズリット——ウィルソン——ロックハート——デクインシー——リー、ハント——コールリッヂ——マジン——スターリング——フィッツヂェラルド

大作家の出でざりしにも拘らず新作小説の頗る歡迎せられたりし此の小説の隆盛期と相併びて否寧ろ此の隆盛と相俟ちて第十九世紀の初期以來一時に長足の進歩をなしたるものを定期出版物となす。定期出版物の重要なる部分を占むるは

新聞紙と雜誌となり。蓋し新聞紙雜誌は能く自ら發達せしのみにわらで他の諸發達をも取り入れて自家が生長の滋養分となしゝなり。彼の小說の如きも一冊子となりて單行する以前に大抵先づ新聞紙雜誌に掲載せらるゝを例となせりき。韻語の作亦た然りき。其の他政治法律經濟風俗等に關する文章の如きも歷史神學哲學等の立論考證に關する文章の如きも概ね先づ新聞紙雜誌によりて社會に紹介せられるゝを例としたり。按ふに讀者も早く知らんことを望み著者もまた廣く讀まれんことを希ふ是れ實に近世の學問界讀書界のならひなり。されば玉石同架は止むを得ざる結果にして掲載の順序と其の論說の價値とは每號もとよりまち〳〵なりき。さもあれ不朽の大文字は流石に自ら定評を得て後に大小の冊子となり以て後昆に傳はりたり。すなはち作者にとりては何等の不利もなく讀者はた居ながらにして諸作品の陳列場に臨むの感あり。其の風の延いて我が邦に及び今や世界の流行となりぬることと故ありといふべし。

按ずるに新聞紙雜誌が發達の初期は第十八世紀の終末二十年の間なるべし。當時社會上の題目にはアヂソン風の輕妙なる論文尤も行はれ宗教上にては非チャコ(アンチ)ピン派の論戰頗る盛んなりき。然れども到底十九世紀の初めに出でしエヂンバラ評論」「週報」"Weekly Register" 若しくは「ブラックウッド雜誌」に見ゆるが如き目覺しき批評創作には比ぶべくもあらざりしなり。殊に雜誌は第十八世紀の末には僅かに "Monthly" 及び "Critical Review" ありしのみにて何れも尙幼孩四肢未だ具足せざるの觀ありき。スモーレット、サウジー等が之れに關係せし間は一時活潑なる趣ありしが世俗には未だ重視せられず學者はた止むを得ざる事情あらざる以上は稿を投ずるを好まざりき。常置記者の如きも多くは一知半解の學說を諸種の問題に適用して一時の責を塞ぐに過ぎず隨うて精細の評論不黨の論議の如きはもとより望むべからざりき。

第十九世紀の初期に一時盛譽ありしはギッフォード Gifford の創與せし「クォータリ、レビュー」"Quarterly Review" なるべし是は第十八世紀の尤も注意すべき定期出版物なり。一時はサウジー之れが主筆となり續いてコールリッヂ之れが寄書家となりにき。是に於て在朝在野の名士碩學時々之れに寄稿し漸く讀書界を風靡せんとせり。是れより同種の出版物次第に增加し遂にウィルヤム、コッベット、フランシス、チェッフ

レー・シドニ、スミス、ヂョン、ウィルソン、チャールス、ラム、リー、ハント、ウィルヤム、ハズリット、トマス、デクインシー、ヂョン、キプソン、ロックハート等の諸記者輩出しき。夫れ新聞紙雜誌の歷史は取りもなほさず其の記者の歷史なるがゆゑにこゝに逐次に此れ等記者が功業と特質とを述べ傍ら定期出版物の發達を示さん。

(一) ウィルヤム、コッベット William Cobbett はファーンハム近傍の小作人の子にして一千七百六十二年に生れき。幼時は父に從うて犁鋤を執れりしが後ち一狀師の書記となりやがて軍籍に入り日夜軍學を學び七八年にして參謀軍曹となりしが故ありて軍籍を去り佛蘭西及び亞米利加に歷遊し "Peter Porcupine's Journal" の誌上に當時の佛蘭西ヂャコビン黨及び亞米利加民政黨を攻擊せり。一千八百年六月英國に歸りやがて有名なる『ウィークリ、レジスター』"Weekly Register" を發刊しき。此の週報は當事最も有益なるものとして歡迎せられき。後ち數年其の軍隊を攻擊せし筆時法に觸れて禁獄せられ此の間に其の基本金を失ひ出獄の後(一八一七)再び亞米利加に航し百方盡力の末一二月にして再び週報を刊行せり。是れより陸續適切の記事絶ゆることなく聲價舊日に倍しき。一千八百三十五年みまかりぬ。

コッベットが著は合して浩瀚なる書冊をなせり。彼の "Peter Porcupine" に掲げしもの十二卷 "Register" より選集せしもの六卷何れも尨然たる大冊子なり。其の他 "Rural Rides", "History of Reformation", "English Grammer" 等の著十數篇あり。就中 "Rural Rides" は其の記事に趣味あり其の文章の華麗なるのみならず記者が浮沈の境遇のさながらにあらはれたる最も面白し。但し "History of Reformation" は獨斷の記事多く其の他の時論亦た偏見多し。コッベットが文章は總じて雅馴なれども其の議論好尙等には數多の缺點なき能はず而も尙十六世紀に於けるラチマー十七世紀のベンヤン十八世紀のデフォーと共に優かに國文學の一代表者たるの名を占得するに足る。其文躰多くスヰフトに負ふ所ありしが其の性質と教育とは痛く異なりしが故に後には嚴然たる一家の躰をなせり。而してコッベットが政府、社會に對する議論は動もすれば偏固瑣屑に流れたり或は單に農民の便宜を先にして一國の全躰の利益を後にせんとし或は極力常備軍の廢止を論じ又國債の償還を急言せしなど概して重んずるに足らざれども其の

語氣及び文調の急迫なるや往々痛切の議論の如く聞かれしゆゑ一時は世俗の喝采を博したり。要するにコッペットはスヰフトが諷嘲反語に代ふるに直截の激語を以てせしもの所詮スヰフトより得たる處はたゞ其の立言の偶々謔々たる點に止まりしなり。

コッペットが『週報』に於て卑近の考察と議論とを以て社會の事相を評論せしと同じところに一層高尚なる題目を捉へて專ら文學的に評論を力めしものを『エヂンバラ評論』となす。此の雜誌の創設者に付きては二說ありて今尙定まらず。フランシス、ヂェッフレーとするものとシドニ、スミッスとするものと是れなり。されど二人共同の發意なりきとする說事實に近し。前者は蘇國人にして後者は英國人なり。まづ前者の生涯より敍說すべし。

(二) ヂェッフレー Francis Jeffrey はスミッスより若きこと二歲にして一千七百七十三年に生れき。エヂンバラの人、父は州廳の權吏にして有力なる保守黨なりき。ヂェッフレーは小學を卒へて後ちクラスゴーなる高等學校に入り相當の教育を受けやがて牧師となりしが業意に適せざりしかば一千七百九十八年ロンドンに赴きて文士たらんと欲せしが急に地位を得る能はざりしかば又都に皈りてシドニ、スミッスと共に『エヂンバラ評論』の發刊を企圖しき。雜誌の方針に付きては全くスミッスの創意に從へり即ち發行者の意見を以て寄書家の議論を左右することなかるべしとさだめ勗めて批評の自由を許しさて當時の名流碩學に請囑し相當の報酬を定めて其の稿を集めき。かくて一千八百二年十月第一號を發兌するに至りしが其の誌面さながら共和政治の面影を現じ統一闕如たる觀ありしかば更に方針を改め遂にヂェッフレー自ら之れを總括する任に當りたり是に於てや該誌は殆ど保守黨の機關の如き姿となりぬ。當時之れに關係せし文士中スコットは其の最も秀でたるものなり。然るに之れに資金を寄贈せし者は重にホイッグ黨即ち改進黨の名士なりしかば後ち數年にして內部に乖離生じ竟に"Quarterly" の發刊を見るに至りき。

『エヂンバラ評論』は後年其の競爭者の爲めに大打擊を受けて一頓挫せしが兎も角も十九世紀新聞雜誌の初生期に於て衆に先立ちて呱々の聲を擧げし功は沒すべからざるのみならず初生の兒としては頗る健全に生ひ立ちしものと言は

さるべからず。且つや立論時に急激に過ぎたりし憾なきにあらねど全冊に創新の氣充滿し殊に青年が精神を鼓舞し常に射利の域を脱して誠意事に從ひしは能く其の不統一の失を補うて餘りありきといふべし。其記者の如きも主筆ヂエッフレーが才筆の外に學問と經驗とを兼ねたりしレスリーとブレーフェアあり無双の機才ありて事變の處理に長ぜりしシドニ、スミッスあり精勵倦むことなかりしアローハムあり所説堅實にして文藻浮靡ならざりしホルナーあり加ふるに博覽能文のスコットを以てし相結びて馳騁を試みしは實に一世の奇觀なりしならん。ヂエッフレーは後ち舉げられて法官となり終生其の職に在り決斷の明晰と公平とを以て名ありき。彼れが文學上に最も力を盡しゝは千八百二年より同二十九年の間なり。輓近に至りては總じて雜誌の主筆は唯諸種の稿を集めて適宜に編輯するのみにして自ら筆を執ることは少きを常とす此の『評論』の後年はた然り。されど當年のヂエッフレーは自ら勵精し毎號六項以上は必ず自家の筆を以て之れに充てき隨うて多少の疎忽と失敗と無き能はざりき。彼れはバイロンを漫罵しウォルヅヲオスを嘲罵し甚しきは同雜誌の記者にして其の親友たりしスコットをすら誹譏せしことあり。其の他の小文士に對する不深切はた屢〻ありき。さもあれヂエッフレーは一方に於て超凡の長所なかりしにあらず只其の文學上の見解のみは甚だ宜しきを得ざりし也。按ふに彼れは彼のローマン派の氣運に對して必しも同情を有せざりしにもあらざらめど其の自尊傲岸の性が往々彼れをして其の批評を誤らしめしなるべし。其のスコットを侮りウォルヅヲオスを嘲りしは蓋し殊更に奇を出ださんとするの性癖と、一つにはスコット及び湖畔派詩人の大部分が着眼を殊にしてトーリー黨の支柱たりしを悅ばざりしとに因るならんか。さはいへど彼れは尙當時の一大批評家たるを失はず就中衆に先んじて時文の趨勢を觀察し整然統括して評論するの技は當時彼れに及ぶもの稀なりしなり。彼れは其の偏見誤解をすら整然と組織するの能ありしなり。又彼れが提出せし問題は必すや早晩來たるべき緊要問題なりしことは多とすべかりし所なり。一千八百五十年歿しき齡七十八。

(三) シドニ、スミッス　政治上の主義のほかは悉く多少見解を異にして常にヂェッフレーと好對照をなし〻者を Sydney Smith とす。一千七百七十一年に生れき。父

は相當の家產あり且つ教育ある人なりき。スミッスは長じてオックスフォードなる新大學に入り後に校友となりて數年を送りしが卒業の後はソリスベリプレーンの宣教師となりにき。一千七百九十八年エヂンバラに赴き本職の外に雜誌の評論に筆を採りしがヂェフレーと共に『エヂンバラ評論』を發行せしは全く此の時なりき。さて此の府に住すること五年にしてロンドンに赴き諸種の業務に從事し兼ねて心理學を教授し、かたはら『エヂンバラ評論』に其の寄稿を絕たざりき。後ちトーリー黨なるリンドハルスト卿の知遇を得て安樂なる牧師職を授けられ終生此職にありて一千八百四十五年に沒じき。

シドニ、スミッスとヂェフレーとは其の生地の異なるが爲に氣禀上に英人と蘇人との差ありしのみならず其の好尙長短はた殆んど正反對なりき。ヂェフレーは感情を重んじ文學を文學として愛玩すること深かりしがスミッスは之れに反し作を作として玩賞することを惡み且つ感情に拘泥することを非とせり。ヂェフレーは順智調諧(ユニーク)の才に乏しくスミッスは之に富かなりしと同時に其の諧謔の底に眞摯堅實なる思想を包みき。但し其の時人に愛せられしは此の眞面目の主義よりは寧ろ其の滑稽の機敏即妙なる處にありしなり。蓋し溢るゝが如き其の順才は隨時隨處に迸發し嚴格なる政治論と親友に與ふる手簡との別を問はず苟も事を說き理を敍ぶるに便なりと思惟せし時は常に之れを用ひたり。要するに彼れが調諧は常に「理性の用具」たりしなり。彼れは何れの場合にても毫も滑稽其の物の爲めに若しくは一時の興の爲めに滑稽を濫用せしことなし隨うて其趣きはヴルテールよりは寧ろスヰフトに近きものなり。兎も角もスミッスの滑稽は『エヂンバラ評論』の一粧飾たりしのみならず合冊となりて世に出でし後も尙ほ依然として玩賞せられき

『エヂンバラ評論』の記者中他には取りたてゝいふべき程の文士なし。夫のブローハムの如きは政治經濟の論者としては意を率くに足れど文客としては稱するに足らずマッキントッシはたむしろ哲學者として遇すべきものたり。但し『エヂンバラ』の强敵たりし『クオールタリー』の記者にはギッフォードありカンニングありエリスありスコット及びサウゼーあれども此等は單に雜誌記者としてのみ論ずべきにあらねばこゝに畧き今はたゝ

(四)ヂョン、バルロー及びアイサック、ヂスレーリの二家を略述して更に次きの雜誌者に移らん。バルローの生涯は頗る複雜なりき。貧賤の家に生れ幼にして製造所の書記となり次に水夫となりまた數學の教師となり後ちマカートニーが有名なる支那航海に從ひ轉じて南米に航し年四十にして遂に海軍省の秘書官となり在職四十餘年一千八百四十八年齡八十五にしてみまかりぬ。バルローは『クォータリー』の社員にして地理及び海軍史を擔當せる記者として名ありき。アイサック、ヂスレーリは一千七百六十六年に生れき。幼時特に嗜好する業務なかりし爲めに「智能不具」の童として輕侮せられしが廿六歲にして始めて一文を草し之れより記者となりて終生其の業に力めたり。文學上の奇事逸話を集めたる "Curiosties of Literature" の前部は其ところに著しゝものにして "Calamities of Authors" 及び "Quarrels of Authors" 又 "Amenities of Literature" 等の著あり。就中 "Curiocities" は今尙珍重せらるゝ彼れが傑作なり。

次きに世に出でし著名の雜誌二種あり "Black wood's Magazine" 及び 'London Magazine" 是れなり。前者は一千八百十七年エヂンバラにて發刊せられ歩武堂々長き年月の間繼續せり。後者も同年にロンドンに現はれ一時は華やかに運動せしが程もなく斃れたり。前者は保守主義を懷き後者は自由主義を取れりき。但し前者にも自由主義の人なかりしにあらず後者はたデ、クィンシーの如き保守主義家ありラムの如き中立主義家もありき。かくて相對峙して互角の勢を張ること數年に亘りしが『ロンドン』は其の主筆ヂョン、スコットを失ふに及びて復た頭を擡ぐること能はざるに至りき。其の掲載範圍の廣かりしことに於ては二者共に雜誌の名に負かざりき。按ふに『エヂンバラ』と『クォータリー』とは所謂評論の雜誌にして記載の事項も批判評論の外にいでざりしが『ブラックウッド』は然らず最初より詩歌小說評論傳紀及び其他の事項に對しても平等の地位を與へたりき而して『ロンドン』はた此の例に倣へりき。後者はチャールス、ラム。ハズリット。デ、クインシー。ブッド。ミットフォード女史等之れを扶け前者はウィルソン、ロックハート及びウェットリック、シェパードの三頭政治にマヂーンの應援其の誌面を飾りき。以下年齡の順に從ひて先づ

(五)チャールズ、ラム より敍せん。按ふにラムの文致は未だ剛健とはいふべから

ず著す所もまた少かりき而も其の着想と其の措辭とは共に群に超え精微簡淨加ふるに輕妙洒脫の致あり。ラムは一千七百七十五年ロンドンに生れき。父は狀師の書記にして忠實の人なりき。ラム幼にして基督育兒院にて敎育せられ夙に多望の名ありき。業を卒ふるの前父の傭主たりし人東印度會社の要職を得にければラム父子も亦た之れに從ひて就職すべき筈なりしに偶ラムの姉メリー發狂して其の實母を殺しぬラムも亦害に遭はんとせしが辛くも之れを逃れたり。ラムは怨を捨てゝ深切に姉を看護せり狂氣せる姉も病の間歇中には厚く其の恩を感謝しきといふ。蓋し此の間の經驗はラムが詩想に裨益する所多かりき彼れが溫乎たる微妙の想像は多く此の間の閱歷に基くといふ。

ラム幼より十六七世紀の諸作を愛し熱心に研究せりき故に其の初期の作は大抵該紀の風調を帶びたり。彼れが姉と共に著しゝ "Tales from Shakespeare" 『沙翁劇の筋書』チャールズは悲劇のをメリーは喜劇のを物せり)は其の文致精妙にして簡に善く原作の面影を傳へたり。之れより先き一千七百九十九年ヨリザ朝の悲劇に倣ひて "John Woodvil" といふを作せしが此の作世評の悪しかりし程には拙からざる作なり。これと前後して "Poem" "Rosamond Gray" "Specimens of English Dramatic Poets" "Adventure of Ulysses" 及び "Poetry for Children" 等の著あり き。但し彼れが才筆の十分に現はれしは彼の『ロンドン雜誌』發行の後なりそは齡四十六才の時なりき。件の誌上にて彼れは名高き "Essays of Elia" の正續兩篇を續載しき。是れラムが傑作の文集にして意味ふかき諷諧に富めり。要するに彼れが諸著に通じて歷々たる特徵は其の十七世紀の作家殊にバルトン、フルラル及びブラウン)より嫻雅溫藉の文品を得たりしこと其の十八世紀の論文家より精緻纖巧の筆意を受けしこと其の諷諧を如意にして悲より喜に轉ずるの自在なりしこと其の人間觀の健全なりしこと其の先天的に文學を愛し之れを解釋するに妙を得たりしこと其の想像の高上なりしこと等なるべし。シ一曰はく

ウォルツチオスは隱者風の田園詩人なり而してラムは都會の生活中より其のインスピレーションを得て而も誠實微妙深邃(ツルー、デプト、プロフアウンド)は毫も彼れに讓らず

と。げにやラムは純然たるロンドン市の見にして都會を去ることを無上の不

幸と感じたりき。宜なり『ロンドン雑誌』のよく其の意氣に投ぜしこと。一千八百三十四年に沒しき。ラム夙にコールリッヂと親交し其の紹介によりてウォルヅヲオス、サウジー等と相知れりき。當代の批評家トマス、デクインシーは彼れをたゝへて單に英國にてのみならず、歐洲にても第二流以下には下らざる文士なりとなし其の文學上の功績は佛のラ、フォンテーヌと伯仲すと評しき。

（六）ハズリット William Hazlitt はチャールス、ラムとは異なる方面に於て時の文壇に重きをなしゝ詞客なり。多年愛蘭土に住へりしユニテリヤンの教師を父として一千七百七十八年に生れき。二十歳の時父は職務を帶びてシュロプシャヤなるウェムと云ふ處に赴きしが宗義相同じかりしかばコールリッヂは屢〻訪ひ來りハズリットは之れが爲めに尠なからぬ好感化を受けしに似たり。幼きより美術の作品を愛玩し且つ多少斯道の素養ありしゆゑに其の初めて公にせし論文は美術に關したるものなりき。後ち數年ロンドンに飯りてチャールス、ラムと相知り其の姉の友たりし女と結婚して暫くソリスベリー、プレーンなるウィンタースローに退き一千八百十二年再びロンドンに立ちいで評論の筆を社會百般の事に着けて新聞雜誌の紙上に名を知られき。後ち重に『ロンドン雑誌』に力を盡し文學演劇及び美術の記叙評論に勗めき。歿せしは一千八百三十年の九月にして最後の三十年間は彼れにとりて最も不幸なりし年なりき。生計の不如意なりしが上に妻に棄てられ人の爲に欺かれ又主義の敵としてトーリー黨の雜誌殊に『クォータリー』及び『ブラックウッド』に攻擊せられ親しき友とすらも交りを遂ぐる能はざりき。是れまかしながら情熱餘りありて狷介に過ぎたりし性の致しゝ所なり。文士の不遇は由來境遇及び社會に因由するもの多しと雖もハズリットの不幸の如きは主として其の自ら招く所なりき。セインツベリー氏曰はく

批評の才と無愛相（インアミアブル）の性質とは相伴ふは必然か將た偶然かはしはらく措く、兎に角にハズリットは其の性質の矯激なりしと同時に非凡の批評的技倆ありしは事實なり。

種々の點に於て彼れは當時の大批評家なりき。

と。さて彼れが著作は其の部分よりは其の全躰に於て趣味あるを常とせり。但し其の最長篇 "Life of Napoleon" (『那翁傳』)及び其の初期の作 "The Principles of

Human Action" の如きは殆んど價値なきものなり。彼れが得意の著述は品評敘說の小品なり而して其の題目の範圍いと廣く集めて別冊子となしたるものの みにても十種の多きに及べり。之れを大別して三種とす第一美術演劇に關するもの、這は比較的に不得意のものなりしが如し。彼れは劇を讀み物詞章として觀ることに重きを置けり之れを所作科介として論じたるはいと粗雜なり。美術(畫)の趣味に於ける彼れが修練も十分ならざりき加ふるに前世期中に於ける同種の論文中模範として見るべきものいと少かりしかば品評批判の法おのづから完全なる躰をなす能はざりき。彼れが技藝評論中の白眉と見るべきは "Conversations with Northcote" なれどもこれすら美術論は割合に乏しく文學論及び音樂論其の多きを占めたり。第二は總稱して雜論ともいふべきもの、或は彼れが最大伎倆をこゝにありと做すものあれど恐らくはこは其の外觀に眩惑したるものゝ說ならん。但しハズリットが此等評論は尠くとも其の文學的觀察の深邃と批判の犀利とに於ては尠くとも前代の諸評家よりもすぐれたり "Going to a Fight" "Going to a Journey" "The Indian Jugglers" "Merry England" "Sundials" 及び "On Taste" 等は記憶するに足る名什なり。さて第三は文學に關する評論なり彼れ雜種の評論にも秀でたれど文學の評論には更に一段の妙を得たりき。蓋し文學に於ける其の學植は他の場合に於けるよりも一層深淵なりしなり。然れどもまた時にはラム、ハント等の容易に發見し得しことをすら誤解せしこともあり而して多少の偏頗と迂濶とは彼れが評論のここかしこに常に存する缺點なり而も "The Characters of Shakespeare" "The Elizabethan Dramatists" "The English Poets" 及び "The English Comic Writers" の四大篇及び其の他無數の斷片に就いて之れを觀るに彼れは英文學を評論せし英國人中に確かに第一流たるの位置を占むべきものなり。彼れは彼のスペンサーが「詩人中の詩人」と稱せらるゝごとく或は「批評家中の批評家」とも推稱せらる。彼れが過誤は部分に於ける過誤にして全躰に於ける其の批評の實質は人の容易に企及し得ざる所なり。セインツベリ氏又曰はく

彼れの偏見は屬〻其の評論に附隨せるならひなるが故に吾人は彼れが嫌惡するを聞くと雖もいと或未なる場合にだに尙流石に危み疑ひ之れに從ふを躊躇する

の念を生ず。然れども身自ら批評の業に當りて進歩遲々たるの人若しくは自ら書を讀んで能く好惡の言を取捨し得る人に取りてはハズリットが著作は内外稀有なる珍寶なるべし。

と。

此の時に方り所謂コックニー派即ちハント、ハズリット等の一派に反對し且つトーリー主義に抗抵して興りたる少壯者の一團躰あり之れを "Blackwood's Magazine" の一派とす。筆鋒の鋭利なる之れに當る者悉く傷くの概あり而して『エヂンバラ評論』に伴へる黨同伐異の陋風は絶えて無かりき。最初はヂョン、ウィルソン John Wilson ヂョン、ギブソン John Gibson ロックハート Lockhart, 及びヂェームス、ホッグ James Hogg 等筆を執りて盛んに『エヂンバラ』の固陋を攻擊せしが程なく愛蘭土の南部より學識經驗に富めるウィルヤム、マギン William Magiun 來りて之れを扶け大に其の誌面を整頓しき。此の一團中最も年長なりしものは

(七) ウィルソン なり。抑も『ブラックウッド雜誌』は名義上ブラックウッドの發行なりしが其の編輯は共和的組織を以て成り別に主任といふ者なかりしが常に其の運動の指導を掌りしはウィルソンとロックハートの二人なりき。ウィルソンの此の雜誌に關係するに至りしは全く偶然なりしが如し。ウィルソンハ一千七百八十五年に生れき。父はペイスリーにて製造を業とせし富有の商人なりき。ウィルソン幼にしてグラスゴー及びオックスフォードの高等學校にて教育を受け少壯にして父が巨産を享け廿六歳にして結婚し Windermere に住して地方紳士の生活を送りしこと數年此の間古今の書を玩讀し又ウォルヅヲオス、コールリッヂ、サウジー等と交り就中ウォルヅヲオスの詩風を好めり。其の自作 "Isle of Palms" (一八一二)及び "The City after the Plague" (一八一六)等の如き專らウォルヅヲオスを倣へるものなり。後者の發兌せられし前、偶〻不幸にして其の家産を失ひしかば之れより文筆を以て生計を營まんと欲し先づエヂンバラに赴きしが『評論』の主筆ヂェフレーと相協はざりしかば遂に同志を糾合して "Blackwood's Magazine" といふ新雜誌を興すに至りき。かくて Christopher North (及び其の他二三)の假號にて陸續種々の題目に筆を執りき(此の時の作は後に "Christopher North in his Sporting Jacket" といふ一冊となりて出でき)就中其の "Noctes Ambrosianæ" は政治、文學及

び其の他雜種の事を題目として物せしものにて時人を樂ましめ且つ之れを裨益したりき。此の頃作せし小說も歡迎せられき。一千八百二十年に至り倫理哲學の敎授としてエヂンバラ大學に聘せらる。後ちロックハートの事によりてロンドンに赴くに及び遂に『ブラックウッド』の首席記者となり十二年間一日の如く之れに勗めしが晩年健康の衰ふるに及び彼の敎授の職をも辭し又絕えて雜誌にも關係せず一千八百五十四年にみまかりき。

ウィルソンの敍說文は平凡稱するに足らず其の詩歌はたスコット、バイロン及び湖畔派詩人の間に立ちては特別の光輝を放つ能はず只其の雜種の敍說は此の種の記事に一生面を開きしものと稱すべし。其の文の强健にして富麗なる古今に比類多からずとす。按ふに雜種の記事たるや從前は概ね無味乾燥にして散文を以て名ありしバーク、ギッボンだに尙ほ時には冷淡枯稿の憾ありしにウィルソンに至りて一機軸をいだし花あり實あり肉あり骨ある一躰を捌め枯淡の記事には尤も文調を注意し嚴肅なる論文の次ぎには輕快の談話を置くなど全躰の配置調合甚だ宜しきを得たりしかば讀者卷を終るまで厭倦をおぼえざりき。さもあれども深大の學識半確なる持說あるにあらねば其の百般の事を評隲するや往々にして是非眞僞を混同せしことありされば其の雜著集(大抵『ブラックウッド』に掲げしもの千卷を取りて之れを通覽するに其の文章の形式雜多なると同時に其の內容はた精粗不同なり忽ちにして嚴肅雄大忽ちにして些屑俚俗忽ちにして沈痛激越忽ちにして冷淡輕浮時には文學の深刻なる解釋者の如く時には區々たる死記の徒たり。讀書社會の彼れに對する褒貶の一定せず今日に至りては一時赫々たりし名望の大に衰へたる趣あるも宜なるかな。同時代なる『クォールタリー』記者が言に「吾人は彼れ(ウルソン)が著の世に愛玩せらるゝことを能く今後十二年に及ぶや否やを保する能はず」といへる必ずしも冷罵の妄語にあらず。

(八) ロックハート　ウィルソンと相併びて『ブラックウッド』社の牛耳を執り善く之れと相交り而も別樣の趣味を以て當時に顯はれたりしものは John Gibson Lockhart とす。一千七百九十四年カムバスチサンに生れき。父は州廳の長吏なり。ロックハートもウィルソンに同じくグラスゴー及びオックスフォードにて敎育せられしが

皆卒業に及ばずして去りて獨逸に遊び歸朝の後蘇格土法廳の裁判官となりにき。されど辯論不得意にして其の業に安んずる能はざりし折から會『ブラックウッド』の發刊に遭ひしかば乃ち入りてウィルソンを扶け忽ちにして首席記者となり一千八百十九年始めて一書を公にす之れを "Peter's Letters to his Kinsfolk" といふ。翌年スコットが長女を娶り之れより數年間エヂンバラとチーフウッドとに住し絶えず『ブラックウッド』に筆を執り傍ら四篇の小説と "Spanish Ballads" と題する詩卷を物しき。同二十五年員スコットの破産せしやロックハートはギッホオドに繼ぎて『クォールタリ評論』の發行者となり『ブラックウッド』を退社してロンドンに赴き兼ねて "Fraser" 雜誌の記者となり文學政治の敘説に其の筆を役したり。スコット歿するに及びて其の詳傳の編撰に着手し一千八百三十七年より同三十九年に至りて卒業しぬ有名なる "Life of Scott" (『スコット傳』)是れなり。次に成りし "Life of Napoleon" (『那翁傳』)も亦た好著と稱せらる。同四十三年ランカスター公が莊園の會計監となれり後ち十年心身衰弱せし爲め『クォールタリー』記者の職を辭し同年の冬に歿しき。

ロックハートの雜著は未だ別冊に蒐集せられたるものなけれども其の作は夥し隨うて其の論説の範圍も廣く諸方面に渉りて見るべきもの多かり。彼れは論じ且つ作せし人なり。嘗て『ブラックウッド』紙上にてキーツを罵倒し又『クォールタリー』にてテニソンを譏刺せしが如きは其の失當の甚しきものなれど流石に詩人としても取り所なきにあらず否恕凡の才を有せしこと明かなり。其の "Spanish Ballads" は(一八二三)サウジーとスコットとを典型として作せしものなるが頗る見所ある作なり。又彼れが時々に物せし小篇は諷諧に秀で且つ間々燃ゆる如き情熱を示せり。然れども詩歌は畢竟彼れが閑餘のすさびにして其の本領は散文に存したり。散文の著作中最も名あるものを『スコット傳』とす。スコットが人物の温良高雅にして才學のいみじかりしと其の閲歴に關する材料の富豐なりしとは蓋し此の書の成功に尠からぬ便益を與へしならめど編者が功勞もまた多きに居る。こは彼のボスエルが『ヂョンソン傳』と相併ひて古今人物傳中屈指の名著たり。『那翁傳』(スコットの『那翁傳』を撮要せるもの)はた多く之れに讓ちす。彼れの小説は都べて四篇あり何れも當時には好遇せられざりき。處女作 "Valerius"

は古文体の物語にして讀む者いと少し次に著はしゝは"Reginald Dalton"と題してオックスフォードの活世態を寫さんと試みしものなるが同じく失敗の作たり。さて"Matthew Wald"は最後の作にして一狂夫を主人公とせるものなるがこれまた陰鬱に過ぎ奇激に流れたる作なり。最も佳なるは"Adam Blair"なりこは"Valerius"と同年(一八二一)に成りしものにていと短き作なれど脚色も人物も宜しきを得たり主人公なる寡夫が隣家の細君を戀慕する切情などよく寫したり。

(九)デ、クインシー Thomes De Quincey はウィルソンと同年(一七八五)に生れき。父はマンチェスターの商人なり。七歳父を喪ひ母と共に棲みて日々同市の小學校に通學し後去りてオックスフォードに赴きて其の一大學に入り卒業に及ばずして退學しグラスミアに徒りそこに住せしこと十二年此の間先づ『ロンドン雜誌』の寄書家となり次いで一千八百二十六年『ブラック・ウッド』社に入りまづ『レッシング論』を掲げ又有名なる論文"Murder considered as One of the Fine Arts"を物しき。同三十年家族を携へてエヂンバラに徒りしが晩年に至るまでも該雜誌に寄稿することを忘らず此の間有名なる雜篇あまたあり兼ねて"Tait"雜誌をも助け(一八三四—五一)晩年には其の全集の校訂に從事し十四冊の大編を完成して同五十九年に歿しき。

件の十四冊に收めたるものゝ中"Confessions of an Opium Eater"(一八二一出版)は最も有名なる作にて文章の雄渾暢達古今多く其の儔を見ず。レズリー、スチーブン氏が彼れの文章を稱揚して之れを假りに意義なき文字とせんも其の高渾なる風調は尙よく讀者を動かすに足る」といゝるは必ずしも溢美ならざるべし。さて其の史論雜誌の類にては"Flight of the Kalmuck Tartars"を最も佳なりとす。蓋し其の篇の何等の種類に屬するを問はず彼れが作の最も清妙なる個處には概ね夢を假りて其の想を表せるもの多し是れ其の尤も得意の獨擅場なりき。曩きにヰルソンを評したる『クォールタリー』の記者又デ、クインシーを評して曰く。

要するにデ、クインシーは英國の大文豪なり非常に綿細なる批評家なり決して自己の確信を枉げざる正直の學者なりコールリッヂに繼ぐべき哲學の研究者なり。彼れ一

たび去りて『ブラックウッド』は其の編輯者が得る能はざりき彼れが文章は他の做ふべからざるものなればなり云々

(10)リー、ハント　詩人としても知られたるハントが本領は寧ろ散文にありしが如し。而も其の詩人的温情は他を譏刺嘲弄するよりも寧ろ此の末技にだにも同情を寄するの癖を生じき。一千八百八年其の弟と共に"Examiner"を發行し十四年間之れに筆を執りき。此の間嘗て事によりて禁錮せられしが出獄の後引き續き"Reflector"(一八一〇)"Indictor"(一八一九—二一)及び"Companion"(一八二八)等を發行し且つ伊太利に遊びて"Liberal"を携へ歸りき。其の著作の佳なるものは大抵新聞紙雜誌に掲載せられたり。彼れは健筆比ひ少なく一人にして日刊の諸記事を擔當し"Father"を發行せし時の如きは十八ヶ月間全く他人の力を借らず"Leigh Hunt's London Journal"を刊行せし時の如きも二年間其の誌面の半ばを引き受け尙ほ傍ら他の新聞紙雜誌の寄書家となりて絶えず其の著を掲げきといふ。但しかゝる斷篇は概して劣著たりしこと勿論なり。彼れは力めて說の偏狹を避け穩健着實を貴びしが如しされど尙動もすれは淺慮狹局の弊なきこと能はざりき。彼れは物の實を看取する力敏ならざりしにあらねど而もセインツベリ氏の所謂「蝴蝶的性質」(バタフライカラクタル)より來れるもの多く彼の翩々として榮花に戲れ徒らに飛英を追隨するが如き失ありき。其の逸早くキーツが異品を看取せしも恐らくは此の種の觀察に基きしならんか。然れども彼れの作家を稱揚せしは一々其の眞實に銘感せし結果なりき毫も批評の爲めに批評するが如き振舞は無かりしなり。要するに彼れはラム、ハズリット等に比すれば其の觀察の深さこそ劣りたれ誤謬は彼等よりも少かりしならん。即ち彼れが位置は詩人たるキーツ、シェリーと批評家たるラム、ハズリットとの中間にありといふべし。

(11)ハートリー、コールリッヂ　は詩人サミュエルテーロル、コールリッヂが長子なり。一千七百九十六年に生れ幼にして穎悟夙に屢々ウォルツヲオス、サウジー等を驚かしき。小學校を卒へて後オックスフォードのマートン大學に入り該校の爲めに盡す所ありしが後暫く『ブラックウッド』に筆を執り且つ私塾を起しき。ついで某書肆の爲めに"Biographia Borealis"を著しさて後グラスミアに退き著作の校

訂等に從事し一千八百四十九年に歿しき。遺稿七篇は家弟編輯して出版せり。"Poems" 二卷 "Essays and Fragments" 二卷 "Biographia Borealis" 三卷なり。中にも "Biographia Borealis" (後ち父の補修を經 "Lives of Northeren Worthies" と改題して世に出でき)は其の觀念持說の表はれたる點こそは『詩集』『論集』に及ばざれ免に角彼れが傑作の隨一にして其の眞文學史家たることを證せり。彼れが詩篇亦父を辱めざる佳什に乏しからず而も其の本來は詩人たるに適せずして寧ろ批評家たるに適したりき。彼れが詩を作りしは周圍の風尙に動かされたりし結果のみ。其の批評の才分如何は其の『論文集』に於て見るべし庸劣なる個處も少からねど着眼の周細にして用意の全局に亘りたるは稱すべし就中 "Ignorannus of the Fine Arts" の篇はもてはやさる。

(三) マヅン William Magion は從來の史家には輕視せられたれど其の記者としての筆力と功業とは以上の諸文士と伍を與にして愧づる所なかるべし。一千七百九十三年愛蘭士コルクなる學校教師の家に生れき。ダブリンの神敎大學にて優等の卒業をなし暫く父の業を扶けしが『ブラックウッド』の發刊せらるゝや其の記事躰裁意に協ひしかばエヂンバラに赴きて該社に投じ Ensign O' Dolherty の假名にて盛んに諸欄に筆を揮ひき。後ち去りてロンドンに赴きトーリー派の諸雜誌を助け遂に一千八百三十年の頃ロントンの『ブラックウッド』ともいふべき "Fraser" を發行し(或は云ふ發行を助けたるのみと)さて『エヂンバラ』『ロンドン』『クォータリー』『ブラックウッド』等の諸先輩を凌ぐばかりに當時の俊才を集め親らも之に力めしが漸く健康衰へ加ふるに資金缺乏せしかば業基未だ定まらざるに(一千八百四十二年)歿しき。

マヅンが著は雜誌物の外に詩歌小說の作あり詩集中 "Homeric Ballads" は頗る名あり。或は痛く之れを推重するものもあれど詩としては格別の作にあらず。小說は一も成功の作なけれど『ブラックウッド』に掲げたりし小品は何れも特得の文章にして中にも "Story without a Tail" の如きは趣味ある作なり。嚴正なる評論中シェークスピヤに關する評論の如きは以て彼れが學識見を見るべく又其の批評眼の鋭利なるを見るべし。彼れは滑稽頓智に富み兼ねて愛蘭土風の悲哀と風調の美とを具へき。

マクレンが "Fraser" 社に網羅せりし一群の英才はいづれも當時の錚々たる詞客なりき其の業の中道にして廢せしは惜むべきとなり。件の一群は當時 Fraserians (「フレーザー派」と稱せられたり就中最も名ありしを擧ぐれば Irving, Gleig, Egerton Brydges, Allan Cunningham, Carlyle, D' Orsay, Brewster, Theodore Hook, Lockhart, Croker (愛蘭土鬼神譚の作者) Jerdan, Dunlop (有名なる『小說史』の著者) Calt Hogg, Coleridge, Harrison Ainsworth, Thackeray, Southey, Cornwall 等あり。此等諸記者同時に相併びて執筆せしにはあらねど舊新過渡時代のサウザー、コールリッヂが全く新時代なるサッカレー、カーライルと共に同一紙上に筆を執りしは奇觀なり。即ち此の雜誌は過渡時代と新時代との第二の過渡をなしゝ者なり。按ふに斯る現象の生ぜしは所謂偶然の結果なるべく又雜誌其の物の性質にも由りしならんか。或は當時雜誌新聞紙類の非常に數多く出でしが爲め其の記者の估價の經濟上低減せしにも由るならんか。さもあれサッカレーの如きカーライルの如きは他の『エヂンバラ』(改革後の)の『コーレー』『エストミンスター』のミル等と共に單に一雜誌氏を以て終りし者にあらず否或は哲學に或は歷史に或は小說に別に嚴然として殊なる一格を持し隨うて其の文學上の事業も自らヂェッフレー、スミッス、ウィルソンの輩と異る所あれば今此の章に於て彼等の上に說き及ぶべくもあらず委しくは章を別にして講述する所あるべし。

(三)スターリング John Sterling の名の今日に高きは其の文學上の功業の偉なるに由らずして寧ろ(一)其の性行のカーライルが不朽の筆によりて傳へられたると(二)彼の有名なる「スターリング社」の開祖なりしとに由れり。父はエドワードとて "Times" の發行者なり。ヂョンは一千八百六年ビュートの島に生れき。幼時家庭にて相當の敎育を受け次ぎにグラスゴーの學校に入り十九歲にしてケムブリッヂなる神敎大學に轉じ夙に有爲多望の譽を博しき。後ちトリニチー、ホール(神敎學院)に入り "Athenæum" の寄書家となり西班牙事件に關係し又西印度に航しき。歸鄕の後同院を卒業し重に雜誌家を助け一千八百四十三年に歿しき。其の一生の閱歷と其の思想の經過とより見れば常に所動の位置にのみありしか如しと雖も其の著作に於ては內容外形ともに儼然たる一家の機軸ありて主張の見るべきものありしなり。但し彼れは事に當りて自ら營々せず

寧ろ同輩をして其の長を表はさしむる度量ありしが故に其の社の如きも十分に當時の英才を集むるを得たりしなり。社中の重立たるものは Tennyson, John Stuart Mill, Carlyle, Allan Cunningham, Houghton, Francis Palgrave, Thirlwall の如き是れなり。尙第二流以下に屬せしむべきものには Blakesley, Worsley, Hepworth Thompson, H. N. Coleridge, Francis Doyle, (後ちにオックスフォードの教師となり散文に若干の名作あり韻語にては "The Loss of the Birkenhead" "Private of the Buffs" "Red Thread of Honour" 等今尙ほ人口に膾炙せり) Edmund Head (美術論に名あり) 及び G. C. Lewis 乃至 Malden, Frederick Pollock (ダンテを譯して譽を博せし者) Philip, Pusey, James Spedding, Twisleton, George Stovin Venables (三十五年間 "Saturday Review" の主筆たりし人) にして中には宗教問題にのみ留意せし者もあり政治界に在りて重に政治上の評論に從事せしものもあり文學者といはんよりは寧ろ學者といふべかりし者もあり種類は樣々なれど兎に角親密に相結合して大に當時の雜誌的文學を飾りたり。

スターリング社の一員にはあらねど此の社と親密の關係を有し常に雜誌の寄書家として著はれたりし者を

(四) フィッゼラルト　とす(一八〇九—一八八三)。小學校を卒へてケムブリッヂの神教大學に入り卒業の後三十年程の間は別に業務に從事せずして日々讀書、思索耕作、游泳等に耽り且つ深くカーライルと交り其の論を上下せりき。始めて其の著を公にせしは既に半生を過ごしゝ後にていづれもケムブリッヂ在學中の舊著なりき。西班牙語を學びカルデロンの脚本を譯して多少の成功あり乃ち轉じてペルシャ美文の譯案に從事し二三の著あり。其の全集は三冊となりて出でしが書簡は其の多分を占めたり這は其の批評眼を窺ふに足るべきものなり。人と爲り篤實なりしが多く人と交はらず交はれば必ず誼厚きを常とせり。此の性質よく其の評論に表はれたり其の言ふ所常に一方に局し自家が敬重せざる人の作に贊辭を加ふると稀なる代りに其の一たび意に稱ひし人の著に對すれば分析解剖微に入り細を穿ち作中の妙處は一々指摘して至らざる所なし。亦一種の批評家といふべし。

以上擧げたる者の外當時の雜誌新聞紙に關係せし詞客を數ふれば尙數十百の多

きに達すべけれど其が文學上の事業は到底以上列擧せる者の上に出づる能はざれば今一々之れを擧げず。

第十二章　歴史家

史家と詩人――十九世紀の史家――ハラム――ロスコー――ミトフォード――ターナーとリンガード――バルダレーザ――マクリ――アーノルド――其の他諸家

第十九世紀の初め二三十年間はあらゆる文學の一時に興隆せし時期なれば此の間に於て歴史の發達せしこと異しむに足らざれど後者が興隆の因緣は特殊なるものありそは歴史家の性質の他文士のに異なるに由るならん。稀世の名匠につきて之れを觀れば詩人(創作家)も歴史家(記實家)も等しく天分を要し修錬を要すると論無けれどさりとて二者を同視せんはいみじき誤謬なり。等しく才といふも詩人の才と史家の才とは明かに相異なり等しく學といふも詩人の學と史家の學とは大なる差別あり。詩人と史家とに要する才學識の性質と程度とはこゝに詳說する餘地なけれどたゞあらましを言はゞ想像の不羈自由と考證の愼嚴緻密、詩興の飄逸と研鑽の精刻同情の深切と判斷の嚴正、此等特殊の資格は何れも一方に

は必須なるも他方には要なきものゝセインツベリ氏が「詩人に天分(ジニヤス)あるを要するは僧史家に才能(タレント)あるを要するがごとし」といへるは大体に於てよく以上の旨を盡へるものなり。

唯夫れ天分を要す天分は天の成す所只稀に世に現る故に詩歌は間歇的に隆替す。唯夫れ才能を要す才能は多く修養に負ふ故に史學は繼續的に進歩す。夫れ十九世紀に活文學の勃興せしは前世紀の遲鈍無爲の反動にして自然の數のみ譬へば枯木の陽氣に逢うて再び其の芽を開發するが如し。ひとり歴史に至りては此の例に似ず反動といはんよりは寧ろ進歩と稱すべきなり何となれば前世紀の史家が遺せりし史的著述は當期の研究に尠からぬ便益を與へたればなり。常磐木の春に遇ひていよ〳〵其の綠を增せるに比すべし。蓋し十八世紀に於ける大歴史家ヒューム、ロバートソン、ギッボン等が餘業は革命時代に及びても打破せられず斷絶せざりき、否、詩人、政治家、社會學者等の利用を經て多少の利子を生み以て十九世紀の後進に遺傳せられき。

こゝに過渡時代の史家を通覽せんに先づ餘暇乏しく史材不如意なりし時代に尙

一生を斯道に委ねたりしゴドヰンあり哲學に本領を措きながら史學の功業尠からざりしマッキントッシあり史の叙事に一躰を擲め "History of the Peninsular War" (『半島戰爭史』)をもて讀史界を風靡せしサウゾーあり同じく『半島戰爭史』を殆ど同時に物して批評家をして異口同音に「英國の海戰史中最も精好なる者」と讃せしめしウィルヤム・チーピヤー(一七八六—一八六〇)あり。其の他モーア、カムベル、スコット等が著作の中にも後の史家の採用すべかりし筆法著眼も少なからざりき。彼等は間接若くは直接にマコーレー、カーライル等の爲めに基礎の一角を築きしものなり。以下少しくこれらマコーレー前の史家に就きて觀察せん。

(一)ヘンリハラム(一七七八—一八五九) は歴史を以て本領とし傍ら文學に力を盡しゝなり。父はブリストルの副牧師『エヂンバラ評論』の記者にして兼ねて有力なるホイッグ黨員なりき文學上の好尚も高く筆も説も共に超俗の名ありしが其の子ハラムは其の資性をさながらに受傳して生れたり。少壯にして一寺院の役員となり生計ゆたかなるを得たりしかば終生衣食に追はるゝこともなく力を其の業に專らにすることを得たり。一千八百十八年より同四十八年に至る三十年の間に政治及び文學に關する歴史的著述數篇を著し之れによりて其の名を一世に擧げたり。"View of the State of Europe during the Middle Ages" (『中古歐洲諸國の概況』)(ヘンリー七世よりジョールジ二世まで)及び "Introduction to the Literature of Europe in the 15th, 16th and 17th Centuries" (『十五、十六、十七世期中歐洲文學概論』)一八三七—三九)等是れなり。政治に關するものと文學に關するものと其の價値相等しからず。前者は其の偏狹なるホイッグ派(改進派)の主義の爲に誤られて少なからぬ瑕疵を有し觀察はた冷酷に過ぎたりされどかゝる些細の失は未だ以て其の長を沒するに足らず憑據の精確と記事の明晰とに至りては當事他に比なければなり。然れども其の文學史と文學的評論とに至りては頗る服すべからざるものあり其の確説として引照せる言は今や何の價値なきもの多く且つ著者みづからの所論の如きも尋常の人物尋常の題目に關する限りは必ずしも當を失せざれど少しく異樣の題目又はやゝ把捉し易からざる人物を評論するに當りては一概に其の偏歪なる準繩を以て之れを律せんとしたるが爲めに不要に流れ淺に失し然らざれば乾燥となり讀者をして該人物及び題目の眞相を會せしむる能はず。

(二)ウィルヤム、ロスコー(一七五三—一八三一)はリヴァープールに生れき。不十分なる教育を受けて成人し他人の書記となりて辛くも糊口し其の餘暇に文學を研究し竟に伊太利文學に精通せる文學者となりにき。一千七百九十六年"Life of Lorenzo de Medici"を著はし後ち九年の研鑽を積みて有名なる"Life of Leo the Tenth"(『レヲ十世傳』)を編しき。兩著共に英國にてよりは寧ろ大陸にて愛讀せられき。ロスコーは熱心のホイッグ黨にして幾分か頑固の失なきにあらざりしかど其のギッボンの脉を紹きてよく歴史精神の普及を勗めたりし功は沒すべからず。

(三)ウィルヤム、ミトフォオド(一七四四—一八二七)はロスコーよりは年長にして史學上の功績も亦た多く彼れに讓らず。ギッボンとは同僚にて共に熱心なるトーリー黨なりき然して政治上の主義を歴史に適用せし點はギッボンにも越えたり。是れ其の一生の大作"History of Greece"(『希臘史』)(一七八四より一八一八に至る三十四年に亘りて出版せらる)に著大なる瑕疵ある所以なりさもあれ當時行はれたりし希臘史中には之れに匹敵すべきもの絶無なりき。

ロスコーとミトフォオドとが斯く外國古代の歴史をのみ研究せりし間に二名の少壯史家現はれて國史研究の端を開けり。之れを

(四)シャロン、ターナー Sharon Turner (一七六八—一八四七)及びチョン、リンガード John Lingard (一七七一—一八五一)とす。リンガードは舊教の僧にして宗教上の著述と説教とに從事せりしが其の歴史上の著述は事實の精確と編纂法の熟練と自家が宗教主義に拘泥せざる公明と其の文章の雅馴とに於て空前の良著と稱せられたり。實に彼れが著は其の斷片の末までも後の史家の模範たるに足れり。さてターナーは彼れに比して更に幾分かの異彩あり蓋し其の文の美は遠くリンガードに及ばざれど英國史の研究に熱衷して陸續著しゝ史籍のうち"History of Anglo-Saxons"(『アングロ、サクソン史』)(一千七百九十九年出版)は從前の史家が進むに躊躇せりし難境に歩を投じ邁爲たる開國の昔に沂りて雜然たる傳説の中より仔細に虚實の分野を討究し始めて一道の明路を開き來たりしものなり、其の功勞は永く後人の謝すべき所なり。

(五)フランシス、パルグレーヴ Francis Palgrave (一七八八—一八六一)は英國古代史に關してターナーの繼嗣たり。ロンドンにて生長し初めは法律を業とし其の攻究

の必要より古代の制度及び家系の關係等を調査し又佛國の古語を學びしが生來の嗜好は彼れを驅りて竟に其の職業を轉ぜしめたり。一千八百三十二年士爵に叙せられ續いで閑職を得たり。爾來主として歴史の攻究に從事し晩年に至りて "History of Normandy and England" の一書を世にいだしき。一生の大著としても恥かしからぬものなり。其の二子亦た父に繼いで名あり其のうち一人は尚生存すといふ。バルクレーヴと相併びて

(六) トマス、マクリー Dr. Thomas M' Crie (一七七二——一八三五)あり蘇格土舊家派の史家として一方に雄視せり。ウォルター、スコットが "Old Mortality" を痛罵せし評論の如きは固陋淺膚殆ど讀むに堪へざれども熱心の考察を以て蘇格土と英倫土との古史を調査して編撰せし "Lives of Knox" (一千八百十二年出版及び "Melville" (同十九年出版)の如きは價値ある著述なり。

歴史の攻究かく年を逐うて盛んになりゆきしにつれて史家輩出し著作はた多かりしが中にはとりたてていふべき程の著述なき史家もあり。但し此等小史家の勞力だに斯學に貢獻する所なかりしには非ず。夫れ修史の事業は猶開墾の事業のごとし一畝を耕すときは一畝の獲あり半畝を耕すときは半畝の收あり此の故に力の微なるものを拒まず量の益〻多きをよしとす。詩歌小說に至りては然らず譬へば妙峰の孤頂に如意の寶珠を得んとするが如し大鵬が垂天の力を借らざれば能はず學鳩斥鷃の群飛は徒らに蓬蒿の間を驕かすに過ぎざるなり。此の故に小詩人の業は文學史上に記せざるも妨げざれど史家の名は其の小なるをだに忘るべからざるなり。此の意によりて前に漏れたる史家と其の著の重なるものとを擧ぐること左の如し。

Patrick Fraser Tytter (一七九一——一八四九)....."History of Scotland" など

Archibald. Alison (一七九二——一八六九)....."History of Europe during the French Revolution" など

Henry Hart Milman (——一八六八)....."History of Christianity to the Abolition of Paganism" "History of Latin Christianity" など

George Grote (一七九四——一八七一)....."History of Greece" など

Connop Thirlwall (一一九七——一八七二)....."History of Greece" など

此の他マコーレー出でしまでに一時尤も令名ありし歴史家は彼のグラッドストーンの師たりし

(七)トマス、アーノルドなり。アーノルドは一千七百九十五年ワイト島なるコウズ(Cowes)に生れウィンチェスター及びオックスフォードの二大學にて教育せられ齢二十歳にしてオーリエル大學(Oriel)の校友に選擧せられ又高等法院の募に應じて羅甸文と英文とにて論文を草して賞を得たり。當時のオックスフォードは教義の嚴守を強ひずして寧ろ信教の自由を許せりされば學生の所信思ひ〳〵にして多くは合理的信仰を主張し、中にも其の極端なるは彼の「高尚にして乾燥なる唯智教主義」(ラショナリズム)を奉ずるも多かりき。アーノルドは此の自由信教の主義を悦び卒業の後も牧師となることなくテームズ河畔なるシールハムに私塾を開きて專ら教育に從事せりしが後十年にしてラグビーの校長に推選せられき。此のあひだに於ける其の講述と説話とは間接に後ちの文學に影響せり。後年專意著作に從事し"History of Rome"(『羅馬史』)を著す。此の書一千八百三十八年、同四十年、同四十二年の三回に出で前後三巻にして止めり即ち第二ピューニック戰爭までをものしてみまかりしなり。此の他"Introductory Lectures on Modern History"あり又其の宗教文學の議論は當時趣からぬ勢力ありき。此の歴史は叙事の体裁學術的にして取捨選擇よろしきを得たり。其の文亦明晰にして遒勁なり。

第十三章　マコーレー

マコーレー――其の傳――其の著述――其の特質――韻語家として――論文家として――歴史家として――彼れが史筆の特質――マコーレーの人格

天の人に附與する無上の恩賜は聰明なる資性を享けて生れ恩威偏せざる父母の手に育てられ終生順境に處して名を揚げ家を興し永く後生に推重せらるゝと是れなり。トマス、バビントン、マコーレーの生涯は恰も此の例に當れり。父ザカリー、マコーレーは蘇格土の舊教信者にして真摯熱誠事に當りて身命を顧みざるトーリー黨の一名士嘗て奴隷賣買の反對運動に率先せし人なり。母はクエーカー宗徒の子にして慈愛の情深く理非正邪の分別正しく信念堅固にして事に動ぜざる性質なりき。トマスは一千八百年某月リースターシャに生れき。幼にして聰明六七歳にして既に能く文を綴りき或はいふ七歳の時はやく已に聞き集めたる

史談を材として英國小史を編せんとせしとありきと。はじめは家庭の教育の為を受け十三歳にして小學に入り十八歳にしてケムブリッヂの神教大學に入りしがいたく數學を嫌ひて該課の時間には竊に文學上の著作を讀むことを常とせりき。一千八百十九年と其の翌年とに於て懸賞の募に應じ"Pompeii"及び"Evening"の二時篇をものして金牌を得且つ同校の校友に擧げられき。在學中に其の父巨產を失ひしと同時に逝りければトマスは一身に若干の負債と數人の弟妹とを引受けて自立せざるべからざる難境に立てり偶々『エヂンバラ評論』の主筆ヂェフレーの知遇を得て一千八百二十五年同誌の寄書家となり彼の有名なる"Essay on Milton"『ミルトン論』を掲げこゝに立身の階子を得たりき是れ實に彼れが散文の處女作なり。立論明確にして行文瑰麗なりしかば頗る時人を驚かしめぬ。爾後專ら評論の事に從へり。當時は評論記者の估券今日よりは高かりしに彼れ既に數篇を物して名聲漸く著はれしのみか元來ホイッグ黨に屬せりしかば便宜また一しほなりき蓋し該黨は年少の英才を推勵誘掖するに力めたりしなり。後ち程なくランスダウン卿の周旋によりて始めて國會議員に選擧せらる時に年三十一。

かくて幾程もなく英王ウィリヤム四世崩じヴィクトリヤム四世代りて位に即き國會例によりて解散せられたり此に於てマコーレーは佛國に漫遊し其の政界の現狀を視察し歸國の後再び カーンの地より選擧せられて國會に入りぬ。當時下院と政府との間には選擧權擴張及び其の他の件につきて一大葛藤あり議場頗る騷擾し論戰日に沸き殆ど底止する所なかりしがマコーレー此の間に立ちて有名なる長演說を試み滿場を震駭し數回の論戰の後遂に肝要なる諸案を通過せしめ此れより一躍して第一流の雄辯家となり筆舌雙達の政論家として一時は大政治家ピットと併稱せらるゝに至りき。一千八百三十二年內閣はマコーレーが改革案に於ける功を思ひ之に酬ゆるに印度事務委員の職を以てせり。翌々年印度マドラスへ航行す。當時印度は英國に取りて重要なる問題の繫る處なりき。而してマコーレーは熱心に之れが整理と調査とに盡力せしが尙夜間と早朝とには文學の研究を怠らずして數篇の論文を著はしき。四年にして事務終り歸途に就き途次伊太利を過ぎ一千八百三十八年に英國に歸りしが該赴任中に一生涯の資產を作り得ければ斷然政界を退き專ら餘生を文學上の著作に委ねき。『エヂンバラ評論の讀者』

尊敬甚しくマコーレーが歸朝を待ちわびたりしかば今や日に迫りて其著を請ひ求めて新著を出ださゞるに盛名は處々に傳唱せられき。按ふに印度赴任は彼にとりては少小ならざる便益を與へし者なり。彼れは之れによりて其の名譽財產の根底を作り此外に到底他の方法にては得る能はざる東洋的智識を得以て其の名著『クライヴ論』『ヘスチングス論』を不朽の者たらしめき。

一千八百四十二年及び其の翌年"Lays of Ancient Rome"と"Essays"(『評論集』)とを公刊し以て之れより其の畢生の力を傾けて修史の大業に從事し精攻深討同四十八年に至りて『"History of England from the Accession of James II."』の第一卷及び第二卷を發兌出だしき。社會の歡迎前古に比なく十日にして初版の三千部を盡し四月には一萬三千部を盡し翌年に至りては既に六種の版ありき其のうち某書肆の出版の如きは二十萬部に達し獨逸は六種の翻譯をなし露西亞、佛蘭西、伊太利、西班牙、和蘭等其の他の諸國も各々爭うて其の翻譯に着手しき。同五十五年其の第三編及び第四編成りて聲價尙ほ依然たりき。マコーレー自ら人に誇りて曰はく「余が『英國史』の第三第四の兩編に匹敵すべき著は古今唯彼の第一第二の兩編あらんのみ」と。得意想ふべきなり。彼れ既に全く政界を退き一千八百四十八年にはケンブリッヂ大學に聘せられしをも辭せしが同五十二年止むを得ざる情誼ありて更にエヂンバラの代議士となり再び議場に臨みて屢々演說する所ありしが偶々其の心臟を害ひ心身著く衰勞し一千五百五十九年十二月に至り遂に其の書齋の安樂椅子に永眠しき。齡六十歲。彼れが名譽ある閱歷性行及び逸事は一時の話柄となりて喧傳せりしが尙ほ其の詳傳は數年の後ち甥ジョールジ、トレヱルヤンの手にて編せられき。この傳趣味ある記事に富み文章また雅馴平明ボスヱルの『ヂョンソン傳』ロックハートの『スコット傳』と共に人物傳記中屈指の著に屬す。

マコーレーは當時の實際社會に於ける理想的紳士とも稱すべく種々の面方に於て傑物たりし如く文學上に於てもまた第一流の地位を占めき。今便宜のため其の一生の著作を韻語、論文、及び歷史の三類に分つ。こゝに其の演說(オレーション)類を略せるは其の內容の政治に關する所多く文學には緣遠ければなり而も文章として之れを見れば他の論文よりもむしろ一層雄渾にして抑揚波瀾の妙に富めり特に老後の演說の如きは麗を衒はず奇を求めざるに威儀自ら備はり十萬の王師肥馬盛裝し

て以て胡兵に向ふの概あり。さて以上の三者は何れも稀有の好評をもて迎へられしものなるだけに其の反動も亦た甚しく攻後程なく種々の批議を蒙りたり。中に就きて最も劇しく攻擊せられしは其の韻語の作にして博學卓識を以て第一に推されたりし批評家アッシュー、アーノルドの如きも彼の"Lays of Ancient Rome"(『古羅馬譚』)を甚だしく嘲難したりき。而して韻語に對する此等の非難はマコーレーの恐らくは辭する能はじ彼れは決して秀でたる詩人にはあらざりしなり。彼れが思想は餘りに積極的實際的にして其の辭句はたあまりに明白時としては露骨なりき。されば彼の夢現の兩界に逍遙し現にありて夢を描き夢に遊びて現を寫す底の妙機は彼れの到底企及し得ざる所なりき。詩として稍見るべきは其の最短篇(寧ろ世に知られざる)"Jacobites' Epitaph" "The Last Buccaneer" 等なるべし但し其の彈詞例へば"Jury" "The Armada" 及び"Naseby"の如きは押韻嚴正にして句々金玉の響あり意達し筆從へる概あり。而も彼れは到底文章家にして詩人にあらず其の辭は妙なるも俗膓を悅ばしむるに足るのみ其の調は佳なるも俗耳を樂ましむるに過ぎず天地人の神韻を歌ふがごときは彼れの能くせざる所なり。要するに彼れが詩は其の政治的事業と一般一時的にして永久的にあらず宜なり其の『無敵艦隊』に成功して『古羅馬譚』に失敗せしや。

詩に失敗せしマコーレーは散文にいみじき功を成せり就中其の論文の如きは同種類中古今稀れに見る所なり。『ミルトン論』の『エヂンバラ評論』に掲げられしやヂッフレーは其の文の異彩あるに驚き稱嘆して曰はく「君はそも那邊より斯かる文致を得來りしぞ」と。而してマコーレーの能文は決して偶然に成りしものにあらず彼れは大學に在りし間常に思を潛めて希臘羅馬の古文章を研鑽し傍らよく近世の名文章に注意し就中ギッボンとハズリットとに私淑し嘗て私かに二氏の躰を折衷し之れに自家特有の風致を加へ推敲万回して一篇の論文をものせしとありそは故ありて公にせざりけれど是は『ミルトン論』よりも數年の前に成りしものなりといふ。彼れは老年に至るまで常時の苦心を忘れず常に該篇を以て『ミルトン論』の上にありとなしにき。一生中に物せる論文の重なるものは『ミルトン論』『サウジー論』『ピット論』『チャサム論』『アヂソン論』『ホレース、ウォルポール論』『クライヴ論』『ヘスチングス論』『フレデリッキ大王論』『王政復古時代の劇詩家』『ボスエル論』『ハ

ラム論」及び「ランケ論」等にして何れも皆殆んど同樣の缺失を免れざりし。蓋し彼れが議論と批評とは動もすれば岐路に走り本論の範圍外に亘る。人物及び著作を批評するや其の鉦動もすれば批評の範疇を逸し本題を外にして專ら自論を敷演するを例とせり。こは從來の論客にも間々ありし失なれどマコーレーに至りては遂に其の極端に達したり。かゝる批評も或種類の讀者にとりては却りて興味あり亦幾分かの益なきにもあらねど惜むらくは文學に對するマコーレーの所見は高尚深邃なるものにあらず隨うて俗流を拔け出でたる讀者にとりては著者が縷々の辯は偶〻以て厭想を釀さしむるに足るのみ。加之著者が博覽强記は往々にして其の著に累をなしき又其の過分なる材料準備は往々著者をして其の取捨に迷はしめき而して其弊殊に印度に關する諸論說を多しとなす。是れ其の論の概して散漫に流れ徒らに廣きに過ぎて深きに至る能はざりし所以なり。且つや彼れの積極的なる如何なる難題をも疑問の姿のまゝに存し置く能はずして强辯曲解以て其の斷案を得んと欲しき蓋し彼れが眼より見れば如何なる者も不可思議ならず如何なる人物も兩面を有するとなかりしなり。其のスタッフォードを「執念深き背敎者」と斷じスヰフトを「天才(ギフテッド)ある猶太人」と斷じベーコンを「大智ある凡骨」と斷じドライデンを「執念深からざる背敎者」と斷じマールボローを「貪欲にして慧智ある狗盜」と斷じたるが如き概ね此の類なり。然れども彼れが文章には一種靈活の氣あり其の見開者しくは想像せし光景、其の信ずる所の議論其の感ずる所の情念は最も明快なる文章によりてさながら讀者が理念情操に入る。彼れは此の明快に加ふるにスヰフト、コッベット輩が企て及ばざる詞藻の豐富を以てせり故に其の文雄渾にして瑰麗晴日に高厦の輪奐たるを望まんが如く、暢達又平順なり駟馬を熱路に驅らんが如し。而も是れ皆彫琢萬回の餘に成りしものなり。

以下少しく彼れが本領たる歷史上の著作に就いて觀ん。

抑〻修史は彼れが老後の事業にして之れを試みんの志は既に少壯の時に起れりしが當時は血氣尙旺盛にて目ざましき政治界の生活に心奉かれ加ふるに編書述作の閑暇乏しかりしかば偶〻筆を執るも僅かに片々たる雜誌的論文に止まりしが其の印度より歸りしや家產既に成り心亦沈靜し加ふるに自ら多年政治界に有て內外朝野の事情を審かにするを得たりしかば此等知識を應用して前代の事情を

觀察し重に政治的方面より國史を編成せんの念勃々として禁ずる能はず遂に彼の大篇を成すに至りき。今之れを通觀するに流石に其が全學識を集注してもの せる者なれは一見恰も彼れが諸論文を蒐集大成したるものゝ如く中にも第一卷は最も勝れたり。其のチャールス二世崩御後の英國の狀勢を叙せるや鋭利透徹の史眼を以て從來の諸史籍傳記を博渉しよく事實の眞否を判別し錯綜混亂せる當時の社會を整説詳寫せる縱横自在の筆は尠くも稀有と稱するを得べし。然れども セインツベリ氏のいへる如く「此の書あまりに浩瀚なるを以て若し作者が素志の如く其の事實を一々に記臆せんとせば讀者は彼れ百五十三歳まで存へしバールParrの健康長壽とヂョブJobの勇猛不退轉とを有せざるべからず」。按ふに浩繁は必ずしも咎むべきにあらねど著者が其の黨派心を禁ずる能はで動もすれば或個人の爲に曲説强辯し要もなき些事に紙筆を費し竟にかゝる過大の冊子をなす に至りしは惜むべき次第なり。蓋し史筆客觀的なるべきは辯を要せざる所なれど史家はた一種の主義意見を有するからは其の史をものするや勢ひ

「如何なる賢明の史家といふとも知らず識らず史中に己が理想の偉人を作り出ださんとするを免るべからずマコーレーが其の著にオレンジ公ウィルヤムを擇びたるも亦たこの類に屬す。彼れはウィルヤムを以て全く自己が理想の人物とし譬へば彼の灰白の紙を純白ならしめん爲めに其の周圍を黑塗するが如く彼れはウィルヤムの反對黨寧ろ自家の反對黨を捉へて百方之れを讒誣したり」。

さはいへど此の失は始終マコーレーに纏綿せりしにはあらず黨派に關せざる事を記するや彼れは史家の公正を失はず秩序整々繁簡宜しきを得たるのみならず 毎に一樣の熱心を以て仔細に周圍の事情を察し例の明快の筆を以て之れを叙し讀者をして親しく聞賭するの感あらしむ。

更に一言すべきは彼れが其の歴史中に文學の變遷をも併叙せしこと是れなり。 按ふにこは英國に在りてはマコーレーに始まるといふを得べし。彼れは十分の注意を以て時勢と文學との關係を觀察せしのみならず彼の好古家若しくは風土 記著者の如き熱心を以て親しく詩人文士の生地を觀察し以て其の地勢風土の特 質をも活寫せり。

要するにマコーレーは英國紳士の好標本なり。彼れ多能多才、當時の學問藝術殆 ど通ぜざる所なかりき。たゞし抽象的なる數學と、哲學とを好まず中にも哲學を

無用の長物と貶し詩歌の妙を判ずるにも人情の微を察するにも悉く英明なる常識を以てせりき。然れども又よく他人の說を聞くを好み如何なる劇務にある時も尚て讀書を廢せざりき而して其の强記なりしはミルトンの『失樂園』を唫誦するにたゝ二回の通讀をもてしきと傳へたるによりても知るべし。彼れは終生無妻なりしが幼兒を愛すること人に超え其の甥と共に戲に演劇するをこよなき樂みとなせりき。其の自作の脚本は全く此の用にとて作りしなりき。又友誼に厚く一たび交はれば必らず其の誼を遂げにきされば人稱して「全身悉く眞性の人」といへりき。平素大に都會を愛し山野を厭ひ愚人と惡漢とを惡めり。素行廉正なりしが尙當時の紳士者流には珍らしからぬ些屑の不德は敢て之れを行ふに躊躇せし人にあらず。嘗て伊太利に遊びしや稅關の吏に三クラウンを與へて其の手荷物を檢することなからんことを請へり吏默して金を受くゝコーレー馬車に搭じて將に去らんとす彼の吏再び來り職を行はんが爲めに車に入らんとす御者制すれども聽かずゝコーレー乃ち曰はく「賂を受けて職を廢せざる正直の吏は英國紳士の好伴侶なり來れ我れ汝が同車を許さん」と。以て其の爲人を見るべし。彼れは何れの時に於ても常に英國紳士を以て自から居りしなり。

第十四章　カーライル

其の血統——其の傳——其の諧謔——カーライルの品性と功業——文學者——歷史家——其の特質——其の人生觀——宗教觀——諧家の批評

如何なる時世を問はず謳歌すべき方面あれば必ず彈劾すべき方面あり。第十九世紀前半の如きは此の兩面の最もいちじるかりし時代なりゝコーレーと共にカーライルの世に出でしは蓋し異しむに足らざる也。兩者は共に散文學上の偉人たりしのみならず政治上社會上の思想に於ても其の進步せるものゝ代表者なりき。第十九世紀前半に於ける英國世相の全豹は畧、此の二人によりて知ることを得べきなり。

トマス、カーライルは一千七百九十五年十二月を以て蘇格土ダムフリースシャヤなる小邑エックレフェカンに生れき。性果敢勇猛にしてよく言ひよく行ひ「綱鐵の如く堅固にして彈力性」ありと稱せられしトマスは其の風父にして「エックレフェカンの五人男」の一人「爭鬪石工」の隨一人と綽名せられ信心鐵の如く疑惑の念に犯されず

無益の言を發せず過去の不快を語らずして唯上帝をのみ懼れたりしエヂムスは其の父而して世々嚴肅なる教理を奉じて敬虔誠實を以て知られたりし女子マーガレット、エートケンは其の母なりき。トマスは幼時かゝる父母の膝下にありて嚴肅なる教育を受け無益なる遊戯を禁ぜられ母よりは讀書作文の初歩を授かり父よりは算術を教へられ餘暇には戸外に出でゝ自然の風色を樂むことを勸められき。鄉學にあること三四年十歳にしてアシナンの中學に入りしが動作遲鈍にして常に孤獨を好むをもて朋友に嘲られ「泣虫トム」と綽名せられき。十五歳にしてエヂムバラなる大學に入りしが在學中最も留心せしは宗教及び哲學にして數學は之に次げりき。

一千八百十四年其の普通科を卒へ親友エドワルド、アーヴィングの周旋にてアンナンの數學教員となりついでハッヂントン及びカルクカルヂーの地に轉じ同十八年に至り職を棄てゝエヂムバラに赴きかしこに流離すること數年なりき。此の間數篇の人物傳を著してプリウスターが『エンサイクロピヂヤ』に投じ又"Life of Schiller"(『シルレル傳』)を『ロンドン雜誌』に投じき。此の篇は同二十五年に一冊となりて出版せられしが五年を經てゲーテが雅に成れる序文を附して獨乙文に反譯せられカーライルの名始めて大陸に傳はりき。一千八百二十六年ヂェーン、ウェルシといふ女を娶りぬウェルシは彼のヂロン、ノックスの裔なり夙に才學の名ありて識見俗に超えたり。カーライルは其の以上に言ひ込まれし數十の緣談を却けて自ら選定せし夫なりき。是れより先きカーライルはヂェッフレーの知遇を得て『エヂムバラ評論』の寄書家となりしが其の文致あまりに奇矯にして粗放なりしかばヂェッフレー辟易し嘆じけらく「君そも那邊よりか此の般文躰を得來りしぞ」と。是れ嘗て彼れがマコーレーの渾成に驚きて發せしと同一の疑問なり。他の言によりて一歩も讓るとを好まざるカーライルは是に於て斷然エヂムバラの地を去り其の妻の所有地なるクレーゲンプットックの僻地に退きぬ時に一千八百二十八年なりき。爾後六年の間驚くべき刻苦精勵を以て『バーンス論』外十四篇の著を卒へしが皆一種の特色ある文學論として見るべきものなり。

就中經營慘憺の著は有名なる"Sartor Resartus"『衣服哲學』なり架空の獨逸教師トイフェルスドロアクを一篇の主人公として盛に宗教、哲學及び文學に關する奇說を

吐かしめたる縱横自在の滑稽の間深刻骨に透る諷刺あり兎も角も奇著といふべし。此の書の成りしは一千八百三十一年なり。而して『ロンドンの書肆』中十八も其の出版を承諾するものなく纔かに親友ロックハートの厚意によりて『フレーザー雜誌』に掲載せしが大聲俚耳に入り難く罵詈嘲罵の惡評は雨の如く下り中には彼の文は句頭より讀むも句尾より讀むも全く同意なりとすら譏笑せし者もありき。獨り只一面識の友たりしエマーソンは亞米利加に在りて大に之れを推稱し百方盡力の末始めて一卷の書として米國にて出版せしめたり。カーライルがクレーゲンブットックに躬居せし六年間の事業は其の妻に負ふ所甚だ多しといふ。妻女は其の生計の費を給せしのみならず奴婢としての賤業を親らし六年一日の如く其の夫に奉侍せりき。

既にして世は漸く偉人の聲を解するに至りしかば一千八百三十四年更にロンドンにいで某街なる一屋を購ひこゝに爾後四十七年の居をトしき。同三十七年彼が最大作 "History of the French Revolution"(『佛蘭西革命史』)出版せらる。名のみ徒らに傳はりて書は購讀する者なく權は再び空乏を告げたり乃ちコールリッヂ、ハズリットが故智に倣ひて文學上の講話を公開し以て纔かに焦眉の急を免かるゝを得たり。有名なる "Heroes and Hero-Worship"(『英雄論及び英雄崇拜論』)は此の講話筆記の一篇なり(一千八百四十一年出版)。同三十九年 "Chartism" 成り同四十三年 "Past and Present"(『過去及び現在』)成る後者は當時の政治問題に對する著者が所感を錄せしものなり。『雜論集』亦た之れと前後して出版せられき。一千八百四十五年『佛蘭西革命史』に次ぐの大作 "Oliver Cromwell" 成る。此の時彼れが名聲漸く高く世人はた一作毎に其の意を理解するに至りしかば此の著はじめて廣く歡迎せられ忽にして數版を重ねき。之れをカーライルが著作の社會に好遇せられし初めとす。エクレフェカンの躬措大は今や文壇の獅子王を以て目せられ一吼百獸を慴伏せしむるに至りき。

爾後五年間は別に著作なく時々の演說と來客の應接とに歲月を送り一千八百五十年に至りて "Latter-Day Pamphlets" をものしぬ。こは最も激烈なるスポット的諷刺(寧ろ叱咤)なり。翌年『スターリング傳』を著はす。穩雅周細の文彼れが著作中稱れに見る所なり。かくて後更に畢生の心血を搾りて其の會意の人物を描かん

と欲し遂に普王フレデリッキ大王を尊びて熱心に其の研究に從事し蔵書堆理に苦心經營すること十四年との間大陸に遊び親しく實跡を討究すること二回一千八百五十八年最初の二卷を脱稿し同年に出版せり。同六十五年に至りて全部七卷完結す『フレデリッキ大王傳』是れなり。賛嘆の聲内外に喧々たりき。程なくエヂムバラ大學に聘せられて校長 "Lord Rectorship" となりしが偶〻其の妻逝りしかば（カーライル時に年七十一）前後また大作に筆を着けず僅かに『ダーン、ノックス傳』"Early Kings of Norway" "Shooting Niagara" 等二三の短篇を著しゝ外は重に其の妻が紀念録の編輯に從事し稿成りて一千八百十二年歿しき。齢八十七。

カーライルが遺稿は其の傳と共に史家フルードの手にて出版せられしが其の記事カーライルの性行及び内事に亘りてカーライルが名譽威信を毀損する嫌ひ多かりしかばカーライル崇拜者は皆起ちてフルードが所爲を咎めたり。されど兎に角にカーライルが品性の不具なりしと其の一生涯の幸福ならざりしとは明かなり而して彼れと生涯を共にせし者もまた幸福なる能はざりしは事實なり。其の妻ウェルシが晩年人に向ひて天才の人の妻たることの不利不幸なるを戒告し遂に其の夫に請ひて別居を求むるに至りしにても其の然りしを知るべし。按ふにカーライルは自負傲岸の人何人に對しても（其の生存者たる以上は）決して滿足を表する能はざりし人なり否大概の人に對しては嘲罵の口を衝いて出づるを禁ずる能はざりしなり。其の例外なりし者は思ふにゲーテのみならん。彼れは口を極めて社會の敗風を叱咤せしも如何にして之れを救ふべきか明確なる方策を建てしことはなし。彼れの語は常に漠々たりき。是れ彼れの其の初めに於て世人に解せられざりし一因なり。さもあれ世の漸く彼れを知り彼れが語を解するに至りしや初めは無意義の妄語の如く思はれしものもいつしか導世の箴言となり矛盾の怪說と見えにしものも語逆理順の格言となり十九世紀の英國に於ける豫言者として有爲なる青年間に偉大の感化力を有するに至りき。而して此の反動は最近二三十年間に至りて更に第二の反動を惹き起しカーライルが名聲はいたく墜落するに至りたれどそは前の崇拜の餘りに甚しきに流れたりし結果のみ二つには時勢進歩の結果なり。

いふまでもなく溢美なれど豫言者としてのカーライルの功も往々沒すべからざ

るものなきにあらねどそは社會上の事業なれば暫くさし措き偏に其の文學上の事業にのみ就きて觀るに彼れは所詮詩人たるよりはむしろ宗教論者宗教論者たるよりはむしろ批評家批評家たるよりはむしろ歴史家たりし人物なり。其の著述いと〳〵浩繁なれど其の半ばを占むるものは彼の三大著『佛蘭西革命史』『クロンエル傳』及び『フレデリッキ大王傳』にしてこれらは皆純然たる歴史若しくは詳傳躰の歴史なり。其の他『シルレル傳』『スターリング傳』は史と傳とを兼ねたるもの『サルトル、ザルタス』は自傳躰の著例而して主題の多く文學的なる『雜論集』すらも大かたは史傳の質を有せり。例へば『英雄論』『過去と現在』の大部分『那威古代の諸王』『ヂョン、ノックス論』の如き是れなり。夫の政治上の議論を錄せる『ラースト、デー、パムフレット』すらも凡そ一國の政事は其の歴史的事件に至大の關係ありといふ主意に基きて物したるもの〻如し。個人の行爲は歴史を造り歴史は又よく個人を造る猶ほ一波の動いて萬波のつゞき起らんが如しとはカーライルが終始口にせり所なり。されば彼れの文學を批判するや文學を單に文學として獨立的に批判せずして常に之れを史上の一現象として批判し且つかくせざる世の批評家等を異端を修する者として難じたれ。蓋し此の歴史主義はそが哲學上の意見にも及びたり彼は政治哲學、宗教哲學、純理哲學其の他の哲學其の何れを問はず其終極の目的は社會の現實を離て抽象的に事物の眞理を得るに有ずして寧ろ實際的に現在に應用し未來の人間を嚮導して正道に上らしむるにあり換言すれば現在未來の人間をして天上界に到らしむるの業を發見するに外ならずとなしにき。按ふによしや其のはじめの歩武は抽象的なるにもせよ若し之れに因りて絶對の眞を發見するを得ば現在未來の人間をして天上に到らしむる道やがて自ら明かなるべしさすれば抽象的眞理の討究は實際的濟世の大願と究竟は同一のものにあらずや。然れどもかゝる疑問は曾てカーライルが心頭には浮ばざりしなり。彼れは一方に於いては彼の「上帝を忘るゝ」者を憎みしと共に他方に於いては常に人間界の諸現相に注意して謂へらく「事件と事件との關係は父母と其の子との關係の如き單純なるものにあらず如何なる些細の事件といふとも皆過現時に起れる百般事件の結果にして此の事件亦他の一切事件と相合して第二の事件を釀成す」。歴史は畢竟一團塊のみ人間史の上より見れば事件に大小の差別なし。要す

るに「歴史は新聞紙を蒸溜せるものに他ならず」と。されば彼れは能ふべくば『人間史』を編せんの志ありしがとは彼の『フレデリック傳』にすら前後十四年を費し、此の著者の到底成就するを得ざる所なりき。但し之れを其の全著に徴するに何れの篇何れのページにも此の主義の影は現れたり。其の修史上の抱負のマコーレーなどに比して遠大なりしを見るべし。

彼れ既に斯かる主義を持して史傳を編めりき文致は亦此の主旨に伴はざるを得んや。彼れは謂へらく史上の出來事は成形の固躰(ソリッド)なり幅あり長あり深さあり筆紙の記叙し得る所は線(ライン)のみ線は以て躰の各、外、面をだに描く能はず況んや其の内、面、部と實、質とをやと。於是彼れは其の叙事の躰に一機軸を出だし破格の筆を驅りて不羈奔放ひとへに事件を叙寫して餘蘊なからんことを力めたり。試に『佛蘭西革命史』を繙きて之れを見よ。忽ちにして繡窓の麗姫忽ちにして野人ミラボー乃至其の父祖の狂行忽ちにして暴徒の嘯集忽ちにして南園の葡萄架。外國の關渉を叙しては列國公使の容貌態度得失に及び、前代の盛世を論じては英雄事業の頽廢と不滅とに及ぶ。何れが先にして、何れか後なるか、何れが主にして、何れが客なるか、秩序あるが如く亦た無きが如く關係あるが如く亦た無きが如し。テーヌ又曰はく「知りて之れを讀めば身活劇場裡にあるが如く知らずして之れを讀めば徒らに岑々たる頭痛を釀成するのみと。然りカーライルは該革命の活劇をまつおのが腦中に畫きいだし頭ゆらぎ目くるめくに及びて咄嗟之れを筆に現じたりしなり。『クロンエル傳』と『フレデリック大王傳』はた同一の筆法に成れり。冷靜なる史家の眼を以て觀察し愼嚴なる史家の筆を以て徐に過去を叙述せんよりはむしろ炎々たる詩人的同情を傾けて全身を其の事件の爐中に投じ造化に代りて再び該事件を活現し以て後の讀者をして大人間史の一端を瞑々裡に看得せしめんとする是れカーライルが修史の理想なり而して其の文章の滅裂と險怪とは此の意に伴へる必然の結果のみ。

彼れが本領たりし歴史の特質は略〻以上の如し。以下少しく彼れが人世に對する觀念を窺ふべし。

テーヌ曰はく「カーライルは清淨教(ピューリタン)徒の隨一人なり」と。而してカーライル亦た曰はく「清淨教主義は吾が所謂英雄主義の殿(最後の現象)なり」と。然れども彼れは到

底純粹なる清淨教徒にはあらざりしなり。其の信仰の根柢のあくまでも眞摯にして上帝を尊び永劫を忘れざる點はげにや清淨教徒の信じたりし所にひとしと雖も彼の嚴に己れを持するの餘り他を律することの峻嚴に過ぎ遂に甚しく情に悖り冷酷に趨るが如きはカーライルの尠くとも理想上に於ては痛く惡む所なりき。彼れは詩人的熱情を以て衆に同感するを理想とせりき。清淨教徒は曰はく「何をか道德的精神といふ曰はく上帝を尊榮ずる精神是れなり。何をか善といふ曰くよく奉事すること是れなり。如何にして上帝に奉事すべきか。夫れ塵寰は穢土なり人間は罪惡の動物なり人祖が罪惡によりて生まれたるが故なり。かゝる罪惡の身を以て上帝に奉事せんと欲せば宜しく身を淨うし行ひを正うし五慾を去り七情を捨てひとへに上帝の意に隨ふべし。上帝は畏るべし議すべからず罪大に識小なる人智を以て上帝を議せんとするは徒らに罪惡を重ねんのみ」と。而してカーライルは謂へらく是れ豈に自然と人間との半面を限界するものにあらずや。げにも人間の苦樂は憫むべきものに過ぎざらん人世由來智者に乏しく現在の快樂に耽りて永劫の苦艱を悟らず徒らに一時の懶眠を貪りて深夜に叫喚の聲あるを聞かず。然れども人若し一旦此の迷夢を破らんか未來に向ひて自から其の地を作ること無きを保せんや。げにや上帝と惡魔とは共に等しく實在なり人を誘ふ者は惡魔に非ざれば上帝なり念々刻々人の行動するや天堂に近づくに非ざれば地獄に近づく而して之れを知り之れを明らめさて自ら其の去就を決す善からずとせんや。換言すれば人は盲從と束縛とを脫してさて信心堅固なるを得べきにあらざるか。正義の爲めには不撓不屈而もよく邪を怒るの度を失せざるを得べきにあらずや。德行高くいみじうして而も能く向上擴張の近世的精神を有し得べきにあらずや」と。是に於てや彼れはゲーテが著を繙きて其の所信を固め其の疑團を釋きにき。清淨教徒は曰はく「善を行ひ以て上帝に事へよ」と。ゲーテは曰はく「善美を併せよ一切を併せよ而して圓滿の人となれと」。見るべし前者の峻嚴にして偏局し後者の自由にして廣大なるを。是れカーライルの竟に清淨教主義以外に逸出せし所以なり。

カーライルが哲學宗教に關する思想は獨乙の碩學に負ふ所多し。然れども彼れは抽象的に人間及び天道の解釋を求めんとせし者にあらず。ゲーテはカントヘ

「少ル等に比すれば其の說一段抽象的ならずと雖も尙はカーライルとは趣を異にす。ハリエット、マーチノー曰はく

「ゲーテの崇尚にして明光ある人生觀は晩年のシエークスピヤのに同下く氣鬱れたる時高きに登りて靜かに人界の景象を見渡すの概あり。カーライルの環冒者的熱動は譬へば堀面飯炭にして雜沓粉擾の間を從橫に馳驅するの趣あり」

と。然りカーライルは君子人に似ずして烈士に似たり然れども彼れもまた英國人なり其の世を罵りしは人をして其の過失を悟らしめ正に向ひて猛進せしめんが爲めのみ。其の哲學を攷めしも知識の力を借りて世の迷妄を破し之れを啓導せんと欲せしのみ是に於てや彼れは一方には無限絕對を說き一方には差別實際を說けり。其の罵りしは愛せし所以其の現在を說きしは其の未來を說きし所以其の未來を說きしは其の現在を說きし所以なり。テースが「衝突矛盾解すべからず」と評せし所以のもの蓋し此に存す。ドーデン氏曰はく。

「驚異、恐怖、崇敬は皆彼れが熱情より生ぜしものなり(さて此等の者を爲に譬ふれば)其の翼を鼓して翱翔するや無限永劫の虛空を背景とし有限定實成形の明白なる知覺を强壯なる活動を前景とす。」

と。眞に然り。蓋し彼れが社會に對する獅子吼の聲は(其の實際上の効用の多少は暫らく措く)有爲活發なる少壯者が耳には兎も角も快適なる音響たりしやいふを俟たず。やゝ人生を眞面目に考察し之れに處理する最良の法を知らんと欲する者又はたゝ現在有形の快樂に安んする能はずして未來の方向を知らんと欲する者、要するにマコーレーが所說に滿足する能はざりし輩にとりては實に曉鐘の響やたるが如きものありしならん。

夫れ英國第十九世紀の初期は有形、無形に事物の一時に伸張せし時、新生存の途の頓かに開かれし時、農業工業商業の希有の勢ひを以て一時に隆盛に赴きし時なり。而して之れを奬勵し之れに謳歌せし者は彼のマコーレーなり。さもあれ人間はひとへに永く燦然たる外飾にのみ眩惑して其の當來と歸趨とを知らずして止むべきものにあらず。カーライルが熱罵も亦た所以ありけり。

第十五章　カーライル以後の歷史家

キングレーキ及び其の同時の諸史家——フォースター——バックル——フリーマン——グリーン——フルード——其の傳——其の諸著——其の文章

カーライルの歿後歴史界は一頓挫を經驗し只纔かにフルードのありて舊全盛の餘光を傳へたりしのみ。さりとて修史の業の全く萎靡せしにはあらず否マコーレー、カーライル等の蹤を追うて一生を史的研鑽に委ね種々の方面に於て史界を開拓せし者決して尠少なりきといふべからず。今その中に就きて最も有名なる者二三を擧げんに

(一)アレキサンダー、キングレーキ(一八一一—一八九一)は博覽强記考證の精を以て一時に冠たり。サマーセットの素封家の子と生れ少壯にして國會議員に選ばれき。始めて其の名の著はれしは一千八百四十七年にものせし"Eothen"と題せる冊子なりこは華麗なる文章にて綴りたる東洋漫遊記にして同種の書類中當時第一の評ありき。後ち"History of the Crimean War"(『クリミヤ戰爭史』)を編し一千八百六十三年に初二卷を出版し前後二十年にして完成す。博引傍證所謂恐るべき考證の一例に屬す。但し著者は最も些細なる事件にだに能く其の相互の關係を發見し一々之れを組織して有機的(オルガニック)全躰(ホール)たらしむる技倆を有せしが故に讀みて倦厭を生ぜざるのみならず間々人事推動の因緣を探知するに足ること猶ほ彼の好小說に於けるが如きものあり、只惜むらくは一回の戰爭に一卷を費し二年間の記事に八卷を費せるが故に史としては寧ろ煩に過ぎたり。且つ其の文躰は甚だ華麗にして流暢なるも往々にして新聞紙の雜報若しくは小說の如き文說となれり且つや自家が政治上の私見に泥みて記事に公平を失したる個處も少からず。

キングレーキとカーライルとの間に出世せし名ある史家三人ありヂョン、ヒル、バートン John Hill Burton ウィルヤム、フォーブス、スキーン William Forbes Skene 及びチャールス、メリヱール Charles Merivale 是れなり。バートン(一八〇九—一八八一)とスキーン(一八〇九—一八九二)とは共に蘇格土の學者にして蘇格土の修史官(ヒストリオグラフアーロイヤル)たり。前者は近代史(重に革命以後)に著はれ後者は所謂"Celtic Scotland"を以て鄉國史の宗たり。メリヱール(一八〇九—一八九一)はケムブリッヂ大學の名譽校友にして"History of Romans under Empire"(『羅馬帝國民史』)を著はして名聲ハラム、グロートに次けり。

(二)ヂョン、フォースター John Forster(一八一二—一八七六)は多年『エキザミナー』の記者として史傳の著に名あり殊に英國內亂時代の史に精通し"Arrest of the Five

Members"を著はし傳記ものには『ゴールドスミッス傳』『スポフト傳』(未完)『ランドア傳』『チャケンス傳』等の著あり。又純文學上の考證に長じカトライル及びブラウニングの精通家として名ありき。此等の史家の中にて當時最も異色を呈せしは

(三)ヘンリ、トマス、バックル "Henry Thomas Buckle" なり。一千八百二十三年に生れ幼より史傳を讀むを好み又十分なる教育を受け一千八百五十七年 "History of Civilisation" (『文明史』)の第一卷を著はし同六十一年に第二卷を出版しき。著者はもと全歐洲の文明史を編せんの志なりしが此の第二卷の出でし翌年に夭折せしかば完成せしは纔に英國の分のみなり。此の書の出でし當時は世間の好評甚大なりしが程なく反動生じて遂には不當の嘲罵をすら蒙るに至りき。此の書や其の編述の体裁は勿論文致論旨に至るまでも盡く純然たる佛國風の著にして着眼の奇警觀察の精到叙事の明晰、議論の大膽など佛人中にてもテーヌを除きては當時殆ど比肩すべきものなかりしならん只動もすれば粗放なる獨斷に流れ事件の關係を見ることあまりに直線的なりしが上に彼の佛人の口癖を學びて絶えず「英人は職工氣質の人種なり」など嘲刺せしを以て英國人の反感を招き非難攻撃一身に集りにき。按ふに公平なる眼を以て見るも獨斷の甚しき所多かるは拒むべからざる事なり彼れが議論の憑據として引用せる事實は大概議論の奴隷たるに外ならざる姿あり。彼れは事實を基礎として議論を立てずして議論成りて後ちに事實を取捨選擇せし觀あり。されど其の着眼は流石に奇警にして發明する所尠からざるのみならず其の文章はた明快にして力あり殊に初學の讀者は知らず識らず吸引せられて卷を掩ふに至るまでも餘事を思ふの遑なからんとす亦た以て史壇の一名著と稱するに足るべきか。

(四)エドワード、オーガスタス、フリーマン E. Augustus Freeman はバックルと同年に生れて三十年の後に歿しき。文明史家としてはバックルに似たる點も尠からねど教育、好尚及び宗教上の思想は兩者全く途を異にせり。少にして英國古代史を研究し多年の精査を積みて一千八百六十七年より同七十六年に亘りて "History of Norman Conquest" (『ノオマン征服史』)を著はしき是れそが一世の名著なり。爾後史及び史論を著すこと若干終に "History of Sicily" (『シ、リー史』)の未定稿を遺して同九十二年に歿しき。フリーマンは一たびも公立の學校に入りしことなかりしかど碩

學の聞え甚だ高く初めオックスフォード神敎學校の名譽校員に擧げられ後ち又オックスフォードの近代史編修官に推され有爲の子弟を率ゐて多年史壇の牛耳を執りにき。彼れは當時の史壇に於ける最も忠實なる學者なりき。其の所說の今尙ほ依憑すべきもの多きはいふを要せず史中に建築の變遷を附說せしなど彼れが創意として最も推稱せらるゝ所なり。フリーマンが文章の畫的なるは頗る悅ぶべしと雖も動もすれば爲めに冗漫に流れ厭倦を催さしむるもの少からず且つ其のあまりに多く隱喩を用ひたるは彼のマコーレーが聯句癖にひとしく敍說の躰を傷けて餘りあり。されど兎に角にフリーマンは當時の史界第一流の人たり殊に其の十一二世紀の記事の如きは他の企て及ばざる所多し。我れは雜誌新聞紙にもたづさはり『土曜日評論』の寄書家として多年社會問題政治問題に筆を執りにき。フリーマンが門下彬々たる英材多し中にも其の翹楚を

(五) チョン、リチャード、グリーン J. R. Green とす。一千八百三十七年に生れ同八十三年に歿しきオックスフォードの人なり。マグダレン大學と耶蘇敎大學とにて敎育せられ卒業の後ロンドンにて敎師となり『土曜日評論』の寄書家を兼ねにき。其の名聲は最も歷史に高くあまたの著述たりし中に殊に "Short History of English People" (『英吉利國民小史』)は最も好評あり。グリーンは熱心に時人を導きて社會、文學、風俗、宗敎、其の他百般の事に史的觀察を爲す風を養はんと勗めき。此の希望は從前の史家とても抱けりしがグリーンの如く通常の方法を用ひて好結果を收めし者はなかりき。彼れは時人の耳に入り易き近代の思想に基礎を置きて古へを觀察し其の今日ある所以の偶然ならざるを明かにし趣味ある事實を引き來りて之れを證し加ふるにマコーレーぶりの瑰麗なる文を以て論敍し知らず〳〵の間に讀者をして詩的觀察の趣味と利益とを知らしめき。又「一事史」といふものゝ編著に從ひ時代を逐うて國史の出來事を詳敍し數十篇を以て完結せんの豫定なりしも天折せし爲めに纔かに "The Making of England" (『英吉利開國』) "The Conquest of England" (『英吉利克服』)等二三篇にして止みにき。

かばかり歷史家は多かりしが其のうち特に著きはフルードなり。

カーライルの歿後歷史家として文章家として十九世紀後半の文壇に聲名を轟かせしヂェームス、アンソニー、フルードは千八百十八年四月ダルチントンに生る父は

教會の事務長にしてヂェームスは其の子なりき。オックスフォードなるオリエル大學にて教育を受け一千八百四十四年卒業してトラクテリヤンといふ一派に參し教師ニューマンが感化を蒙りしこと大なりしが遂に一轉して懐疑派に入り一千八百四十九年 Zeta といふ假號にて "Shadows of the Clouds" と題せる小説を作し暗に其の持説の變遷を語りき。爾來專ら文學によりて名を成さんと欲し私かに先輩カーライルの蹤を追ひ先づ『フレーザー』『ウェストミンスター』等の雜誌に筆を執りて數年を送りたり。この間思を史學に潜め一千八百五十六年 "History of England from the Fall of Wolsey to the Defeat of the Armada" の第一卷を編しき此の書は同六十九年に至りて完結せり。次ぎて其の雜論集 "Short Studies" 出版せらる。同七十一年より七十四年に亘りて "The English in Ireland" 『愛蘭土に於ける英倫人』の三卷を著し同八十一年より三年間はカーライルが遺篇の蒐集校訂と其の詳傳の編撰とに從事し兼ねて "Oceana" 及び "The English in the West Indies" の著あり。同八十九年 "The Two Chiefs of Dunby" を作す這は愛蘭土に關する歴史小説なり。かくて後フリーマンに代りてオックスフォードの近代史編修を主りしが一千八百九十四年に至りて殘しき "English Seamen" は其の死後に梓に上れり。

夫れ人の世に在るや或は常に冷水中に棲めるが如く冷靜にして終るものあり或は熱湯中に棲めるが如く沸騰さばらくも息まざるものあり。フルードの如きは後者に屬するか。其が社會上文學上の行爲は毎に時人に批議せられて論辯喧囂の中に一生を終へにき。彼れが歴史の出版せられしやフリーマンが率るにし一派は激しく之れを批難し論爭數年に亘りき。又其の愛蘭土に關する著の出でしや愛蘭土の愛國者流は皆之れを難じ剰へ英國の紳士輩すらも多くは著者に反對しき。又其のカーライルの遺書を蒐めて其の逸事と性行とを公にせしや先輩の私行をあばきて其の内事をさへに暴露せりとて大に時人に難ぜられき。

さもあれ此等批難攻擊の多くは政治上宗教上等の意見の相異なるよりして生ぜしものなればこゝに其の當否を辯ぜんは難し。例へは其のカーライルの "Reminiscences" 『殘墨』に關する批難を案ずるにこは主として德義上の問題たるなり。著述としての非難にはあらず。彼の「事實に忠にして加ふるに趣味餘りある人物評傳の好模範」として今尚批評家にたゝへらるゝロックハーツ・が『スコット傳』すら當時

はフルードの著にひとしく若干の批難を蒙りしを思へば名家傳の編撰の容易ならざるは察すべきなり。

フルードが歴史編述の方法を見るに彼れは事實を精叙するを主とせしよりは寧ろ之れを論定するとに力めし傾きあり、隨うて頗る物議を釀したりしが所詮彼れをしてかゝる躰裁を擇ばしめしは半ばは時勢の然らしめし所なり。夫れグロート、マコーレー及び晩年のカーライル等が當時の讀史界に歡迎せられし主なる理由は事々件々を精細詳確に叙説したる點にあり而してかゝる精細詳確なる叙説は多年間の精勵の結果なりとして稱歎せられき。然るにフルードの事を叙するや之れに比ぶれば遙に粗なり而も其の議論を行るや更に密なり是に於て輕斷なる讀史界は臆測すらく其の力むる所疑ふらくは少なかるべく其の推斷臆測に成る所恐らくは多かるべしと。さもあれ其の實フルードは彼の三史家に比すれば自己の私見持論を以てして人物事件を褒貶することは却りて少なかりしなり。而も其の長所は敵の爲には缺點と思惟せられ中立者の爲には可不可なきものと見られたり。所謂長所とは何ぞや。熱心堅固なる愛國者にして能く自國の長所を看取し之れを推奬せしこと其の一なり。之れを難ずる者ある時は彼れは全力を傾けて之れに當り舌に筆に辯駁し反論せり。よく歴史の眞義を會得し事實の取捨概ね其の宜しきに叶ひしこと其の二なり。按ずるに古今史家多しと雖も單に事件を年代的に錄して能事畢れりとなせる者多し隨うて其の記叙するや典據は正確に考證は該博なるも記叙に生氣無く往々にして宛も事實の臚列に止るもの比々是れなり而してよく此の失を脱し活寫の妙を兼具せる者古くはシューシヂヾーズありヘロドタスありクラレンドンありギッボンありカーライルあり而してフルードの如きは其の尤なる者の一人なり。さてまた第三の長所は其の文致の雅馴と明快となり。彼れが文章はマコーレー、キングレーキ若しくはラスキンの如き瑰麗を以て勝るものにあらずされば廣く世俗の喜ぶ所とはならざりしも氣品俗を超脱し平淡一奇なきが如くにして而も衆妙の躰を具へ貫くに一片靈活の氣を以てす「十九世紀後半第一の妙文」たるを失はずといふべし。

第十六章　テニソン

十九世紀後半の詩壇——其の特質——其の代表者としてのテニソン——其の傳——其の詩

第十九世紀後半期の詩歌は之れを彼の純文學の極盛期たりしエリザベス女王朝若しくはアン女王朝の詩歌に比するに種々の點に於て毫も遜色なきのみならず觀念の深邃といふ點に於ては覆かに兩者に超越するものあり。夫の辭句の華麗と結構の纖巧とを以て特色とせしアン女王朝の詩歌が其の觀念に於て見るべきものの乏しかりしは更にもいはず彼の情熱と創新とを以て勝れりしエリザベス朝の詩歌とても其の形而上の想念は概して卑しく若し其の詞句の上に明かに見えたるを標準とすればスペンサー一人を除くの他は重に人情の浮沈を歌ひ人事の成敗を歌ふに止まり未だ直接に天地人の究竟問題に觸れ人生最奥の消息に接しあらはに之れを咏歌することは殆ど無かりき。蓋しかゝる問題は當時の社會のいまだ留意せざる所なりしなり。降りて十九世期に至れば時運の大變動は人々の思想を刷新し來り人皆外界の昌平に知足する能はずして反省的となり顧慮的となり競うて生存の大問題を講ずると共に過去將來を推度して處世の方針を定め安心立命の地を作らんと欲しき隨うて詩人はた此の風潮に化せられ其の多涙多感の性に驅られ率先して這般大疑問の解釋を與へんとせり。是に於て彼等は思ひを凝らし心を潛め哲學宗教の問題に亘りて其の抱懷を抒し其の漸く覺悟する所あるや更に其の聲を高うして慰諭の福音を歌ひたり。彼等はもはや舊詩人の如く單に自然美を謳歌する者にもあらず又單に人情を咏ずる者にもあらずはた又單に自家一身の興感咄嗟の哀樂を吟哦する者にもあらず否仔細に人生の秘機を察し煩惱の山來を概念しさて後ち靜かに筆を採りて且つ批判し且つ同感しつゝ作せしなり。是れ其の片言隻句の深邃なる觀念の影を映せる所以なり。新詩風の一先驅として又其の代表者の隨一として眞に錚々の名あるものをアルフレッド、テニソン卿となす。

アルフレッド、テニソンは一千八百九年八月リンコンシャなる一村サマービーに生れき。其の父博士ジョールジ、クレートン、テニソンは同村なる寺領の監理者にして其の母エリザベスは一牧師の女なりき。アルフレッドは第三子にして兄弟六人妹一人あり。アルフレッドが初めて其の作を公にせしは一千八百二十七年にして

年十八歳の時なりき。とは其の兄チャールスと共に作せしを集めたるにて題して"Poems by Two Brothers"(『兄弟詩集』といへり(實は長兄フレデリックも此の著に與りきといふ)。卷中なる諸作は總べて十五歳より十八歳までの作なる由自敘に見えたり。是れより先きアルフレッドは七歳にしてローズの一學校(グラムマー、スクール)に入りしが居ること數年故ありて家に歸り兄チャールスと共に專ら父の薫陶を受けて人と爲れり。『兄弟詩集』は此の家庭教育間の作なり。かくて詩集出版の翌年(或はいふ翌々年の初めと)兄弟相携へてケムブリッヂ大學の一校トリニチー、コレッヂに入りしが後いくばくもなくアルフレッドは懸賞詩篇に當選して名譽の金牌を得たり"Timbuctoo"といへる詩は此の時の作なり。彼の歴史家ヘンリ、ハラムが子アーサー、ヘンリと相知りしも亦た此の際なり。後ちにアルフレッドが著はしゝ有名なる傑作"In Memoriam"(『紀念の爲めに』)は此の心友を追悼して作せしものなり。其の他在學中の交遊は後年に至りてテニッンと共に彼の「スターリング社」に入りて文學政治宗教等に錚々たる名を博せし人々なり。

上にいへる懸賞の詩『チムボクツー』は一千八百二十九年中に上梓せられ同年七月の『アセニヤム』(雜誌)は好意を以て之れを迎へ其の才藻をたゝへたり。按ふにテニッンが特質の影は已に此の壯時の作に見えたり是れいと稀れなる現象なり。彼のバイロンの如きは近世稀れに見る所の逸才にして其の文致といひ其の感想といひ奇峭短勁時流に卓然たる所のものありされども其の初めて作りし作"Hours of Idleness"(『閑日月』)には其の特色殆んど見えず尋常の英才と見られしのみ況しやや後年のバイロンの影は之れを認むるに由なかりき。(テニッンが此の時の作尚一篇あり"The Lover's Tale"といふ多く『チムボクツー』に譲らざる作なれど意ありて遙かの後年に出版せられき。)

一千八百三十年更に詩集を出版せり題して"Poems, chiefly Lyrical, by Alfred Tennyson"といふ『抒情詩を主とせるアルフレッド、テニッンが詩集』の義なり。此の集中に載たるものゝ中"Ode to Memory"(『記憶力に與ふる長歌』)"The Poet"(『詩人』)"The Poet's Mind"(『詩人の心』)"The Deserted House"(『廢屋』)及び"The Sleeping Beauty"(『睡美人』)の如きは作者が前途のいよ〳〵多望なるを示し且つ其の傑作なる眞相をも現せり。(此の中『睡美人』は何故にや後の詩集には省かれたり)。此の集に對する世間の評

判就中諸批評雜誌の月旦は褒貶相半したり恐らくは非難のかた多かりしならん。かくて同三十二年(作者二十三歳の時)に第二の詩集世に出でたり題して"Poems by Alfred Tennson" (『アルフレッド、テニソン詩集』といへり。此の集に見えたるうち最も清新と思はるゝは "The Lady of Shalott" (『シャロットの妖姫』) "The Miller's Daughter" (『磨者の女』)、"The Palace of Art" (『美術殿』)、"The Lotos Eaters (『無爲の島人』)、"A Dream of Fair Women" (『衆美人の夢』)等、何れも皆情理高遠詞致典麗、之れを前年の諸作に比するに風情風姿兩つながら良然たるものあり。蓋しテニソンが詩人としての本領は此の時に至りて漸く其の圓境に近づけりしなり。之れより前の作は概して筆ならしの趣きあり又詞調の琢磨と修錬とに過半其の力を奪はれたる觀あり。按ふに一千八百三十二年にはテニソンが詞壇の卒業期とも名づくべき年なるべし即ち彼れが本色の確定せし時なり。さもあれ當時の諸評家は之れを遇するとも必しも厚からざりき。例へばヂョン、ロックハートの如きは戲謔的筆法もて『每週評論』に之れを評し『クォークリー評論』の如きも例のローマン派をよろこばざる保守的感情より之れを貶し『ブラックウッド雜誌』の如もテニソンの作には所謂コックニー派の風調ありとて難じたり。此のころの評にてはヂョンスチワート、ミルの評のみ獨り允當を得たりき(一千八百三十五年七月發刊『ウェストミンスター』所載)。大才は山來世に認めらるゝこと遲きならひなりミルトンが『失樂園』すら僅々十二ポンドに購はれしを思へばミル一人の贊辭を得しだに寧ろテニソンの多とすべき所なるべし。

爾後十年間は折々雜誌などに寄稿するのみに久しく長篇を作せしことなく倫敦よりハイ、ビーチ其の他二三處に流寓し窮迫の日月を送りしが一千八百四十三年(作者三十三歳の時)に至りて更に新版の詩集を出だしぬとは已發兩集の粹を拔きて更らに若干の新作を加へたるものなり。新作中の傑作は下の數篇ならんか。曰はく"Ulysses" 曰はく"Love and Duty" (『戀と義』) 曰はく"The Talking Oak" (『解語の槲樹』) 曰はく"Godiva." 曰はく"The Two Voices" (『二聲』) 曰はく"The Vision of Sin" (『罪業の夢』)。就中『二聲』と『罪業の夢』とは當年のテニソンを表現するものとして最も留意すべき價値あり殊に前者の如きは「十九世紀のハムレット皇子が獨白」と稱せられたり。此の新詩集出でゝテニソンが詩名は始めて定まりぬ英國の讀書社會

は始めてテニソンの大詩人たるを知りぬ。此の集の如何にもてはやされしかは出版の翌年に第二版出で又其の翌々年に第三版出で又其の翌年に第四版出で又其の翌々年に第五版のいでしを見ても知るべし。同四十七年に"The Princess, A Medley"と題したる長篇の物語歌成り其の翌年には其の再版出で同五十年に至りては"In Memoriam"梓に上りぬ。此の作は同じ年のうちに版を重ぬること都合三たびに及びきといふ。

一千八百五十年六月ヘンリー、セルウッドの女エミリーを娶りて妻とす時に四十一歳なりき。是れより先同年四月時の桂冠詩宗(ポーエット、ローリエート)ウォルヅオス卒して其の後を襲ぐ者なし。テニソンとエリザベス、ブラウニングとは候補者に推されたりしが多少の動搖の後ち輿論はテニソンに桂冠を捧げき。此の決定に與りて最も力ありしものは其の近作"In Memoriam"の好評なりきと。

因に記す。桂冠詩宗は或は嚮して勅選詩宗、欽定詩宗などもいふ其由來は詳かならず。近世所謂桂冠詩宗の職分(即ち毎年國王の誕辰を賀する詩と新年の祝賀の詞とを作ることを務とする職分)は凡そ一百年以前よりのことなるべけれど是れより先き幾百年宮廷詩宗といふ職名の詩人ありて常に宮廷に出入し王家より祿を受けたり。宮廷詩人といふ名はヘンリ三世の朝に見え桂冠詩宗の名を賜はりしは彼の詩祖チョーサーが嚆矢なり。さて之れを桂冠詩宗といふ由來を尋ぬるにもと大學にて學生が文法學の學位を得るや文法學の中には修辞學作詩學をも含めりしが中に卒業の褒賞として月桂樹の木葉冠を受くると同時に Poeta Laureatus といふ名を得たりき「月桂冠を頂く詩人」といふ程の義なり。さて宮廷に入りて王家の用務に從事せし者は大概大學の卒業生なりしが故に月桂詩人(Poet Laureate)の名はいつしか宮廷詩人と同義となりやがて宮廷詩宗なる桂冠詩宗と呼ぶに至りしならん。ベルナード、アンドリュス先づこの職に任ぜられチョーサ、ゲー是れに繼ぎチョーサ、スケルトン其の次きに任ぜられエドマンド、スペンサー。サミュエル、ダニエル。ベンヂョンメン。ウィルヤム、デーヴナント。ヂョン、ドライデン。並びにトマス、シャドエル等相ついで任ぜられかくて チャーハム、テート。ニコラス、ローよりユースデン。シッパー。ホワイト ヘッド。ソルトン。バイの五人を經て一千八百十三年ロバート、サウジー此の職に任ぜられウォルヅオス之れに繼ぎさてテニソンにうつりしなり。桂冠詩宗、勅選詩宗などいへば無上の榮職のやうなれども必しも然らず時としては一種の榮譽ある奴隷たるに過きず少しく氣慨ある者は或は之れを辭し或は之れを厭ひしなり。但し近世ウォルヅオスに至りて大に其の位置を高め更にテニソンに至りて一層の價を加へしかば今や桂冠詩宗は名譽の閑職となりぬ。この好例によりて未來の桂冠詩宗は第一流詩人と同義に用ひらるゝに至らんか。

さて翌年三月バッキンガム宮に於て女皇陛下に謁し同月更らに其の詩集の第七版

を公にしぬ。"To the Queen"と題したる小品は此の版の巻首に添へしものにて非クトリヤ陛下に奉りしものなり。これより後ちの諸作は一々紹介するの遑なしこゝには其の尤なるものゝ題名のみを掲ぐべし。"Maud"といふ長篇は一千八百五十五年に成り同五十九年には"Idylls of the King"の第一出でたり(此の内"Enid""Vivien""Elaine"及び"Gwinevence"の四篇を含む)世間の歓迎はバイロン以後無比と稱せらる。同六十四年には"Aylmer's Field""Sea Dreams""The Grandmother""The Northern Farmer"の四篇と共に"Enoch Arden"といふ物語歌出で又同六十九年には"Idylls"の次篇出でぬ。こたびは題して"The Holy Grail and Other Poems"といへり此の集の中には"The Holy Grail""The Coming of Arthur""Pelleas and Ettare"及び"The Passing of Arthur"の諸篇を含めり。さて又同七十一年には『當代評論』(コンテムポラリー・レヴュー)の紙上に"The Last Tournament"いで翌年には"Gareth and Lynette"同七十五年には"Queen Mary"(劇の詩)同七十五年には"Harold"(同上)同八十年には"Ballads and Other Poems"いでたり。

一千八百九十二年十月五日齢八十三歳にて歿りぬ。遺骸は彼のシェークスピヤ、アヂソン以下歴代の詩人英雄の墳墓あるウェストミンスター、アッベーの墓地に葬られ前古稀有の莊嚴華麗なる碑は此の大詩人の爲めに建てられたり。

エミーシャープ曰はく「世に大詩人の初期の作を研究するばかり趣味あるはなしさるは其の作の文學として價値あるが爲めならで件の詩人の作として思想進歩の跡を討ぬ得べければ也」と。此の心を以てテニソンが初期の作を見之れを他の詩人の作と比較する時は趣味一層深きものあり。曩きにキーツを叙せし折セインツベリ氏がテニソンの祖をキーツなりといへるを掲げし因みによりこゝに又同じ人が二詩人を比照せる言を抄せん。曰はく

「人或は英國詩風の傳統を論ずてテニソンを以てキーツに紹ぐものとなす。按ふに不當ならず。テニソンが一千八百三十年及び同三十二年に作せる詩集中其の圓熟なる作は尋てキーツが"Grecian Urn"及び"La Belle Dame sans Merci"に見ゆ新古典(マンテッククラシック)兩派の風調を折衷せる清新の響音あると共に時に此の折衷の不熟の燥音を有せしこと彼のキーツが"Grecian Urn"及び"La Belle Dame sans Merci"に見ゆるものと正さに相同し。然れども正當に兩者を比較すれば(物の比較ばかり誤解せられ易きはなけれど)其の相異或は顯然たるものあらん而も兩者もとより大詩人たるに於て擇ぶ所なきは言を俟たず。キーツの短命なりしや其の作未だ圓熟に至らずして止みきと雖も彼れをして若しテニソンが例の十年間に爲しゝか如く其の作を自ら批

判していろ〳〵修錬琢磨する餘裕あらしめば其の作必しもテニソンに下らざりしならん。げにもキーツが初期の作の幾分は當時の批評家も既に難ぜしが如く一氣にして千篇立ちどころに成れるが爲め概れ蕪辭巴調に止まり好尚も觀念も粗雜淺薄なりしことテニソンが初期の作よりも甚しかりしならん而も感情の精緻さいふ一點より之れを見れはテニソンが作中一として キーツが傑作に及ぶものなきにあらずや。要するに兩者の類似は爭ふべからず、彼れ等は共に繪畫的表現(ピクトリアル、エキスプレッション)と音樂的表現(ミュージカル、エキスプレッション)とを併用する妙技を有し彼等は共によく人道(ヒウマニチー)を解し普通の事物にも亘りて靜穩に平直に且つ健全なる觀察を有せりき而して此の點に於ては彼の實際界を離れ現世間を無視せりしシェリーに勝りしこと一等なり。

と。按ふにテニムンが初期の作のキーツのに比して敢て卓然たる能はざると其の詩風に多少の類似あるとは爭ふべからざる所なるべし、隨ふて此の點より見てテニソンの系脈をキーツに求むるは必ずしも不當ならじ。されど予はテニソンがテニソンとなりて生れしはキーツとの關係には因らずして寧ろ時勢時潮の必然の氣に因りしものと見做さんと欲す。一言すればテニソンはキーツが子にはあらず否キーツと同腹の弟なるべし。

而してテニソンの好尚(ヂスト)はキーツに比すれば少時より一段多方面にして受容の量將た一層大に且つ序を逐うて進前するの歩武も亦たキーツよりは確實なりき否な實に此の點はテニソンが衆詩人に卓出する一特徴たり。彼れは詩人の天職と自己の天才とを認識し古人の名作を讀むも甞て之れが爲に逡巡眩惑することなく寧ろ其の短所及び不熟の個處を發見して自ら深く警めたりき。之れに加ふるに彼れは詩人として夥多の長所を有せしかば其の初期の作中にても "Claribel" "Mariana" "Recollections of the Arabian Nights" "Ode to Memory" "Dirge" "Dying Swan" "Oriana" の如きは屢〻誦して尚其の妙味の津々たるを覺ゆ。而して第二期の作に至れば情趣風姿共に更に進みたりさて其の卒業期の作に至りては思想の高遠想像の美妙辭句の精練皆前作の比にあらず。此の期の作の繪畫的にして音樂的なるキーツ若しくはシェリーのに讓らず。按ふに繪畫的にして音樂的なることは詩技の上より見て極致とする所何れの時の詩人も之れに到らんと勗めしは明かなる事實なり。彼等の聰明なるものは能ふべくば先づ繪畫(色彩の美)を情感(センス)と化し此の情感を音樂(聲調の美)と化し以て詩歌に現さんと試みにきされど能く其の目的を達し得し者を數ふれば英國古今の詩人中たゝ四五指を屈すれば足りぬべし。成

熟期のテニソンは實に其の隨一人たり。加之彼れは其の先進が繁詞を以て歌ひしもの(例へばウオルヅヲオスが『エキスカルシヨン』の如き)を醇化して短篇となし無限の情致と幾多の變化とを盡し其の言々句々をして讀者の心魂に沁せしむ。この點に於て彼れに匹敵すべきものは古今其の人多からざらむ。スペンサーが『宮殿』及び『夢』の二篇はやゝ這般の趣致ありキーツ、シエリー、コールリッヂ、ブレーク等も時に此の技を試みたりきされどテニソンに匹敵すべくもあらず。且つや "Oenone" の律調壯大なるは彼の山海の如きミルトンが無韻律語をも凌ぎ "The Lotos-Eatera" の荒唐にして雅適なるは彼の夢裡の天樂に比すべきスペンサーが『神女王』にも讓らず。

テニソンは時代の精神を歌ふに於て二樣の方面を取りき自然界を主觀的に歌ふこと丶十九世紀の精神に立脚して過去の事蹟を歌ふこと丶是れなり。前者の可憐なる情致はウヲルヅヲオスより得たるなれど尙彼れの如く乾燥低調ならず後者の華麗と濃厚とはスコットバイロンより來れるなれど尙彼の如く淺露粗野の失なし。蓋し彼の三詩人は嚴密に〳〵へば其の思想も感情も到底テニソンの如く十九世紀的なる能はざりしなり。

エドワード、フイツゼラルド嘗てテニソンを論じ一千八百四十二年の作を以て其の全盛期となし其の以後の作を老期の作となせり。げにも一千八百四十二年の頃はテニソンが才華の天々としてにほひ出でたりし時なるべく其の青陽の作は收めて當時の集にあり但し進歩は必しもこゝに盡きたるにはあらじ其の老成の風趣は秋冬の景物に比すべき晩年の作中にこそ求むべけれ。

所謂老期の初に出でし作二篇あり "The Princess" 及び "In Memoriam" 是れなり。是れ等の作に至れば詩眼と感情とが調和せるのみならず繪畫的と音樂的との妙の兼ねられたるのみならず其思想の根抵に一種從容たる覺悟あるものゝ如し、二篇のうち前者はいさゝか滑稽の趣味を加へたる長篇の物語歌にして作者が苦心の作なり其の滑稽の如きは成功とはいふべからざれど兎に角に傑作の一たるを失はず、後者は溫厚誠實なる著者が情誼のあらはれたると共によく當時の或思潮を歌ひ得たる作なり。或思潮とは彼の半懐疑的宗教想にしてテニソンは所謂「自由的保守主義(リベラル、コンザルヴアチズム)の人(否な寧ろ保守自由の間に彷徨せし人)なりしなり。『インメモ

リヤム」は iambic dimeter にて綴られたり。此の詩は庸常の作家に用ひられば單調讀むに堪へざるを常とすれどテニソンは之れを此の長篇に善用して一句のたるみなく卷を終るまで厭倦を起さしむることなし以て其の韻語家としても當時第一流なりしを證す。

さてこの期の第三の作を"Maud"とす。こは辭句の詩的といふ點に於ては其の作中第一に位するものにして Cold and clear-cut face,——と歌ひ起せる第三節の如き I have led her home, my old friend を以て始めたる第十三節の如き Come into the garden, Maud,——の第二十二節の如き、さて第二十六節なる O that 'twere possible——のあたりの詞調は彼の絢爛目を奪ふ其の少壯の作にすらも見るを得ざるもの(ポープをすらも凌ぐべきもの)なり。さもあれかゝる辭句上の巧妙を離れ詩として全躰に亘りて之れを見れば情理風韻兩つながら前の二篇の下にあるのみならず彼の"Spasmodic School"(際物派)と競爭して時の俗受を目的となし、嫌ひなき能はず。

彼れは次ぎに"Idyls of the King"を作りき。此の篇は"Maud"に伴へる弊を脱し部分の妙味あると共に全躰の興趣あり辭句はた例によりて精錬、識者をも俗衆をも悅ばしむるに足る。無韻律語の作中ミルトン以來稀に見る所なり。さて晩年の作(例へば"Gareth and Lynette"の如きに至りては流石に"The Princess"時代の英氣を失ひたる觀あり又 Pelleas and Ettrae" "Balin and Ballan"等に於ては後進作家の詩風をさへ模したるが如き跡あり而も尙鞍に跨りて顧眄する餘勇は"The Holy Grail"及び"The Last Tournament"にあらはれたり。

テニソンの多才なるや其の作せし所一樣ならず山野の風物に關係せる物語歌あれば幽玄深邃なる哲理に關係せる瞑想の作あり古代の詩歌より飜譯せる軍歌もあれば寫景狀物を主としたる作もあり。又尋常の抒情歌あり又純然たる劇の詩あり。就中狀寫諷詠の趣致はゆたかに當世紀を代表するに足れり。但し其の劇の詩は寧ろ其の短所を示せるものなり。第一、科介の妙乏しく、第二、篇中の人物に彼のシェークスピアに見るが如き宛然たる入神の妙相無し。所詮テニソンは抒情狀景の巨擘、兼ねて物語歌の妙手なり。

按ふに英國の詞壇古來名家に富めりと雖も自ら詩人の天職を意識して其の天職の神聖なるを信じ十年一日の如く忠實に熱心に愼嚴に眞摯に勇猛精進片時も其

の理想を忘れさりしものは果して幾人かありし。其の理想テニソンの如く其の精勵テニソンの如く其の妙技テニソンの如くにして初めて十九世紀の詩人たるを得べし。十九世紀の英國がテニソンを好遇せしは至當の禮なりと評すべき也。終りに尙一言すべきは彼れと時勢との關係なり。テニソンの如きはもとより未だ時世を先導せし作家とはいひ難けれども之れを豫言者と稱せんは溢美なれど每に當代を代表せりといふ稱は何人も否拒せざる所あらん。彼れが作には每に宗教上道德上社會上すべて此等の問題に關する當時の進歩せる輿論の影映れり。勿論嚴密にいふ時は彼れが歌へる所は必ずしも當年最勝の思想にはあらず最も創新なる思索最も進歩せる想念にはあらず而も其の作に見ゆる所は當時の眞相を反射せる者、聰明なる英國人全躰の最近年に於ける修練と經驗との結果、苟も當代の聰明者が自家の影なりとして首肯せさるを得ざりし者なり。是れ豈時勢を代表せる者にあらざらんや。或は晩年のテニソンを貶して曰はく彼れはもはや英人の理想を歌ふ能はざりきと。然り彼れは豫言者にあらず詩歌を以て一世を導く能はざりしは明かなり而も彼れは決して當時の大問題を歌ふことを忘れし者にあらずたゞ忘るべきを忘れ歌ふべからざるものを歌はざりしのみ解せざりしにあらず歌ふ能はざりしにあらず。又たとひ晩年のテニソンが時勢に後れしを實とするもそは功成り名遂げて質を易へんとせし頃のテニソン也其の壯時のテニソンは正に新しき思想の謳歌者にして時には新理想の鼓吹者なりき。例へば一千八百四十二年に出だしゝ『ロクスレー、ホール』を見よ彼れは人物の口を借りて自家の感慨を抒らし更らに轉じて將來の期望を歌へり是れ明かに時の改進派(リベラルズム)の希望なりき。尙後年に及び『六十年後のロクスレー、ホール』を著はして時の保守派が抱ける思想と疑惑とを歌へるが如し。或は又"Princess"を見よこれはた當時の新問題たる女權論の旨に密接せるものなり。若しくは『美術殿』の旨を味へ是れはた當代の一弊たりし出世間熱の誤謬を諷刺し暗に眞善美の相關を說き世間と出世間との關係を歌へるものなり。『美術殿』の美術に於けるはSt. Simeon Styliteの宗教上の僻見に於けるが如し後者は爲我的枯禪主義の弊を難じ世間的義務の重んずべきを說けり。何れもテニソンが理想の影にしてまた當代思想の影なり要するにテニソンが終生の理想は天法を畏敬するに在り精進を推奬するにあり秩序

を亂さざして進歩するにあり義理を重んじつゝも人情を重んじ平等を愛しつゝも差別を愛し出世間に遊びつゝも現世間に處するにあり。是れカーライルがゲーテに於て其の實例を見たるを喜びしものと相近し而して其の平生の行實も頗るよく此の理想に副へりしに似たり。テニソンの如きは按ふに詩人中の君子人たるに近かるべし。

第十七章　ブラウニング及びブラウニング夫人

ブラウニングの傳――其の踏作――エリザベス、バーレットとの結婚――「環と巻」――ブラウニングが作の是非――ブラウニング研究會――其の作の特質――ブラウニング女史の傳――其の踏作――其の特質

テニソンと世を同うして更に清新なる感情更に深邃なる思想を謳歌し遂にテニソンを凌ぐの名あるものをロバート、ブラウニングとす。一千八百十二年五月生る、一市人の子なり。其の家資産饒かなりしに如何なる故ありてか小學にも中學にも入りしことなく幼きより家庭にてのみ教育せられき。始めて其の詩篇を公にせしは一千八百三十三年にて齢二十二歳の時なりき。"Pauline"と題したる篇是れなり即ち其の二十歳の時の作なり。ブラウニングが作に終始附隨せし一種の缺點は既に此の作に表はれたり而して其の傑特の詩才は未だ之れを認むるに由なかりき。此の作は作家自らも重きを置かざりきと見えて後年に出版せし自撰の詩集には此の初作を除きたり。此の篇に顯れたる特質は凡そ三あり第一詩句の悉く劇白の躰なること第二長き疊音（シラブル）の語の目立ちて多きこと第三彼れが作の特色と稱せらるゝ「晦澁（オブスキュリチー）」の甚しきこと是れなり。此の中第一と第二とは別にいふべきことなし但だ何が故にかゝる奇異なる劇詩躰を用ひしか審かならざるのみ。さて所謂晦澁の失は寧ろ一氣呵成を要とせし結果なるが如し即ち情の向ふ所やがて之れを筆に傳へ殆ど辭句の選擇をなさず偏に氣に任せて作せしが爲ならんか。さもあれ此の『ポーライン』は推稱すべき作にてはあらざりしなり。後ち二年を經て"Paracelsus"といふを著しぬこは前作に勝る數等也。これも同じく劇白躰の詩なりしが對問の呼吸圓熟し（到底上場の見込はなけれど）傾瀉するが如き急調と疾驅するが如き一氣呵成とは其の無韻律語の特質を成し蕪雜險晦の瑕疵あるに拘らず隱然一種の靈氣を具へおぼろげながらも作者が特得の美感を傳へたり。

其の主人公パラセルサス及び其の友フェスタス及びマイケールは作者が得意の「心理の解剖」を適用して物せるもの中にも伊太利詩人アプリール(Aprile)の如きは彼の『ファウスト』のオイポリオン(Euphorion)の面影ありと稱せらる。要するに此の作は詞致に尙調はざる處ありて後の作に見るが如き莊嚴の妙はなけれど抒情詩としては獨創の一躰にして眞に新詩人の初作たるに愧ぢざるものなり。而して世間の之れを遇するや冷々たりしがブラウニングは敢て其の詩躰を改めんともせず又二年を經て其の友某の爲めに"Strafford"といふ正劇を作せり。此の作妙處乏しきにあらねど如何せん其の思想例の如く時世に超越し其の表白はた含糊なりしが爲めに之れを讀み物とせずして演ずるものとするときは興味索然たらざるを得ざりき。後ち又三年にして"Sordello"といふ劇を作しぬ此の作取りわけて異色を帶びたりしかば啻に俗衆に悅ばれざりしのみならず平生ブラウニングを愛讀する輩すら此の作者遂に其の作詩の方針を誤らんとするに非ずやと危みにき。かゝる疑惑は一千八百四十一年より同四十六年の間に出でし"Bells and Pomegranates"と總題せる詩集出づるに及びて跡を絕てり。此の集中の劇詩にも例の

缺點は伴へりしが奇異なる"Pippa Passes"を除くの外は必ずしも讀者をして茫然自失せしむる底の異質あるに非ず而して其の抒情的短篇の或作に至りては優かに其の作者の單に語るに堪ふるのみにあらで歌ふにも秀でたる由を證したり。一千八百四十六年は彼れがはじめて大詩人の列に入りし年なり。同年エリザベス、バーレット嬢を娶りて妻とすテニソンと桂冠詩宗の選擧を爭ひし令名の女詩人、ブラウニング夫人といふは是れなり。結婚後ブラウニングは伊太利に遊び、一時フロレンスに居をトし妻の逝りしまではかしこに在りき此の間にものせし作は僅かに二篇のみ、"Christmas Eve and Easter Day"(一千八百五十年出版)及び"Men and Women"(同五十五年出版)是れなり。之れを既刊の二詩集即ち"Bells and Pomegranates"及び"Dramatis Personæ"(同六十四年ロンドンにて出版)と併べ稱してブラウニングが壯年期の傑篇を蒐めたるものとなす。こゝに至りてブラウニングの名聲漸く定り世間多數の讀者はた彼が歌に一種深遠の意義あるを認むるに至りぬ。一千八百六十九年無慮二万餘句の長篇を著しぬ題して『環と卷』"The Ring and the Book"といへり這は四卷に分ちて出版せられ大に世に歡迎せられき。是れ雅俗

が一齊にたゝへてブラウニングが最傑作となせる異躰の叙事詩なり。然れども
ブラウニングは一時の虚譽に眩惑して濫作するの愚をなす人にあらずすなはち
退いて筆を作詩に絶つこと十有四年此の間ひたすら精神を修養し或は人生の大
問題を攻究し或は希臘の古詩歌を玩味しさて一千八百七十一年に至りて再び詩
壇にあらはれたり。胸中成竹ありて詞藻また豊かなり最近英國思想の謳歌者と
してブラウニングが名を不朽に傳へし作は此の際に出でたり今其の名あるもの
を下に掲ぐ。

"Balaustion's Adventure" (一八七一)。"Prince Hohenstiel-Schwangau" (同)。"Fifine at the Fair" (一八七六)。La Saisiaz (同)。Dramatic Idylis 二卷(一八七九—八〇)。Jocoseria (一八八三)。"Fersbtah's Fancies" (一八八四)。

後ち又 Parleyings with certain People of Importance" (一八八七)及び "Ascando" (一八八九)の二篇を作し同八十九年伊太利に沒しき齢七十八

晩年の作中『アソランドー』は二十五年にものせし "Dramatis Personae" 以來の名作と稱せらる。總じてこの期の作には異樣の無韻律語を用ひ普通の話說躰と劇詩の獨白躰とを相交へたり。この獨白躰はブラウニングが終生棄てざりし筆致なり。

ブラウニングが作の是非は今尙ほ全く確定するに至らず況んや當年に於てをや。其の中年以後二三の聰明なる批評家は彼れが作の美を看取せりしが多數の讀者は蕪雜、粗笨、險晦、含糊等の非難を挿みて一概に彼れを斥けたりき。或は附加して褒稱せし輩あるも只漠然と其の清新の致を認めしのみ何れの個處に眞個の妙あるかを明知せざりしが故に世間多數の嘲罵非難(就中大學出身者の劇しき攻擊)に對しては作者を回護するの辭を知らざりしなり。所詮當時のブラウニング黨が勢力はいと微弱にして窗に世間に向ひて十分にブラウニングを推擧する能はざりしのみならず自家はた其の妙を會得する能はざりしなり。然れども彼れが作も追々に出で十年二十年を經過するにつれて世間の非難も流石に舊の如く頑ならず又其の景仰者も漸く其の所信を固め文壇の一隅に所謂ブラウニング社(カルタス)を起し一千八百八十一年には公然ブラウニング研究會といふを組織し、入會者には其

の趣意書を交附して贊成の意を表せしめ且つブラウニングが特殊の辭句譬喩等を解するが爲めに『ブラウニング辭典』を編するに至りぬ。崇拜者の運動斯の如くなりしかばブラウニングを檪斥する聲更に起ちて反對運動を試みこゝに再び批評海の一大波瀾を捲き起しき。さもあれ今此の種愛憎を脱し虚心にして彼れが作を觀るに(ブラウニングは圓滿の詩人とは稱すべからざるも偉大の詩人たること)と爭ふべからず、其の缺點は其の詩の形にありて、其の内容に存せざればなり。

論者曰はく、新詩人中の新詩人たりしブラウニングの如き作家には、多少の破格も許さゞるべからず、時尚に先だてる思想は時尚の言語のみをもて表しがたければなり。其の晦澁を以て難ぜらるゝも止むを得んや。カーライルが散文も嘗て晦澁の譏を得たり、散文既に然り況んやカーライルよりも更に幾歩をか進めたる新思想新感情を新躰の詩歌に表はすに於てをやと。是れ今のブラウニング黨の所論の要たり。然るに、他の論者は曰はく、所謂新詩人は平順の語を以てしては其の情思を表現する能はざるか。詞意の險晦は技(アート)の足らざるに因するにはあらざるか。テニソンが或作の如きは雅馴穩健の詞致をもてして能く時尚に先だてる感想を歌へるならずや。所謂新詩人は何故に通常事を歌ふ場合にだに晦澁險怪なる語を用ひざるべからざるか、云々。是れ非ブラウニング派の今尚主張する所なり。よしとするものは缺點にだに私し、難ずるものはひとへに其の短を擧げて其の長を蔽はんとす。世の論客が是非は概してかくの如しよく其の兩端を叩かん者ひとり能く事物の眞を知らん。按ずるに、新思想を抱くもの世に之を傳へんとするやひたすら言はんとするに急にして語を擇ぶに暇なく、勢ひ含糊不明の章をなすこと多し。必しも「新想を表白せん爲には新辭を要す」と自矜して後に然るにはあらじ、論者が此の故に其の技の不熟を非す、當を得たりといふべし、而も新詩人の作に遇ふや、毎に技の不熟を咎め、其の想の美を棄却せんか批評家の任務何の邊にか存する。抑も批評家は一面讀書社會の側(サイド)に立ち、作者に對して適當なる注意と箴戒と奬勵とを與ふると共に、一面作者の側(サイド)に立ちて世間の爲に新聲を通釋し、懇に作者の足らざるを補ひ、將さに來らんとする新思想、新信仰、新希望の光明を傳へざるべからず。此の約束に外れたらんものは批評の一大要義を忘れたるものなり。畢竟、ブラウニングが是非の山來は、テニソンの對照に基く所多し、テニソン

が典雅渾成の筆と相比して其の澁晦の一層きはだちて見られたりしに因る。又其の格外に賞揚せられしは、其の思想のテニソンのに比して遙に高遠なりしと同時に、テニソンに對する社會の歡待のあまりに甚しかりし反動なり。いづれにもせよ、ブラウニングが運命は彼のバーンス、キーツ若しくはウォルヅヲオス、シェリーに比すればむしろ幸ひなりきといはざるを得ず彼れは其の存生中に十二分尊仰を得たればなり。以下少しく彼れが作について觀ん。

彼れが諸作は其の形の上より見るに概して律呂（リヂム）と押韻（ライム）との調諧なきものにして、其の詞の如きも往々にして滑稽劇の人物の白の如く、或は電信用の文句の如く、簡に過ぎて義をなさゝるが如きもの多し。言語を思想の符號となさんか彼れが語は更にまた他の語の符號たりしなり。其の長篇を讀者の厭ひて、重に其の短篇をよろこびしは徇に所以あり。加ふるに、彼れは詩中に於て、或は「人心の解剖（ソウル、ヂスセクション）」を行ひ、或は哲理上の議論を試み剩へ生硬若しくは險晦なる言辭を以て之れを行りしかば、讀者はいよいよ其の解に苦みたり。彼れが作に對しては「質（マタル）を減じ文（アート）を加へよ、と求めざるを得ず。さもあれ、彼れが詩には一種いふべからざる情趣ありて、知らず識らずの間に人を魅するの力ある、ドライデン以後空絶と稱すべし。且つや、心理上の研究を利用して悲哀と滑稽とをほしいまゝにしたる技倆はシェークスピヤ以外殆ど空絶なり。セインツベリ氏曰はく「彼れが宗教は所謂正統宗ならずとするも、また彼れが哲學思想は漠然不整なりときするも、神學、哲學及び倫理學に關しては彼れ常に天使の側に立てりき、又其の政治意見の如きも其の甚だ茫漠として空理たるに過ぎざりしにも拘はらず、常に公明にして正大なりき」と。さて又其の劇詩の方は舞臺上の技倆を缺きし爲めに實際の脚本作家としては殆ど稱するに足るものなかりしも、人物の性格を活現する技倆は頗る歎美すべきものあり。又自然の風物を歌ふに於てウォルヅヲオスの如く精妙ならざりしも、其の不羈宏恢の氣ある所は殆ど何人も及ぶ能はじ。要するに、ブラウニングは之れを抒情詩人として見れば最高作家の一人なり。彼れは悲哀の歌を能くし、又戀愛を歌ふに巧みなりき。總じて短篇に其の最長を見る。中にも "Asolando" に收めたる六篇の如きは、麗調といひ、色彩といひ、思想といひ、共に頗る見るべきものなり。"Pippa Passes" に收めたる "Through the Metidga" "The Lost Leader" "In a Gondola" "Earth's Immortalities"

"Mesmerism" "Women and Roses" "Love Among the Ruins" "A Toccata of Galuppis" "Prospice" "Rabbi Ben Ezra" "Porphyria's Lover" "After" 等數十篇(殊に "Last Ride Together" の篇)の如きは抒情詩中醇乎として醇なるもの、彼のテニソンが夢幻的作物と相對して一代の珍たり。

ブラウニング女史エリザベス、バーレットは、夫よりも六歳の姉なりき、又其の名聲は普通の讀詩社會には一時は夫よりも高かりき。女史は一千八百六年ドルハムなるカルトンホールに生れき。父は西印度なる某地の領主なりしが、家產豐かなりしかば、或はヒヤフォードシャヤに、或はロンドンに轉住し又デヴンシャヤに漫遊せり。此の漫遊中、エリサベスはいたく健康を害ひ、加ふるに父厄に遭うて其の資產を失ひしかば、決然一枝の彤管によりて一家を支へんと志し、廣く古今の詩歌小說を讀み作文の初步より自修を始め兼ねて希臘語をも學び刻苦精勵の末遂に一千八百二十五年 "Essay on Mind" (『人心論』)といふ論文と數篇の詩歌とを世に出だしき。時に齡二十歳なりき。これより十餘年間は別にいふべき程の作なし。同三十八年 "The Seraphims" 外數篇の詩を物しき(是れロバード、ブラウニングが初めて文壇に出でし程の事なり)。同四十六年『詩集』を出版し此の年ブラウニングと結婚す時に女史年四十一歳ブラウニングは三十五歳なりき。ブラウニングは其の家人の不承諾を意とせずして女史がみづから擇びし夫なりきといふ。かくて夫に從ひて伊太利のフロレンスに其の病を養ひ同四十九年一子を擧げ翌年其の『詩集』を出版せり夫人が名作は大抵前年の詩集と此の集とに收めらる。其の翌年 "Casa Guidi Windos" 及び "Aurora Leigh" 成り同六十年 "Poems before Congress" 成りぬ其の三篇は其の夫の詩に呼應する所少からざる爲め却りて其の特得の長所を損ぜし趣あり。翌年六月フロレンスに歿しき。遺稿 "Last Poem" は其の翌年世にいでき。

ロバート、ブラウニングがもてはやされしは夫人が歿後なり其の生前にはバーレット女史あるを知りてブラウニングあるを知らざりし者も多かりき。高遠なる詩人としては女史の其の夫に及ばざるや明かなれど夫人また英國の女流詩人(抒情詩人としてクリスチヤナ、ロセッチ女史を除きては前後及ぶものなき技倆を有せり。其の詩(殊に晩年の作)は夫ロバートの詩風を學びたるが爲め詞句の意義不明なる所少からねど尙ほ其の夫の如く甚しからざりしのみならず間〻其の朦朧たるが

爲に神秘的感情を寫し得たることあり而して其の少時の不幸と多病とより來れる悲哀の感想は屢〻可憐巧妙の詩となりて其の愛讀者を泣かしめたり。蓋し(一)其の至誠なる宗教心はよく其の作品を高からしめ("Cowper's Grave"は其の好例)(二)其の博愛慈悲の主義はフッドが作ヂッケンスが作と呼應し("The Cry of the Children")(三)其の女性の特技は其の家庭的切哀を寫すにあらはれ("Isobel's Child")(四)其の傳奇的空想("The Duchess May"及び"The Brown""Rosary")と(五)其の倫理及び政治の思想("Lady Geraldine's Courtship")はた讀詩社會の愛を博しき。さて其の辭句は律格押韻共に嚴正なるにはあらねど諷詠の間言ふべからざる情趣あり其の詞の選擇は間〻宜しきを得ざりしかど尙創新の譽れあり。其の悲哀を敘するや女子の癖としてやゝ饒舌に流れたる所もあれど眞實と純粹とを失はずして句々能く人を動かす。而して自然の風物を歌うて繪畫の如き妙ある當時テニソンを除きては敵するものなかりき。按ふに夫人が長く病みて其の病室に閉居せしや常て刻苦自修の際に硝窓を隔てゝ觀賞せりし遠山近水を憶ひ起し其の身の自由ならざる爲に一しほ自然の悠々たるを慕ひ之れを翫賞するの念更に深きを致せしものあらんか。さて女史が十四行詩(ソネット)に至りては遠くテニソンの上にあり其の夫に送れる"Sonnetes From Portuguasee"の諸篇の如きはシェークスピヤ以後十六七世紀の名篇と伯仲の間にありと稱せらる。但し女史が作に一大缺點ありそは女流作者は通弊ともいふべき一種の自信强く毫も他の批評を顧みざるのみならず反省の念に乏しく只管才に任せて作することと是れなり。識見素養の深からざる一女子にして之れを爲す失なきを得べけんや。其の律格と其の押韻とが杜撰に流れたること屢〻にして破格の詞句頗る多かりき。此の弊尤も其の初期の年に多しブラウニングと結婚するに及びて夫に敎へられてやゝ此の失を改めきといふ。而して其の主題を擇ぶや亦た甚だ杜撰なりき或は他が物せる小說の筋を其のまゝに歌ひ或は一知半解にして或種の哲理を詠ずるなど識者の顰を買ふもの一二のみならず。女史が長所の缺點と共に彫しきは彼のバイロンにいとよく似たりき。一言にて蔽へば女史は實に一世の才女にして鬼才ブラウニングの妻たるに愧ぢざりし者なり。

第十八章　其の他の詩人

マッシュー、アーノルド――ブリ、ラファエル派――其の作及び特質――ロセッチ兄妹――其の作及び特質――オシローチシー及びトムソン――タッパー以下の諸詩人――スパスモディック派物派――クラッフ――ロッカー――リットン――セオリス――スチンバーン

テニソンとブラウニングとが第十九世紀後半の文壇に日月の如く輝きし時尚別に幾多の明星ありて天の各方に燿けりき。中につきて最も著きをマッシュー、アーノルド。ロセッチ。ロセッチ嬢。トムソン。クラッフ。ロッカー。リットン等とす。左に順次に略敘すべし。

マッシュー、アーノルドは詩人としてテニソン、ブラウニングに次ぎしのみならず批評家としても一世に推重せられたり。一千八百廿二年に生る父は有名なる博士アーノルドにしてラグビー大學の敎頭なりき。幼時にはニューヂゲートとラグビーとの小學にて敎育を受け後ちバルリオルに轉じて一千八百四十年同校を卒業し同四十五年オーリエルの校友に推選せられき。これより學務監となりて終生此の務めに服しき。同五十七年より十年間はオックスフォートの詩學敎授を兼ね其の名いと高かりき。是れより先き同四十九年始めて "The Strayed Reveller and Other Poems" と題する一詩篇を公にし又同五十三年には "Poems"(『詩集』)を世にいだしゝが後者は其の序文の巧妙なると名篇の多く收められたるとを以て名あり。同五十八年希臘劇と英國劇とを折衷せる戲曲 "Merope" といふを物せしが此の篇はスヰバーンが "Atalanta in Calydon" 及び "Frechtheus" と共に其の種の作中の傑作と稱せらる。かくて後ち暫くは公務の多忙なりしと散文の著述の繁かりしとによりて詩歌を作する暇なかりしが同六十七年に至りて又 "New Poems" といふ集を著し爾後陸續作を絕たず一生中の作集めて五百ページの大冊をなすに至りき。一千八百八十八年歿しき齡六十三

現今に及ぶまでアーノルドを批評する者に二派あり一は彼れが散文を推重して詩歌を貴ばず一は彼れが詩歌を愛でゝ散文を珍とせず。兎も角も彼れは兩方面に秀でたり就中詩人として世に知られしは散文家としてよりも二十年の前にありき。

アーノルドは其のはじめ深くウォルズヲオスを景慕せりき其の晩年にはウォルズヲオスが缺點若干を擧げて論難せしことも有りしが其の私淑せしこと深かりしは

其の詩躰に掲焉たり。又ミルトンの風調をも學びたる跡あり。又半無意識にしてテニソンの影響を受けしことも少からず。而もテニソン、キーツ等がローマンス派の流麗華縟なる作に對しては反動し力を竭して別に新古詩派(ニュー、クラシック)を建設せんと欲しき。一面よりいへばアーノルドは所謂「正格(コレクトネス)」派に屬する者なり「ポープ」が十八世紀の正格派なりしが如くアーノルドは十九世紀の正格派なりき換言すれば結構詩句の格法を重んじ辭を彫琢すると共に情理趣致の洗錬を勗めたりき。されば其の作の最も秀でたるものに至りては其の妙十九世紀詩人中第一に位すべきものもありしなり。批評と創作とが別才に屬するとは嘗て論ぜられたる所なれども最近代の論者は一歩を進めて「批評の能なき詩人は未だ圓滿といふべからず而して詩才ある批評家は眞に無上なり」といはんとす。第十九世紀の詩人について之れを見るに獨りコールリッヂはアーノルドより五十年代の前に出でゝアーノルドにひとしき學者にして兼ねて詩人としては寧ろ一等を進めたるものなりき而も其の自作自評はアーノルドには嚴ならざりき。スコット、バイロン、キーツに至りてはもとより正當の學者批判家にあらず、シェリー、テニソンは亡批判家たる譽れなかりき。此れによりて之れを觀れば或一派の徒がアーノルドを稱揚して九天の高きに置かんとするも其の所以なきにあらず。

自作自評して自ら勵むことはアーノルドは夙に實行せりし所なるが故にや其の初期の作既に見るべきもの多し。中にも最も名あるもの二三を擧げんにシェークスピヤを歌へる十四行詩(ソンネット)は莊麗にして嫻雅坐ろにドライデンが名句を聯想せしめ"Myceirinus"といふ六行一解の詩はよく光をテニソンと爭ひ"The Church of Brou"は結尾に無限の餘韻あるを以て名あり(こはアーノルドが一生に通じたる特色なり)。其の他"Requiescat"は精妙なる挽歌と稱せられ"Switzerland"には斬新奇警の詞致あり、而して其の獨白劇(モノドラマ)Strayed Beveller"及び"Empedocres on Etna"はやゝ後に成れる"Merope"と共に一種の抒情歌として大に見るべきものなり。物語歌には優婉なる"Sohrab and Rustum"あり。"The Sick King in Bokhara""Balder Dead""Tristram and Iseult""The Scholar-Gipsy"の如き皆佳作なり。總じて短篇を佳とす是は十九世紀後半期の詩歌の特質なるが如し。中にも"The Forsaken Merman"は觀念の深邃よりは思想の創新と興趣の湛々とを以て著はれ"Dover Beach"は彼れが散文中の殊な

る宗教思想を聲調めでたき韻語をもて表はしたるが故に名あり而して "Beechnalia" 及び "Summer Night" これに次く。彼れは頗る退懐(メランコリー)の詩を好みきウォルッチオス及びハイチを歌へるものの如きは其好例なり。就中『ウェストミンスターアッベー』は其の語意の莊重端嚴ミルトンが "Nativity Ode" に匹敵すと稱せらる。蓋し此の作ミルトンを聯想せしむるものあるは決して偶然にあらずアーノルドは常に詩題の撰擇に重きを置きて經營頗る力めたりしなり。現に前にいへる『詩集』の序文中に「詩題」に關して論じたることあり謂へらく「詩歌の貴きと然らざるとは全く主題の大小によるともいふべし些末の事を捉へ刹那の感想を寄せて之れを歌ひ以て一時の歡を買はんとするは是れ豈に最近詩人の通弊にあらずや。かゝるに詩篇を取りて之れを推奬し兎に角に其の多からんを望む是れ豈に最近批評家の通弊にあらずや。百千の螢火は一月の明に如かず片々たる小品朝に作せられて夕に讀まる爲す所果して幾何かある」と。按ずるに古今の大詩篇主題の大なるものもとより多からん而も其の盡く然るか否か輕々しくは斷ずべからざるなり。所謂大詩篇とは何ぞ。絶妙の詩篇といふ意か。主題の大ならざるもの何故に絶妙なるを得ざるか。大主題のみを歌ふべしとせんか詩人の主題は遂に盡くるの虞なきか。悉くアーノルドがいふ所に從はゞ吾人は遂にミケランゼロ又はレオナルド、ダ、ヴンチエ等をすてゝ彼のピラミッド若しくはエスキュリアルなどいふ粗大なるものゝ計畫者を尊ばざるを得ざるに至らん。豈にかゝる理あらんや。蓋しアーノルドが作はた常に彼れが言に副はざりしものゝ如し。そは兎も角も彼れが作の最も妙巧なる者に至りては其の數割合に少きだけに英詩の衆妙を盡したりと稱して溢美ならざるもの間〻あり。是れ彼れを好む者の彼れをテニソン、ブラウニングの上に置かんと欲し彼れを好まざるものだに其の人道(所謂大題目)發揮の功をたゝへて彼れに同情を表する所以なり。

前にもいへる如くマッシュー、アーノルドはもとウォーヅヲオスの流れを汲みて其の詩田に灌せし人なり而して彼のキーツ、テニソン一派がローマン派の潮流に對しては力を極めて其の防遏に勗めしか故に此の流れは爲めに方向を轉じて所謂プリラファエル的運動(Pre-Raphaelite Movement)の一潮流となり、延いて今日の詩界に及べり。ローマン派とプリ、ラファエル派とは共に彼の宗教上の一派「オックスフォード」派

の運動と密接の關係を有し始終これに助けられて其の勢を加へしものなり。さてプリ、ラファエル派の起りしは第十九世紀の中葉にて當時はアーノルドを首めとして有名なる詩人批評家のうちにこれに反抗せし者も少からざりしが此等二三子の死後は其の志を繼ぐ英才なく而して新派の方にはロセッチ、モオリス、スヰンバーン等の名家出で中にもスヰンバーンの如きは今も尙存生せる程なれば此の派は遂に全勝を得現に英國詩壇の大半を占領す。

かプリエル、チャールス、ダンテ、ロセッチ(通稱ダンテがプリエル、ロセッチ)は一千八百二十八年ロンドン府に生れき。父は詩人と批評家とを兼ねたる伊太利人なりしが本世紀の初め故ありて脫國し先づメンタに走り次いで英國に住みこみにき。かくて英國にて妻を娶り(伊太利人と英國婦人との間に生れし女)四子を擧げき皆文才ありがプリエルは其の第三子なり。兄 W. M. Rossetti は有名なる批評家にて姉マリヤ、フランセスカもダンテの略評を著して名あり。妹クリスチャナ、ヂールヤナにつきては後にいふべし。さて父はロンドンなるキングス、コレッヂといふ大學に伊太利文學の教師となりて熱心にダンテを講說しがプリエルも夙に此の學校にて教育せらるゝことなりしが彼れ生來いたく繪畫を好みしかば十五歲の時同校を退學しロイヤル、アカデミーに入りて畫を專攻することゝなりぬ。かくて二十年間は此の業に從事して名聲ありき。されども幼時より作詩にも從事し一千八百五年にはプリ、ラファエル派の雜誌に "Germ" と題せる詩篇を揭げ同五十六年には『オックスフォード、アンド、カムブリッチ、マガッシン』といふ雜誌の寄書家となり同六十一年には古代伊太利誌の飜譯と自作の『詩集』とを公けにしき。同七十年又『詩集』を著し後八年にして "Ballads and Sonnets" を出版せり。一千八百八十二年病を得て歿しき。齡五十五

以上の詩篇は大抵彼のモオリス、スヰンバーン等の作に先導せられて世に出でしが實際を言へばロセッチの二人に影響せし所も尠からざりき。此の三詩人は全く同一の詩風を奉じて立ち以て一派の根抵を固めし者なれど流石に各々特色あり。モオリスは佛蘭西英吉利の中古の詩風を慕ひスヰンバーンは廣く自國古代の作に其の模範を求め而してロセッチは傳來の伊太利文學の上に脚を立てんと試みき而も共に中古派に屬せしは明かなり。ロセッチが壯時の作 "The Blessed Damsel'

を取りて之れに見るに其の想を全くダンテか或節より取り來りて之れに中古佛蘭西風の快活と中古英國風の創新とを加へたるが如き跡歴々たり。否な彼れが一生の作は大抵然るのみならず中古の荒唐なる思想感情に加ふるに十九世紀風の半ば神秘的なる幽玄の趣致を以てせしものいと多し。初期の作中見るべきは "Love's Nocturn" "Troy Town" "Sister Helen" "Penumbra" "The woodspurge" 等なり。第二の『詩集』は前の『詩集』に追加せしものにて前のに比して異風なるは "Rose-Mary "The White Ship" "The King's Tragedy" 等の物語歌の加はりたるにあり。以下少しく彼れが特質を評せんか。エミー、シープは曰はく

彼れに取りては戀愛は一種の神祕的情熱にして、後もまた幽遠不可思議なる精靈の感應を一種の符合を以て表現せるものに外ならず

とげにや彼れはかゝる點に關してはダンテとやゝ趣きを同うせるならん。蓋しロセッチの戀愛は闇黑面なき戀愛なり。人間に於ける天道を鞏固にするもの是れ即ち彼れが戀愛にして斯かる戀愛は男女が形躰己上の美若しくは恒に「精靈に宿れる形躰の美」を相思するより生ずるものなり。而して其の精靈といふは皆中世伊太利詩人のいへりしものに同じく最近英國の思想には既に跡を絶ちしものなりしなり。實に彼れは最近の思想に對しては殆ど感ずる所なかりしものゝ如し十九世紀歐洲思想のほのかにも見らるゝ作は一生中二三篇に過ぎず。

要するにロセッチが特質は其の作の繪畫的なるにあり其の中古の思想感情をスコットより一層深く詩中に蘇生せしめんと勗めながら尚十九世紀的幽玄の趣致を帶ばしめたるにあり其のコールリッヂ、キーツによりて一たび試みられ更にテニソンに至りて漸く成熟するに至りしロマンチック詩句及び語調を一層圓熟せしめたるにあり。シーヤプ又曰はく

早年に於けるウォルヅオルスとコールリッヂとの間には作詩の標的に於て著き差あり日常の生活を詩界に取り入れんとするはウォルヅオルスにして實在の眞意義を現はさんが爲めに實際以上の事柄を歌ひ以て人間の感情の度を知らんとせしはコールリッヂなり「エンシェント、マリナー」「クリスタベル」「クブラー、カン」の如きはこれなり。而してキーツまた彼の「永く忘られたる仙境」の秘を探りて其の "La Belle Dame Sans Merci" "The Eve of St. Mark" の篇を得たりき。而してこの二人が數回遊歴を試みし此の異境は實にロセッチが生國にして妖魔仙童の出沒往來する此の夢幻の靈域はロセッチが得意の彩筆に最も適したるもの

、ロセッチの小妹は名をクリスチナ、ヂョールヂナと云ふロセッチ嬢とて才貌双絶の名ありき。嘗て兄ロセッチがテニソンの作"Morte'd Arthur"に基つきて皇后の愁然として思ひくづをれたる姿を畫きし時其の畫の標本となりしは此の女なり。一千八百三十年に生れき。熱心敬虔なる教會員にして母に仕へて孝順身を持すること貞淑女詩人の模範たるに堪へたりき。同九十四年に歿しき。

其の作は多からず始めてものせし詩篇は題して"Goblin Market and Other Poems"といひ一千八百六十一年出版せられき。次ぎを"The Princes' Progress"といひ同六十六の兄ロセッチの挿繪を添へて公にしき。數年の後"Sing Song"を著しゝがそれより同八十一年までは取りたてゝいふべき作なし。此の年"A Pageant and other Poems"を著はしき。

今日に於けるロセッチ嬢が評價は甚だ高く批評家は之れをブラウニング夫人に比較して其の變化の多きと作の夥しきとに於ては彼れに劣る所なれど其の瑕疵いと少なく未練舌長の弊なく温柔優雅なる點は彼の夫人に優るとなせり。兎に角大躰よりいへば英國女詩人(抒情詩につきていふ)中嬢に匹敵するもの殆んど無しともいふべからん。其の最初の集に於ては彼のブリ、ラファエル派の特質のあまり著るく現はれやゝ厭はしく思はしむる情を惹起するものあれど次ぎにものせる"Dreamland""Winter Rein""An End""Echo""The Three Enemies""Sleep at Sea"樂曲"When I am Dead, My Dearest"及び夥多の十四行詩(ソンチット)は何れも精妙の頂に達しよく此の派の粹を表はせり。而して"A Pageant and Other Poems"は前の二集に比して嚴肅の趣致滑稽の旨味双つながら勝りたり蓋しロセッチ兄妹は共に諧調(ユーモル)に長じたりしなり。要するに其の名作を收めたる"Collected Poems"一卷は英國古今の抒情詩集中稱に見る所なり最も可憐にして情趣深き花籠にも喩ふべく嬢が贈遺の餘香は今尚馥郁たる感あるなり。

ブリ、ラファエル派は今も尚ほ盛んなれども當時(今より三十年前)に於てはロセッチ及びロセッチ嬢とモオリス、スヰンバーンとの外は其の派の作家中世に聞えたるものなかりしが尚仔細に該派中英才を探れば散文の名家を兼ねたるヂョン、シモンヅ John Addington Symonds 逸才の盲詩人にして其の名はたゞ朋友の間にのみ高か